

STUDIA TIBETICA No.44

西 蔵 仏 教 宗 義 研 究

第 九 卷

——トゥカン『一切宗義』 「カダム派の章」——

༄༅། །ཐུང་བཀའ་གྲུབ་མཐའ་བཀའ་གདམས་པའི་སྐབས། །

財団法人 東 洋 文 庫

2011

STUDIA TIBETICA No.44

**A STUDY OF THE GRUB MTHA' OF
TIBETAN BUDDHISM**

VOLUME 9

**The Chapter on the bKa' gdams pa
of Thu'u bkwan's *Grub mtha' shel gyi me long***

**Maho Iuchi
Chizuko Yoshimizu**

**The Toyo Bunko
Tokyo 2011**

まえがき

本研究出版は、昭和36(1961)年以来、東洋文庫で行われてきた「チベット人との協同によるチベットの言語・宗教・社会の総合的研究」の成果の一部である。

トゥカン・ロプサンチュエキニマ Thu'u bkwan blo bzang chos kyi nyi ma (1737-1802) の『一切宗義』の各章について、東洋文庫では翻訳研究を継続して行なってきたが、本書が扱う「カダム派の章」は、チベット諸宗派の歴史と教理を述べる章で唯一残されていたものである。「カダム派の章」について、これまで成果報告がなされなかった経緯は不明であるが、それはあたかも今というこの時を待っていたかのようなようである。まさに近年、新しい写本群の発見と『カダム文集』（『噶当文集』百慈蔵文古籍研究室編、四川民族出版社、成都、2006-2009）の出版により、従来は後代の文献によってしか知られてこなかったカダム派の実像が我々の前に開示されたからである。新出カダム派文献の研究は始まったばかりであり、それが全貌を現わすまでにはまだ時がかかるであろう。それはあるいは、トゥカンがここで描いたものと異なっているのかもしれない。しかし、カダム派とその時代、教義がチベット仏教研究の新たな核となりつつあるこの時に、本書を出版できることはこの上ない喜びである。

本研究は、いち早くカダム派に注目し、文献とフィールドの両面からカダム派史の研究に取り組んできた井内真帆氏の協力なくしてはできなかつたものである。序論「カダム派の時代」は吉水が執筆した。新しい段階をむかえたカダム派研究にとって必要と思われる視点を提供したつもりである。本論「トゥカン『一切宗義』「カダム派の章」訳註研究」は井内氏が担当し、東洋文庫チベット人研究協力者ガワン・ウースン Ngag dbang 'od srungs 氏と吉水の協力のもとに完成させた。井内氏のこれまでの研究成果が存分に盛り込まれたものである。「チベット語原典対照校訂テキスト」は、ゴンルン版、シヨル版、デルゲ版を用いてガワン・ウースン氏が作成、井内氏が校正した。索引は井内氏が作成、序論・本論と索引の校正には、根本裕史氏、岡田憲尚氏、池尻陽子氏の協力を得た。

諸氏の尽力に心より感謝すると同時に、本書がカダム派研究へのささやかな貢献となることを願ってやまない。

平成23年3月

吉水千鶴子

目次

まえがき

目次…………… i

序論 カダム派の時代…………… 1

本論 『一切宗義』「カダム派の章」訳注研究…………… 11

凡例…………… 12

I トウカン『一切宗義』「カダム派の章」と

カダム派の歴史…………… 13

1 「カダム派の章」…………… 13

2 「カダム派の章」の典拠としての「カダム仏教史」
…………… 15

3 「カダム」という名前の由来…………… 19

4 カダム派成立の背景…………… 20

1) 後伝の興り…………… 20

2) ドムトンパ略伝—ラディン寺建立縁起—…………… 23

5 カダム派の展開…………… 30

1) 「クムチェースム」の時代…………… 30

2) カダム派と寺院の変遷…………… 32

II 『一切宗義』「カダム派の章」和訳と註釈…………… 37

「カダム派の章」章節・科段目次…………… 37

和訳と註釈…………… 39

Ⅲ チベット語原典対照校訂テキスト	69
凡例及び注意事項	70
チベット語原典対照校訂テキスト	71
略号と文献一覧	92
索引	111
人名	111
地名・寺院名	118
書名	121
用語	124
あとがき	128

序論

カダム派の時代

チベット仏教の再興と周辺仏教文化圏との交流

チベットで古代王国（吐番）分裂（843年）後の混乱期をへて、仏教が再興されたのは10世紀後半から12世紀にかけてのことである。「後伝期」*phyi dar* と呼ばれるこの時代は、大僧院を中心に発展する諸宗派の礎が築かれ、今日まで継承されるチベット仏教の基盤が作られた時である。仏教の再興とは、衰退した寺院や僧院の復興、戒律と出家教団の再興、經典の翻訳事業の再開、僧院における学問と修行の新たな体系化を意味する。それを支えたのは地域の王族たちであり、また周辺仏教文化圏との人的交流であった。そしてその中心的担い手が、後に「カダム派」*bka' gdams pa* と総称されるチベット僧たちである。

仏教再興とカダム派に関する我々の知識は、『テプテルゴンポ』 (*Gos lo tsā ba gzhon nu dpal*, 1392-1481, *Deb ther sgnon po*)、『プトン仏教史』 (*Bu ston rin chen grub*, 1290-1364, *Bu ston chos byung*)、そして本書本論I:2で解説される『カダム明灯史』 (*Las chen kun dga' rgyal mtshan*, 1432-1506, *bKa' gdams chos 'byung gsal ba'i sgron me*) などの「カダム仏教史」文献群といった後代の歴史書に依ってきた。本書に訳出したトゥカンの記述、羽田野伯猷氏など現代の研究者のカダム派研究も多くをこれらに依拠している。そこで描かれる仏教再興の物語は、どこか前伝期 *snga dar* の仏教導入と似た輪郭をもつ。古代王国ティソン・デツェン王 *Khri srong lde btsan* (在位 754-796) によるインドのナーランダ *Nālandā* 大僧院の学僧シャーンタラクシタ *Śāntarākṣita* の招聘の物語は、西チベットのグゲ・プラン王 チャンチュプ・ウー *Byang chub 'od* によるヴィクラマシーラ *Vikramaśīla* 大僧院のアティシャ *Atiśa* (982-1054) の招聘の物語に重なる。前伝期における仏教導入の内実が、寺院・僧院の建立、戒律を受持する出家教団（僧伽）の設立、經典の翻訳事業と教義の伝承であったように、後伝期における仏教再興も、これらの再興の物語として語られ、インドからの大学僧の招聘をクライマックスとして、チベット仏教史の新たな頁が始まるのである。「カダム派」はアティシャの弟子ドムトンパ *'Brom ston pa rgyal ba'i 'byung gnas* (1004/5/6-1064) を開祖とし、その建立によるラディン *Rwa sgreng* 僧院を拠点として、その系譜が描かれる。11~13世紀にかけて多くの学門寺が建てられ、後のチベット仏教の基盤形成に大きな役割を果たした。しかしながら、「カダム派」はやがてチベット仏教史の表舞台から消えてしまう。ゲルク派やその他の宗派に吸収され、本論I:5で詳説されるように、ほとんどの寺院が衰退、あるいは他宗派に改宗した。「カダム派」とは何であったのか。

この問いに真の意味で答えられるようになるための環境がようやく整いつつある。『カダム文集』 (『噶当文集』百慈藏文古籍研究室編、四川民族出版社、成都、*bKa' gdams gsung 'bum*, *dPal brtseg bod yig dpe mnying zhib 'jug khang*, *Si khron mi rigs dpe skrun khang*, Chengdu, vols.1-30, 2006, vols.31-60, 2007, vols.61-90, 2009) の出版により、これまで見ることができなかった、存在すら知らなかったこの時代の第一次資料の写本影印版が公開されたからである¹。我々はカダム派論師たちの声を直接聞くことができるようになった。『カ

ダム文集』収録外の新出写本もあわせると、すでに幾つかの校訂テキストと研究が発表されている²。最新の研究成果は、2008年にエモリー大学 (Emory University, Atlanta, USA) で開催された第15回国際仏教学会 (The 15th Conference of the International Association of Buddhist Studies) でのパネル "Tibetan scholasticism in the 11th and 12th centuries" の論文集 (Pascale Hugon and Kevin Vose (eds.), *Journal of the International Association of Buddhist Studies*, vol.32 number 1-2, 2009 (2010)) である。加えて近年のチベットでの調査により、現存する元カダム派寺院の様子や歴史も明らかになってきた³。今後急速に「カダム派」の実像が明らかとなっていくことが期待される。

従来の限定された知識からも推測されてきたことだが、カダム派の時代とは、チベット人たちが自らの手で仏教の伝統を再構築していく気概に満ちた時代であった。新しい仏典や思想の輸入、チベット人自身による教義解釈、僧院での教育システム作り、著作活動が盛んに行なわれた。この新たな飛躍は、しかしながら、前伝期に導入された仏教がしっかりと根付いていたからこそ可能であった。古代王国分裂後、国家という支持基盤は失われたが、民間レベルでの仏教の伝承が途絶えたわけではない。中央チベットでは、大きな出家教団の維持と大規模な經典の翻訳事業は経済的理由で困難となったかもしれないが、古代王国がかつてその支配下に置いた周辺地域で、仏教は存続していた。現在の青海、四川、雲南地域ばかりではなく、敦煌を中心とする河西回廊からコータンにいたる西域南道にかけての中央アジア一帯は、直接的間接的にチベット王国の支配を受けた。中央アジアから出土した多量のチベット語文書は、この地域において、王朝崩壊後もなお、チベット語が公私にわたる多民族の共通語 (リングフランカ) であったことを示すばかりでなく、そこに含まれる多数の經典、とくに密教經典の存在は、トルキスタン、河西一帯で漢人、ウイグル人などの間にも仏教が浸透していたことを裏付けるものであった⁴。こうした古代王国の遺産が、東西チベットにおける戒律復興の素地となったのである。このシルクロード沿いの地域に10世紀以降も存続していた仏教が、インドからチベットをへて伝わったものなのか、あるいは古代王国期にもそうであったように、中国から伝わった仏教と混淆したものなのか、まだわからない。だが、後伝期のチベット人たちは、前伝期同様、正統な

¹ これらの文献の発見の経緯と内容についての詳細は井内 (2006)、加納 (2007) (2009)、吉水 (2008) など参照。

² Tauscher (1999) と Hugon (2004) が『カダム文集』に先んじて出版された。またシャン・タンサクバ Zhang Thang sag pa 'byung gnas ye shes/ ye shes 'byung gnas (11-12c.) 著『中観明句論註釈』*dBu ma tshig gsal gyi ti ka* 写本に関する吉水の研究 (2006) (2007) (2009) がある。ゴク・ローデンシェーラブ rNgog blo ldan shes rab (1059-1109) の著作研究として Kano (2006) (2008) (2009) などが挙げられよう。チョムデン・リクレル bCom ldan rig ral/ rig pa'i ral gri (1227-1305) の伝記、著作、彼が編纂した大蔵経目録については、加納 (2010)、加納・中村 (2009)、Schaeffer, van der Kuijp (2009) がある。チャバ・チューキセンゲの著作研究については下記注 20, 21 参照。

³ 井内 (2009) (2010) と本論 I: 5 参照。

⁴ 武内 (2009)、Takeuchi (forthcoming) 参照。

インド仏教の権威を求めた。それがヴィクラマシーラ大僧院のアティシャの招聘となったのであろう。彼は 1042 年に西チベットへ入ったとされるが、すでに 60 歳に達していた。その後ドムトンパに遭い、中央チベットへ赴いたのである。

ベンガルのヴィクラマシーラ僧院は、パーラ王朝の庇護を受けて 800 年ころ設立された顕密兼修の仏教僧院であったが、ヒンドゥー教の広がりやイスラム教徒の侵攻などにより、インドでは仏教の衰退が近づいていた。1203 年にこの僧院が破壊されたことが、インド仏教の終焉を象徴する出来事として伝えられるが⁵、多くの仏教僧がネパールやカシミールに逃れた。最後の僧院長であったシャーキャシュリーバドラ Śākyaśrībhadrā (1127-1225) も出身地カシミールへ逃れ、そこからチベットへ入って、サキャ派に大きな影響を与えたのである。10~13 世紀、カシミール、東インド、ネパールとの交流はチベット仏教の再興に実に大きな役割を果たした。多くのチベット僧が留学し、またインド人学僧がそこからチベットに入った。とくにカシミールは、古来仏教が栄えた地であり⁶、後述するように、生きた仏教の伝統がここからチベットへ伝えられた。カシミールと西チベットに挟まれた現インド領のラダック地方やスピティ地方でこの時期に仏教文化が開花したことは、現存する仏教美術、発見された写本群によって証明されている⁷。

これらインド仏教を伝える周辺地域との人的交流によってなされた事業の最大のもの、チベット僧とインド僧による共同翻訳事業であろう。多くのチベット僧がインド、ネパールへ赴き、あるいはインド人学僧がチベットへ招かれ、前伝期には伝えられていなかった新しい仏典を翻訳し、また旧訳を修正して新訳を作った。これら「翻訳官」lo tsā ba と呼ばれるチベット人翻訳僧のうち、初期に活躍したのがリンチェン・サンポ Rin chen bzang po (982-1054) であり、これにナクツォ・ツルティムゲルワ Nag tsho tshul khriims rgyal ba (1011-1064)、ゴク・レクパーシェーラプ rNgog legs pa'i shes rab (10c.)、ゴク・ロデンシェーラプ rNgog blo ldan shes rab (1059-1109)、パツァブ・ニマタク Pa tshab nyi ma grags (1055-?) らが続く。彼らはカシミールやネパールで学び、当地の多くのインド人学僧と協力して、翻訳作業を行なった。アティシャも入蔵後、翻訳に協力している。今日の大蔵経に収録される大部の経典・論書がチベットにもたらされたのである⁸。

チベット仏教の再興とは、共時的に見るならば、まさにインド、内陸アジア、中国へ連

⁵ 一方のナーランダー大僧院は当時存続していたことが、チベットからインドへ巡礼したチャク翻訳師チュージェベル Chag lo tsā ba chos rje dpal (1197-1264) の伝記 (The Biography of Chag lo-tsa-ba Chos rje dpal, Śākya'i dge bsnyen Chos dpal dar dpyang, critically edited by Champa Thupten Zongtse, Śāta-Piṭaka Series 266, New Delhi 1981) によって知られる。中山 (1994) 参照。

⁶ カシミールは仏教、ヒンドゥー教が共に栄えた地であり、その歴史は『王統史』(Kalhaṇa, Rājatarāṅginī, 12世紀中頃)、漢語史料などによって知られる (Funayama (1994) 参照)。チベットとの関係は Naudou (1980) に詳しい。また、カシミールは中国との交流も多く、玄奘 (600/602-664) が 630 年頃およそ 2 年間滞在した。漢語史料に言及される「カシミール」については、榎本 (1993)、Enomoto (1994) など参照。

⁷ 近年スピティのタボ寺の仏教美術、出土写本についての研究が次々と出版されている (Klimburg-Salter (1997), Scherrer-Schaub, Steinkellner (1999), Petech (1999) など)。

なる広大な当時の仏教文化圏の産物であり、カダム派の時代とは、それを原動力としてチベットで開花した仏教史のエポックなのである。

新しい思想の導入とチベット仏教教学の形成

この時代に導入された仏典と新しい思想は実に多様であった。カダム派の人々は、前伝期にシャントラクシタ、カマラシーラ Kamalaśīla らによって植えつけられた仏教学の基礎の上に、王朝崩壊後に流入していた様々な伝承や修行法に加えて、インドや周辺地域で成熟し、百花繚乱となった仏教を受容したのである。彼らが為すべき重要な仕事の第一は、これら洪水のように流入する仏教教義を整理し、自分たちが学ぶべき学問と修行の体系を築くことであった。

カダム派が受容したものは単なる書物に書かれたものだけではない。インドではすでに、中観、唯識、論理学といった主要な学説の中にも異なった解釈、見解の相違が生まれ、さかんな議論が行なわれていた。仏教徒間で、あるいは非仏教徒との間で、様々な論争があったと推測される。学説の証明のための論証学ともいべきものが発達し、学識ある者たちは、自らの見解を披露するために註釈や論書を著し、僧院では若い学徒たちが競って議論に加わろうとしていたであろう。新しい解釈が示されれば、一時期のファッションとなったかもしれない。チベット仏教後伝期にチベット人が受容したものは、こうした生きた活動であったはずである。それはすなわち、チベット人たちが自らそこへ参画し、その活動を引き継いでいくことに他ならなかった。カダム派論師たちは、経典や論書の解釈、註釈のスタイル、議論や論証の方法、著作の形式、学問と修行のカリキュラム、教育システム、流行の思想にいたるまで、生きた有様をそのままに吸収しながら、自分たちのチベット仏教教学を形成していったのである。

前伝期にチベット最初の僧院サムイェー bSam yas が、おそらくはインドのナーランダ一僧院をモデルとし、開かれたように、後伝期に復興あるいは新規に建てられた僧院は、ヴィクラマシーラ僧院、カシミールの僧院などを模範とし、それらと肩を並べることを目指して、チベットの個性を発揮しながら、発展していったと思われる。インド仏教の継承とチベット独自の仏教の始まり－我々はこのような視点でカダム派の歴史とその著作群を読み解いていくべきであろう。

そして、彼らカダム派論師たちの仕事こそが、後のチベット仏教の方向を決定づける役割を果たしたのである。今日に続くゲルク派、サキャ派などの僧院におけるチベット仏教

⁸ チベット人、インド人の翻訳僧、翻訳されたテキストについては、大蔵経の各テキストの奥書、『テプテルゴンボ』などのチベット後代の記述から知られる。それらの情報は Naudou (1980) に集められている。また、カダム派論師チョムデン・リクレルによる目録に翻訳者と翻訳書のリストがある (Schaeffer, van der Kuijp (2009) 参照)。

教学の特色を考えてみよう。論理学 *tshad ma* を基礎とし、般若 *phar phyin*、中観 *dbu ma*、戒律 *'dul ba*、俱舍 *mngon mdzod* という顕教を総合的に学習し、密教の研修へと進む。顕教は、インドの学派でいえば、宗義書文献で分類される説一切有部、経量部、瑜伽行派、中観派の学説を含み、如来蔵思想とそれに基づく他空説も包摂する。さらに、中観派は自立論証派と帰謬論証派に分けられ、ゲルク派では後者の優位を主張する。密教では、中観思想によって『秘密集会タントラ』 *Guhyasamājatantra* を解釈した聖者流の伝統が尊ばれる。またカギユ派によって伝えられた「ナーローの六法」⁹ と呼ばれるヨーガの修法は、チベットでは最も広く用いられる修行となった。こうした教学体系の基礎は、すべてカダム派の時代に築かれたと言えよう。

すなわち 10～12 世紀に新たに翻訳、導入された仏教思想には、チャンドラキールティ *Candrakīrti* (7c.) の『明句論』 *Prasannapadā* に説かれた中観帰謬思想、ダルマキールティ *Dharmakīrti* (7c.) の『認識根拠の決択』 *Pramāṇaviniścaya* やその註釈者たちの論理学、「マイトレーヤ（弥勒）の五法」 *byams chos lnga* と呼ばれる五論書（『現観莊嚴論』 *Abhisamayālaṅkāra*、『大乘莊嚴經論』 *Mahāyānasūtrālaṅkāra*、『中辺分別論』 *Madhyāntavibhāga*、『法性分別論』 *Dharmadharmatāvibhāga*、『宝性論』 *Ratnagoṭravibhāga*）がある¹⁰。ここには、論理学、般若学、唯識思想、如来蔵思想がすべて含まれている。また、密教に関して言えば、リンチェン・サンポ、アティシャラによって『秘密集会タントラ』のジュニャーナパーダ *Jñānapāda* 流と聖者流の両系譜、『ヘーヴァジュラタントラ』 *Hevajatantra* など最上位の無上瑜伽 *anuttarayoga* タントラが本格的にチベットに導入されたのもこの時期である¹¹。

そして、注意すべきことは、当時の翻訳師や論師たちが、たとえば中観、唯識、如来蔵、論理学、密教といったように我々が区分している別個の学派に属するのではなく、様々な学説を総合的な学問体系として再解釈し、部分的には結びつけながら、学んでいたということである。それはインドの僧院で行なわれていたことである。その中には新しく作り上げられた体系も多かった。『秘密集会タントラ』と中観思想の結合（聖者流の流儀）、あるいは同タントラと瑜伽行〔中観〕思想の結合（ジュニャーナパーダ流の流儀）はよい例であろう。上記の「マイトレーヤの五法」も、インド瑜伽行派史から見れば、これら五論書がマイトレーヤ一人によって著されたとは考え難いことだが、11 世紀までにはそのような伝承がインドで確立し、セットで学ばれていた可能性が指摘されている¹²。そして、こ

⁹ インドのナーローパ *Nā ro pa* (1016-1100) がティーローパ *Ti lo pa* より授けられた教えとされる。このナーローパに師事したのが、チベットのカギユ派の祖の一人に数えられるマルパ翻訳師 *Mar pa chos kyi blo gros* (1012-1097) である。立川 (1987) 参照。

¹⁰ これらのうち『大乘莊嚴經論』『中辺分別論』は前伝期にすでに翻訳されている。袴谷 (1986) (1989) 参照。カダム派のチョムデン・リクレルが著した『弥勒法の歴史』 *Byams pa dang 'brel chos kyi byung tshul* については、加納・中村 (2009)、加納 (2010b) 参照。

¹¹ 頼富 (1989) 参照。

¹² 袴谷 (1986)、加納・中村 (2009) 参照。

の伝承をカシミールからチベットに伝えたのが、ゴク・ロデンシェーラブであり、またやはりカシミールに留学したツェンカウオチェ bTsan kha bo che (1021-?) とされる¹³。ゴクは、『現観莊嚴論』『宝性論』を翻訳し、五論書すべてに註釈書を著した。彼は伯父であるゴク・レクペーシェーラブが創設したサンプ・ネウトク gSang phu sne'u thogs 僧院の院長を務め、「マイトレーヤの五法」はサンプ僧院の、さらにはチベット仏教教学の重要な学問体系となったのである。さらに、ゴク・ロデンシェーラブはダルマキールティの『認識根拠の決択』をバヴィヤラージャ *Bhavyarāja (sKal ldan rgyal po) と共にカシミールで再訳し¹⁴、カシミールで活躍した論理学者ダルモッタラ Dharmottara (ca. 740-800) の註釈書 *Pramāṇaviniścayaṭīkā* も翻訳、自らも註釈書 *Tshad ma rnam nges kyi dka' gnas rnam bshad* を著した。他にも彼が翻訳したダルマキールティ系論理学書は多い。そして、密教典籍もその翻訳リストには列挙されている¹⁵。

また、上述のチャンドラキールティの『明句論』を翻訳したパツァプは、中観帰謬派論師と理解されるが、彼が共に最初の翻訳を行なったカシミールの論師マハースマティ Mahāsumati は論理学者として名高い人物であった¹⁶。23年に及ぶカシミールでの研鑽を終えてチベットへ帰国したパツァプは、やはりカシミール出身の論師カナカヴァルマン Kanakavarman と『明句論』を再訳しているが、このカナカヴァルマンはディグナーガ Dignāga (ca. 500) の『認識根拠の集成』(『集量論』)とその自註 *Pramāṇasamuccaya(vṛtti)* の翻訳者でもある。パツァプ自身もダルモッタラの『他世の証明』 *Paralokasiddhi* をバヴィヤラージャと共に翻訳している。パツァプに帰せられる『明句論註釈』 *Tshig gsal ba'i dka' ba bshad pa* (『カダム文集』第11巻所収)と彼の弟子シャン・タンサクパの『中観明句論註釈』には、確かに自立論証への厳しい批判は見られるものの、彼ら自身は、主張命題 dam bca' (pratijñā)、理由 gtan tshigs (hetu)、承認 mkhas len (abhyupagama)、論理的遍充関係 khyab pa (vyāpti) といった論理学の法則を駆使して論を展開し、シャンは、チャンドラキールティの帰謬論証も、ダルマキールティ系の論理学による帰謬論証と一致する形式に再解釈する¹⁷。論理学がすべての論述の基礎であること、真実の探求に論理的考察

¹³ 『テプテルゴンボ』の記述による。袴谷 (1986) : p.248 参照。カシミールのみならず、ヴィクラマシーラ僧院でも、この五論書はセットとして学ばれていた可能性が高い。すなわちヴィクラマシーラの学僧であったジュニャーナシュリーミトラ Jñānaśrīmitra (ca. 980-1040) の『有形象証明』 *Sākārasiddhi* に五論書への言及がある。『法性分別論』については松田 (1996) (とくに p.363, n.11)、それ以外の四書については寛 (1970) に指摘されている。この情報は加納和雄氏から得た。感謝の意を表したい。

¹⁴ 最初の訳は、マ・ゲウエーロードー rMa dge ba'i blo gros とスーパーティシュリーシャーンティ Subhūtiśrīśānti による (11世紀中頃)。

¹⁵ Kramer (2007) : pp.51-70, 121-123, Schaeffer, van der Kuijp (2009) : pp.237-244 参照。ゴク・ロデンシェーラブの著作と伝記については Kramer (2007), Schaeffer, van der Kuijp (2009) : pp.271-273 と Kano (2006) (2009) (2010c) 参照。

¹⁶ 『明句論』チベット語訳の奥書参照 (Yoshimizu (2006) : p.132, n.19)。

¹⁷ Yoshimizu (2009) (2010), Dreyfus, Tsering (2010) 参照。

は必須であること、中観思想であれその規則に照らし合わせて解釈されること、などはすでに自明のことであったのであろう。パツァプやシャンも批判的ではあれ、論理学に精通していたことに疑いはない。いまひとつのチャンドラキールティの著『入中論』*Madhyamakāvātāra*はその自註と共に、やはりパツァプとカナカヴァルマンによって翻訳されている。『入中論』の註釈を著したカシミールの論師ジャヤーナンダ Jayānanda は、論理学に懐疑的であったが、チベットを訪れ、サンブ僧院でチャパ・チューキセンゲ *Phywa pa chos kyi seng ge* (1109-1169) と論争したというエピソードがある¹⁸。

さて、このチャパこそ、現在最も注目されるカダム派論師であろう。サンブ僧院の院長を18年間務め、論理学者として知られるが、新しく導入されたチャンドラキールティの中観思想を批判し、当時のチベットでは伝統的な自立論証派系の立場を取り¹⁹、「マイトレーヤの五法」にも註釈を著している。現在チベット僧院で行なわれる問答の流儀である「ドゥラ」*bsdus grwa*の創始者ともされ、後代への影響が最も大きい人物である²⁰。『カダム文集』の出版により、これまで未見であった彼の著作18点が世に出た。研究者がまずペチャの頁を開いたのは、第8巻所収の論理学書『意闇払拭』*Tshad ma yid kyi mun sel*と『認識根拠の決択註』*Tshad ma rnam par nges pa'i 'grel bshad*である²¹。チャパの思想解明は、サキャ派、ゲルク派へと続くチベット仏教思想史ならびにチベット僧院での教学体系の形成過程を描き出す推進力となろう。

このように、今や『カダム文集』とチャパがカダム派研究の主役に躍り出た感がある。しかし、本書に訳出したトゥカン『一切宗義』が語るような、チベットにおける伝統的な「カダム派」の歴史と思想をも、我々は合わせて再検証せねばならない。アティシヤは、後代史書の中ではインドから来た権威であり、仏教再興の象徴として描かれる。サンブ僧院を含め、すべての伝統がアティシヤに結びつけられている。しかし、彼がチベットへもたらしたものは本当は何であったのか。彼の教義には、中観思想、瑜伽行唯識思想が融合し、最高位に「大中観」*dbu ma chen po*という如来蔵思想や密教にも通じるテーゼが説かれることはよく知られている。それは彼の師であるラトナーカラシャーンティ *Ratnākaraśānti* (ca. 970-1030) 等から受け継いだヴィクラマシーラ僧院の教義であったのだろうか²²。アティシヤ自身の歴史的思想的背景をいま一度掘り起こし、チベットへ与えた影響と共に再考していくことにより、多様な仏教学説の融合と総合的な学問体系の構築を特色とするこの時代のインド・チベット仏教が、より鮮やかな姿で浮かび上がって来る

¹⁸ ジャヤーナンダの活動については van der Kuijp (1993) 参照。

¹⁹ Tauscher (1999) 参照。ジュニャーナガルバ著 *Jñānagarbha* (8c.) 『二諦分別論』*Satyadvayavibhaṅgavṛtti* へのチャパの註釈については、赤羽 (2010) が言及している。

²⁰ チャパの論理学とその影響については、van der Kuijp (1978) (1983)、小野田 (1989)、Hugon (2008a) など参照。

²¹ すでに刊行された研究成果に Hugon (2008b) (2010)、西沢 (2010)、Stolz (2010) がある。

²² アティシヤの生涯と著作に関する研究は非常に多いのでとくに言及しないが、彼の思想の融合的側面とその源泉を考察した小論として、望月 (2006) を挙げておきたい。

であろう。

チベット仏教研究は、その教学形成がなされたカダム派の時代の解明にむけて、新たな舵を切った。新しい目で、トゥカン『一切宗義』の「カダム派の章」を、井内氏の新しい研究成果と共に、読んでいただきたい。

本論

『一切宗義』「カダム派の章」 訳註研究

凡 例

1. チベット語のローマ字転写はワイリー Wylie 方式を用いた。
2. チベット語のカタカナ表記は一般に用いられているもの、または中央チベット方言の発音に近いものを採用した。
3. 本論Ⅱについて、『一切宗義』のフォリオ番号はゴンルン版 (G) のフォリオ番号を [] にて示した。
4. [] の中には補訳を、() の中には同義語や年代、説明を記した。
5. 大蔵経に所収される経典に関して、P. として西藏大蔵経研究会編 (1962) に拠って北京版チベット大蔵経の番号と、D. として宇井伯寿他編 (1934) に拠ってデルゲ版チベット大蔵経の番号を示した。
6. 蔵外文献に関して、Toh. として金倉圓照他編 (1953) に拠って東北大学所蔵チベット蔵外文献の番号を示した。
7. その他新出のデプン寺所蔵カダム派文献に関して、『デプン寺所蔵古籍目録』として dPal brtsegs bod yig dpe mying zhib 'jug khang (2004) の番号を示した。
8. カダム派祖師について、『カダム明灯史』に伝記等のまとまった記述がある場合、gSal ba'i sgron me としてそのフォリオ番号を示した。

I トウカン『一切宗義』『カダム派の章』とカダム派の歴史

1 「カダム派の章」

トウカン・ロプサンチューキニマ Thu'u bkwan blo bzang chos kyi nyi ma (1737-1802)¹ 著『一切宗義の起源と綱要を示す善説水晶鏡』*Grub mtha' thams cad kyi khungs dang 'dod tshul ston pa legs bshad shel gyi me long* (以下『一切宗義』) は、チベット人による最初で最大のチベット仏教の宗義書である²。その詳細と特徴については、既刊の『西藏仏教宗義研究』第1～8巻において既に解説がなされている³。翻訳はこれまで、全訳として、劉 (1984) の中国語訳があり、また新たに2009年、Institute of Tibetan Classics (Montreal, Canada) から、ゲシェー・ソパ dGe bshes lhun grub bzod pa (1923-)⁴ 等による英訳 *The Crystal Mirror of Philosophical Systems: A Tibetan Study of Asian Religious Thought* が発表された⁵。一方、日本語訳は『西藏仏教宗義研究』として、章毎に、第1巻「サキヤ派の章」(立川 1974)、第2巻「ニンマ派の章」(平松 1982)、第3巻「シチェ派の章」(西岡 1978)、第4巻「モンゴルの章」(福田・石濱 1986)、第5巻「カギユ派の章」(立川 1987)、第6巻「チョナン派の章」(谷口 1993)、第7巻「ゲルク派の章」(立川・福田・石濱 1995)、第8巻「総論及びインド仏教」(川崎・吉水 2007) が発表されている⁶。したがって、ここに「カダム派の章」を発表することにより、他に「中国儒教及び道教」、「中国仏教」、「シャンバラにおける仏教」の3章を残すものの、チベットで生じた宗派についての翻訳研究が全て揃うことになる⁷。

「カダム派の章」は、『一切宗義』全体では第3番目の章であるが、チベット仏教に関する2番目の章という意味で、本文中で「第2〔の章〕」と呼ばれ、ニンマ派の次に述べられる。その分量はゴンルン dGon lung 版で17葉あり、「ゲルク派の章」(87葉)や「カギ

¹ トウカンの一生については、「サキヤ派の章」立川 (1974) : pp.9-10 や Geshé Lhundub Sopa (2009) : pp.3-6 を参照のこと。

² チベットにおけるトウカン以前の宗義書、例えば、ジャムヤンシェーパ 'Jam dbyangs bshad pa (1648-1722) やチャンキャ・ロールペドルジェ lCang skya rol pa'i rdo rje (1717-1786) による宗義書は、インドの仏教思想について述べるのが中心であり、チベットの諸学派についてはほとんど述べていない。「サキヤ派の章」立川 (1974) : pp.10-12、Geshé Lhundub Sopa (2009) : p.xii 参照。

³ 「サキヤ派の章」立川 (1974) : pp.8-18、「シチェ派の章」西岡 (1978) : p.1、「インドの思想と仏教」川崎・吉水 (2007) : pp.3-20 などを参照のこと。

⁴ University of Wisconsin-Madison にて教鞭を執るなどし、1975年に Deer Park Buddhist Center (Oregon, Wisconsin) を創設した。小野田 (2010) : pp.258-259 参照。

⁵ Geshé Lhundub Sopa (2009)。その他英訳については Smith (2001) : pp.147-149 を参照のこと。

⁶ 「ボン教の章」については御牧 (2003) の訳註研究がある。

⁷ これまで「カダム派の章」の部分訳として、Chattopadhyaya (1967) : pp.385-396 の英訳 (G : ff.1a2-11a4 部分) と井内 (2004) の和訳 (G : ff.9a4-17b1 部分) があつた。本訳注研究は、学位論文である井内 (2008) の付録 C を訂正加筆したものである。

ユ派の章」(34葉)に比べれば内容は比較的少ない。章全体は以下の3節から成る。

第1節：ジョボチェンポ Jo bo chen po (アティシャ Atiśa, 982-1054)の恩恵により
カダムの流儀が生じた有様 (ff. 1a4-6b6)

第2節：カダムの教えに依って他の教えの守持者が生じた有様 (ff. 6b6-9a4)

第3節：カダムの教えの概説 (ff. 9a4-17a3)

第1節はアティシャについて、その伝記の概略とアティシャがチベットに至った経緯などを述べる。第2節はカダム派の成立以降、チベットにおいて成立した他宗派、すなわち、カギユ派、サキヤ派、ゲルク派がどのようにカダム派の影響を受けたかを述べる。そして第3節は「カダム派の章」の最も重要な部分である。カダム派の宗義の内容について、「典籍」gzhungと「教誡」gdams ngag、「口訣」man ngagの3つに分け、「典籍」においてはカダム派の根本経典について、「教誡」においてはカダム派から始まる著作のジャンルである「テンリム(教次第)」bstan rimや「ラムリム(道次第)」lam rim⁸、「ロジョン(修心)」blo sbyong⁹について、「口訣」においては『カダムレクパム』bKa' gdams glegs bam¹⁰やカダム派の密教に対する態度について述べる。

『一切宗義』の他の章との比較から「カダム派の章」の特徴を述べれば、これまでの研究において、『一切宗義』におけるトゥカンの執筆姿勢に関して多くの指摘がされてきた。トゥカン自身がゲルク派の僧であることにも起因して、その態度はゲルク派に強く傾斜したものであり、他宗派に対してしばしば批判的な態度が見られる¹¹。しかしながら、「カダム派の章」においては、トゥカン自身が、カダム派を「本体」lus、ゲルク派を「支分」

⁸ ラムリムは、アティシャの『ラムドゥン(菩提道灯論)』Byang chub lam gyi sgron ma (P.5378/D.4465)に由来し、仏道修行の内容を道に入る準備段階を含めて段階的に示したものである。後にツォンカパTsong kha pa blo bzang grags pa (1357-1419)が著した『ラムリムチュンワ(菩提道次第小論)』Lam rim chung baや『ラムリムチェンモ(菩提道次第大論)』Lam rim chen moもラムリム文献の代表的なものである。一方、テンリム文献の代表はトルンパ・ロドージェンネーGro lung pa blo gros 'byung gnas (b.11c.)が著した『テンリムチェンモ』bsTan rim chen moであるが、テンリムとラムリムについては、チベットの学者たちによってその類似性がしばしば指摘される。本論Ⅱ：註129を参照のこと。

⁹ ロジョンとは、直訳すれば「心の訓練」の意味であり、具体的には菩提心を生じさせることをいう。本論Ⅱ：第3節1.2.2を参照のこと。ロジョン文献全般については、Sweet (1996)に詳しく、また2006年には『一切宗義』の翻訳を出版したInstitute of Tibetan Classicsより、シヨンヌゲルチョクgZhon nu rgyal mchog (b.14c.)により編纂された『ロジョンギャツァ』Blo sbyong brgya rtsaに対する英訳Mind Training: The Great Collection (Thupten Jinpa 2006)が出版された。

¹⁰ 『カダムレクパム』は『父法』Pha chosと『子法』Bu chosの二部から成る。本論Ⅱ：第3節1.3.1と第3節1.3.2を参照のこと。Institute of Tibetan Classicsより、部分訳The Book of Kadam: The Core Texts (Thupten Jinpa 2008)が出版されており、Miller (2004)の研究もある。

¹¹ 『一切宗義』の他の章、特に「チヨナン派の章」などでは批判的な見解を示す箇所も多く見られる。これらトゥカンの執筆姿勢については、「ゲルク派の章」立川・福田・石濱(1995):p.xやJackson (2006)に詳しい。

yan lag と述べているとおり、批判的な態度は全く見られない¹²。

2 「カダム派の章」の典拠としての「カダム仏教史」

トゥカンは、『一切宗義』の他の章と同様、「カダム派の章」においても、トゥカン以前に成立した文献を多く引用している。その中でも主に引用するのは、ゴ翻訳師シヨンヌペル 'Gos lo tsā ba gzhon nu dpal (1392-1481) 著『テプテルゴンポ』*Deb ther sngon po* 第5巻「ジヨボジェ（アティシヤ）並びにその後継者の章」jo bo rje brgyud dang bcas pa'i skabs と、レーチェン・クンガーゲェルツェン Las chen kun dga' rgyal mtshan (1432-1506) 著『カダムの伝記とカダムの法の源を明らかにする灯火』*bKa' gdams kyi rnam par thar pa bka' gdams chos 'byung gsal ba'i sgron me*（以下『カダム明灯史』）第1章「カダムの法の全般と特徴を説く章」bka' gdams kyi chos spyi'i bab dang dbyed ba bshad pa'i skabs の2つである¹³。

まず、『テプテルゴンポ』第5巻は、38葉あり、全15巻485葉ある全体から見ればほんの一部ではあるが、カダム派について述べるその内容は非常にまとまっている¹⁴。ちなみに、我が国のカダム派研究の第一人者である羽田野伯猷氏（東北大学）がカダム派史の研究のために訳註研究を行ったのは『テプテルゴンポ』のこの箇所である¹⁵。一方、『カダム明灯史』第1章は、14葉あり、カダム派の宗義の内容について述べた章である。『カダム明灯史』が先の『テプテルゴンポ』と異なるのは、『カダム明灯史』はいわゆる「カダム仏教史」*bKa' gdams chos 'byung* のジャンルに属するものであるので、全10章417葉から成る一冊は全てカダム派について述べられている。このような『カダム明灯史』の情報量の多さから、『テプテルゴンポ』よりも頻繁に引用され、「カダム派の章」第3節のほとんどはこの『カダム明灯史』第1章からの引用である¹⁶。

ここで、『カダム明灯史』に関連して、「カダム仏教史」というジャンルについて少し解説しておきたい。カダム仏教史はその名のとおり、カダム派の「法の源（チュージュン）」*chos 'byung* を特に述べるものである。カダム仏教史が盛んに書かれるようになったのは

¹² 本論Ⅱ：第2節3を参照のこと。

¹³ 「カダム派の章」において、トゥカンは、自身の師であるチャンキヤの著作『チャンキヤ宗義書』*ICan skya grub mtha'* からは一カ所しか引用していない。引用部分は、G:ff.10b5-11a4（本論Ⅱ：第3節1.2.1.1に該当する）。

¹⁴ 羽田野：(1986a)：pp.55-56.

¹⁵ 羽田野：(1986a)：pp.70-175.

¹⁶ 『テプテルゴンポ』と『カダム明灯史』の関係について、羽田野（1986a：pp.53-54）がその「親近性」を指摘するのとおりであるが、著者のゴ翻訳師とレーチェンはいわば師弟関係にあり、ゴ翻訳師の弟子であるレーチェンは、『テプテルゴンポ』のカダム派に関する記述を意識して『カダム明灯史』を著している。これらは、『カダム明灯史』中の「『テプゴン（テプテルゴンポ）』より～」*deb sngon nas...* (*gSal ba'i sgron me*：f.221a5) や「イーサンツェーパ（ゴ翻訳師の別名）がおっしゃるには～」*yid bzang rtse pa chen po'i zhal nas...* (*gSal ba'i sgron me*：f.357b5) などの記述からはっきりと窺える。

15 世紀後半以降のことであり、ゲルク派の成立以降である。その内容は、カダム派だけでなくゲルク派にまで及んでいることがほとんどであり、このことから、カダム仏教史の著者たちの執筆の目的は「新カダム派」*bKa' gdams gsar ma* と称されるゲルク派の宗派の源流を述べることにあったと推測できる。以下、既に挙げた『カダム明灯史』も含め、現在確認できる限りのカダム仏教史文献を成立年代順に挙げる¹⁷。

- 1) ウパロセル *dBus pa blo gsal* (b.13c.) *dBus pa blo gsal gyi chos 'byung*, MHTL 10845 (14 世紀中頃成立)¹⁸
- 2) ソナム・ヘーワンポ *bSod nams lha'i dbang po* (1423-1496) *bKa' gdams rin po che'i chos 'byung rnam thar nying mor byed pa'i 'od stong* (1484 年成立)¹⁹
- 3) レーチェン・クンガーギェルツェン (1432-1506) 『カダム明灯史』 (1494 年成立)
- 4) ペンチェン・イエシエーツェモ *Pañ chen ye shes rtse mo* (1433-?) *Pañ chen ye shes rtse mo'i bka' gdams chos 'byung*, MHTL 10849 (c.1495 年成立)²⁰
- 5) ペンチェン・ソナムタクパ *Pañ chen bsod nams grags pa* (1478-1554) *bKa' gdams gsar rnying gi chos 'byung yid kyi mdzes rgyan* (1529 年成立)²¹
- 6) アメーシャプ・ガワンクンガーソナム *A myes zhabs ngag dbang kun dga' bsod nams* (1597-1662) *dGe ba'i bshes gnyen bka' gdams pa rnam kyī dam pa'i chos 'byung ba'i tshul legs par bshad pa ngo mtshar rgya mtsho* (1634 年成立)²²
- 7) ヨンジン・イエシエーギェルツェン *Yongs 'dzin ye shes rgyal mtshan* (1717-1793) *Lam rim bla ma brgyud pa'i rnam thar* (1787 年成立)²³

20 世紀のチベット人学者トウンカル・ロブサンティンレー *Dung dkar blo bzang 'phrin las* (1927-1997)、通称トウンカル・リンポチェ *Dung dkar rin po che* は、最も成立年代の早いカダム仏教史として、1) ウパロセルのカダム仏教史を挙げる²⁴。しかしながら、上に挙

¹⁷ 各文献の成立年代及び著者の生没年は Martin (1997) に拠った。

¹⁸ *gSal ba'i sgron me* に個別の伝記は見られない。ウパロセルは、現在の大蔵経の原型となった写本の大蔵経、「旧ナルタン *sNar thang* 大蔵経」の編者の一人として知られる。

¹⁹ *gSal ba'i sgron me* : ff.207b1-208a5. チェンガーバ建立の口寺の第 23 代目座主で、座主を 38 年間務めた。井内 (2010) : p.51 参照。

²⁰ *gSal ba'i sgron me* : ff.407b5-408b3. イエシエーツェモは、ゲルク派の僧で、タシルンポ *bKra shis lhun po* 寺第 4 代目座主として知られる。

²¹ ペンチェン・ソナムタクパは、ゲルク派の僧で、デブン・ロセリン学堂 *Blo gsal gling grwa tshang* の座主を務めたことで知られる。

²² アメーシャプ・ガワン・クンガーソナムは、サキヤ派の僧で、奥書 (*bKa' gdams ngo mtshar rgya mtsho* : pp.189-190) によれば、2) ソナム・ヘーワンポのカダム仏教史を参考にして著されたことがわかる。

²³ ヨンジン・イエシエーギェルツェンは、ゲルク派の僧で、ダライラマ 8 世 *'Jam dpal rgya mtsho* (1758-1804) の師としても知られる。

げた1)と4)ペンチェン・イエシエツェモのカダム仏教史の2つは、アクチン・シェーラプギヤムツォ A khu ching shes rab rgya mtsho (1803-1875)の『稀観書』(MHTL)がその存在を伝えるのみで現存しない。

『カダム明灯史』に話を戻せば、著者のレーチェン・クンガーギェルツェンは、カギユ派、その中でもパクモドゥ派 Phag mo gru pa に属し、チャンチュブ・ギェルツェン Byang chub rgyal mtshan (1302-1364) 建立のツェタン rTse thang 寺の僧であった²⁵。『カダム明灯史』と著者のレーチェンについては、既に羽田野 (1986a) において詳細が述べられている²⁶。本稿ではこれに新たな情報を付け加え、以下整理して述べる。

まず、『カダム明灯史』の現在確認できるテキストには以下の3点がある。

- a) 木版本：東北大学所蔵 (Toh. 7038)、デプン寺所蔵 (『デプン寺所蔵古籍目録』 no. 017306)²⁷
- b) ウメ字体の影印本：B.Jamyang Norbu (comp.) *A Detailed Account of the Spread of the Kadampa Sect in Tibet*. vols. 1, 2. New Delhi 1972.
- c) 活字本：Mig dmar rgyal mtshan (ed.) *Bod ljongs mi dmang dpe skrun khang* (西藏人民出版社) Lhasa 2003.

a) の木版は、その奥書によれば、ダライラマ5世 Ngag dbang blo bzang rgya mtsho (1617-1682) の命により造られたものであり²⁸、出版されている b) ウメ字体の影印本と c) 活字本も、a) と同様の木版本を底本にしたものと考えられる。a) 木版本に関しては、さらに2004年に『デプン寺所蔵古籍目録』*'Bras spungs dgon du bzhugs su gsol ba'i dpe rnying dkar chag* として目録が出版されたラサのデプン 'Bras spungs 寺所蔵のダライラマ5世の秘蔵書の中にも確認されている²⁹。

²⁴ *Dung dkar blo bzang 'phrin las* (2002) : pp.164-165 参照。他に3)、4)、5) を挙げる。

²⁵ パクモドゥ派はパクモドゥパ Phag mo gru pa (rdo rje rgyal po, 1110-1170) を祖とするカギユ派の分派の1つ。「カギユ派の章」立川 (1987) : pp.7-8, pp.57-59 参照。ツェタン寺については Chos 'phel (2002) : pp.42-43 を参照のこと。

²⁶ 羽田野 (1986a) : pp.46-70.

²⁷ 木版本に関して、Tibetan Buddhist Resource Center (TBRC, New York) にスキャンデータ (W15964) があり、東北大学所蔵の木版本と同じと思われるので本稿ではこれを利用した。

²⁸ *gSal ba'i sgron me* : f.417a5-6.

²⁹ 『カダム明灯史』の木版本は、2010年2月に出版された『チベット歴史伝記全集』*Bod kyi lo rgyus rnam thar phyogs bsgrigs* (青海民族出版社) の中に収録される。なお、ダライラマ5世の秘蔵書及び目録に関しては井内 (2006) と加納 (2007) を参照のこと。目録中にはこれまで存在が知られていなかった、または存在は知られていたが伝統が途切れたとされていた文献が多く収録されており、その中のカダム派に関するものは『カダム文集』第1-3集 (四川民族出版社 2006, 2007, 2010) として出版されている (第4集は2011年に出版予定)。

次に、『カダム明灯史』全10章の構成について述べれば、第1章と第2章はカダム派とは何かを述べる概説部分であり、第3章はアティシャの伝記である。そして第4章以降は、カダム派及びゲルク派の祖師たちの伝記が系統ごとに述べられている。『カダム明灯史』に収録される伝記は人物によって大小さまざまであるが、ゲルク派の祖師たちのものも含めればその数は170(人)を超える。以下、『カダム明灯史』の章立てを示す³⁰。

- 第1章 カダムの法の全般と特徴を説く章 (gSal ba'i sgron me : ff.2b3-14b1)
- 第2章 カダムのご功績を広く示す章 (ff.14b1-27b2)
- 第3章 ジョボ (アティシャ) 自身の偉大な特徴を述べる章 (ff.27b2-65b6)
- 第4章 ジョボ (アティシャ) 自身の直弟子がどのように生じたかを述べる章 (ff.65b6-109b6)
- 第5章 偉大な自在瑜伽行者、吉祥ゴンパワ dGon pa ba (dbang phyug rgyal mtshan, 1016-1082) の教えの後継者たちの伝記の概略を述べる章 (ff.109b6-164b1)
- 第6章 「カダム・ダムガク派」 bKa' gdams gdam ngag pa と知られる者の伝記の概略を述べる章 (ff.164b1-215b4)
- 第7章 大仙人ポトワ Po to ba (rin chen gsal, 1031-1105) の教えの後継者「カダム・シュン派」 bKa' gdams gzhung pa と知られる者の伝記をわずかに述べる章 (ff.215b4-267a1)
- 第8章 菩薩シヨンヌ・ギェルツェン (プチュンワ Phu chung ba gzhon nu rgyal mtshan, 1031-1103) に継承された『[カダム] レクパム』の相承の歴史をわずかに述べる章 (ff.267a1-289b3)
- 第9章 [その他の] 断片的なカダムの教えの相承の伝記の章 (ff.289b3-340b1)
- 第10章 「シュン [派]」と「ダムガク [派]」の2つの河を1つに集めた「カダム・サルマ」 bKa' gdams gsar ma (ゲルク派) と知られる者の章 (ff. 340b1-414a4)

先に挙げたカダム仏教史文献の中で、7) ヨンジン・イエシエーギェルツェンによるカダム仏教史以外はトゥカン以前に既に成立していた。それにも関わらず、「カダム派の章」において、『カダム明灯史』以外のカダム仏教史文献は引用されていない。このことは、羽田野 (1986a) が指摘をしているとおり³¹、『カダム明灯史』の文献的な評価が、トゥカンの時代に非常に高かったことを示している。すなわち、その評価の内容を同じく羽田野氏の言葉を借りて言えば、「より客観的な立場で書かれたカダム仏教史」³²、そして「カダ

³⁰ 『カダム明灯史』の章立てや科文は、Jampa Samten Shastri (1983) pp.110-117、羽田野 (1986a) : pp.50-51、原田 (2008) (2009) においても言及される。

³¹ 羽田野 (1986a) : pp.52-54 参照。

³² 羽田野 (1986a) : pp.52-54 参照。

ム派史の総合的かつ体系的な詳細な解説書³³というものである。1つ目の「より客観的な立場で書かれたカダム仏教史」という評価は、著者であるレーチェン・クンガーギェルツェンがゲルク派の僧ではなく、パクモドゥ派に属する人物であったことにその理由がある³⁴。また、2つ目の「カダム派史の総合的かつ体系的な詳細な解説書」という評価は、何よりも『カダム明灯史』の内容がカダム仏教史文献の中で最も詳細であることに因る。ダライラマ5世代に『カダム明灯史』の木版が造られたのはこのような評価と特色からであると推測ができ、木版が作られたことによって、カダム仏教史文献の中の代表的な文献としてさらに広く普及していったと考えられる³⁵。

3 「カダム」という名前の由来

宗派の名である「カダム」の名前の由来とその解釈について、チベットの学者たちによる一般的な解釈は、「仏のお言葉（カ） bka' 全てを教誡（ダムガク） gdams ngag（ウパデーシャ upadeśa）として理解すること」というものである。トゥカン自身も「カダム派の章」においてこの解釈を採用しており³⁶、この解釈の典拠はやはり先ほどから述べている『カダム明灯史』にある³⁷。典拠となった『カダム明灯史』には他に3つの解釈が挙げられる。以下、『カダム明灯史』がカダムの解釈について述べる該当箇所を抜粋する。

(gSal ba'i sgron me : f.4a3-6)

「ジョボ（アティシャ）がニェタン sNye thang³⁸に居られたとき、弟子たちはジョボのお言葉を大事になさった。故に、これらラマのお言葉（カ）について最高のもの（ダムパ dam pa）となさったことがあったので、「カダムパ」 bka' dam pa ともいうのだ」とあるラマはおっしゃっている。ゲシェートンパ（ドムトンパ 'Brom ston pa rgyal ba'i 'byung gnas, 1004/5/6-1064）など先代のカダムの者たちは、甚深な密教を内において実践なさったけれども、一般の教

³³ 羽田野（1986a）：p.50.

³⁴ レーチェンの師の中には、ゲルク派のゲンドゥンドゥブ dGe 'dun grub（1391-1474）の弟子であるロドーベーパ Blo gros sbas pa（1400-1475、レーチェンが授戒の際の親教師 mkhan po）などがおり、ゲルク派との親交も厚かった。羽田野（1986a）：p.53 参照。

³⁵ 木版が造られたことによって『カダム明灯史』がカダム仏教史文献の中で「標準的なテキスト」になっていったと考えられる。チベットの木版印刷の概要及び後世に与えた影響については伏見（2002）を参照のこと。

³⁶ 本論Ⅱ：第1節1を参照のこと。

³⁷ gSal ba'i sgron me : f. 3b4-5.

³⁸ ニェタンはアティシャが晩年を過ごして亡くなった場所で、現在のラサ市チュシユル県 Chu shur rdzongにある。1055年にカワ・シャキャワンチュク sKa ba shākya dbang phyugなどのアティシャの直弟子たちによってニェタン・ドルマ・ハカン sNye thang sgröl ma lha khangが建立された。Dung dkar blo bzang 'phrin las（2002）：pp.946-947 参照。

えにおいては三蔵の規範を守り、大乘の密教においては仏のお言葉（カ）をより厳しく守った（タムトク dam dog）。故に、その点からも「カダム」 bka' dam の語義解釈があるだろうかと思う。大半のラマの見解は、カダムの祖であるドムトン [パ] が、ジョボ（アティシャ）のお言葉（カ）である「四尊三蔵」 lha bzhi chos gsum（釈迦、観音菩薩、ターラー、不動明王の4つの尊格と三蔵）³⁹ のとおり、「四尊三蔵」 lha chos bdun ldan をお選びになった（ダムガ gdam nga）ので、「カダム」 bka' gdam というのである。

このように、「カダム」の「カ」にはそれぞれ、「ラマのお言葉」、「仏のお言葉」、「アティシャのお言葉」の3つの意味があり、「ダム（或いはタム）」にもそれぞれ、「最高のもの」 dam pa、「厳しく守る」 dam dog、「選ぶ」 gdam nga の3つの解釈があるようである。したがって、「カダム」の解釈全てを整理すれば以下のようなになる。

- 1) bKa' gdams 「仏のお言葉から全てを教誡として理解すること」
- 2) bKa' dam 「ラマのお言葉について最高のものとする事」
- 3) bKa' dam 「仏のお言葉に対して厳密であること」
- 4) bKa' gdam 「ジョボのお言葉（四尊三蔵）を選択したこと」

ちなみに、『カダム明灯史』以前に成立した文献の中に、カダムの名の由来と解釈が述べられるものは見られない。したがって、この『カダム明灯史』の解釈が以降の他の文献においても採用されるようになったと考えられる。例えば、『一切宗義』以外の例を挙げれば、パオツクラクテンワ dPa' bo gtsug lag phreng ba（1504-1566）著『ケーパーガートン』 mKhas pa'i dga' ston（1554-1564年成立）においては、1) 「仏のお言葉から全てを教誡として理解すること」と4) 「ジョボのお言葉（四尊三蔵）を選択したこと」の2つが挙げられている⁴⁰。

4 カダム派成立の背景

1) 後伝の興り

一般に、チベットの仏教史は「前伝（ガタル）」 snga dar と「後伝（チタル）」 phyi dar に分けられる。前伝とは7世紀、古代チベット王国（吐蕃）の王ソンツェン・ガンポ Srong btsan sgam po の時代に取り入れられた仏教が王国の保護を受けて広まったことをい

³⁹ 本論Ⅱ：第3節 1.3.3 を参照のこと。

⁴⁰ mKhas pa'i dga' ston : p.362. Thupten Jinpa（2008）： pp.7-8 参照。

う。一方、後伝とは古代王国の崩壊と分裂によって一旦は途絶えた戒律と教えが10世紀半ばに再興し、今度は王国の保護を受けずにカダム派などの諸宗派と僧院を中心として広まったことをいう⁴¹。カダム派は、この後伝の初期にチベット独自の宗派として成立した最初の宗派であり、その成立過程には後伝の興りに関わる東西チベットで起きた2つの出来事が密接に関係している。

まずその出来事の1つ目は、東チベットで起きた「戒律の復興」である。チベットの仏教史において、戒律の断絶は9世紀中頃、古代王国の最後の王ランタルマ Glang dar ma の破仏によって起こったとされる。この王ランタルマの破仏からチベットの地に再び戒律と教えが復興するまでの期間は、文献によって70年、73年、78年など諸説あるが⁴²、その復興を決定づけた出来事は、東チベットで戒律を受けたいいわゆる「ウー・ツァンの10人（または6人）」 dBus gtsang gi mi bcu (/drug)⁴³ といわれる出家者の集団が中央チベットに戻ったこと、つまり中央チベットにおける戒律の復興であった。

ランタルマの破仏後、「ケーパミスム（三賢者）」 mkhas pa mi gsum と呼ばれるツァン・ラブセル gTsang rab gsal、ヨ・ゲジュン g-Yo dge 'byung、マル・シャキヤムニ dMar shākya mu ni の3人はガリに逃げ、チベット西方のカルロク Gar log⁴⁴、そして北方のホユル Hor yul⁴⁵ を経てアムド A mdo（東北チベット）に辿り着いた。3人はそこでボン bon 教徒のウセルバル gZu gsal 'bar と出会い、戒を受け、ゲワセル dGe ba gsal と名付けた⁴⁶。このゲワセルが後のラチェン（大ラマ）・ゴンパラプセル Bla chen dgongs pa rab gsal（832-915）⁴⁷

⁴¹ チベットの学者の中には、少数派ではあるが、チベットの仏教史を3つに区分する者もいる。例えば、チョムデン・リクレル bCom ldan rig ral（1227-1305）は、前伝と後伝の間に、「中伝（パルタル）」 bar dar があつたとし、彼が唱える中伝とは、グゲ・プラン王国の王たち（イエシェー・ウーやチャンチュプ・ウー）が施主となり、リンチェン・サンポなどがインドのパンディタたちと翻訳をした時期をいう。プトンなどは「中伝」を挟むチベット仏教史の時代区分を批判している。羽田野（1987a）：pp.91-99、'Brong bu tshe ring rdo rje（2005）参照。また、これまで、チョムデン・リクレルが「中伝」という言葉を用いていたのは *Bu ston chos 'byung*：p.200 の記述からしか知り得なかったが、チョムデン・リクレル著の仏教史 *bsTan pa rgyas pa rgyan gyi nyi 'od* が、Schaeffer, van der Kuijp（2009）や『カダム文集』第3集61巻として出版されたことからより明らかになった。

⁴² 川越（2004）：pp.144-147 に詳しい。

⁴³ 文献によって人数や人物が異なるが、多くは10人或いは6人を挙げる。川越（1988）：pp.189-190 参照。

⁴⁴ カルロクとは、ガリの西に国を築いていたトルコ系の民族をいう。Karmay（1980）：p.3, n. 2、森安（1987）：pp.53-60 参照。

⁴⁵ ホユルまたはホル Hor とは、チベットの北方にいる漢民族以外の民族を指し、古代王国後期にはウイグル、モンゴル時代（元明代）にはモンゴルを指したという。森安（1987）：p.59 参照。

⁴⁶ *Bu ston chos 'byung*：p.194 によると、ゴンパラプセルが比丘戒を受けた地は、ドメー mDo smad（アムド）のマンドルジェダクラ rMa lung rdo rje brag ra のアチュンナムゾン A chung gnam rdzong、ダンティク・シェルキヤンゴン Tan tig shel kyi yang dgon であるという。アチュンナムゾン及びダンティクは現在の青海省ハルン県 lHwa lung rdzong（化隆県）にあり、シェルキヤンゴンも現存する寺院である。シェルキヤンゴンについては rDo rje thar, bZod pa（2005）の紹介文がある。

⁴⁷ ゴンパラプセルの生没年については諸説ある。詳しくは、Stoddard（2004）：pp.53-54, pp.63-64 を参照のこと。

であり、東チベットの戒律の復興、そしてその後の中央チベットの戒律復興を決定づけた「ウー・ツァンの10人（または6人）」に戒律を授けた人物である⁴⁸。

カダム派の開祖であるドムトンパは、このゴンパラプセルに繋がる戒律の系統、つまり「低地律」*smad 'dul* といわれる流れを汲んでおり、ドムトンパのみならず、初期のカダム派祖師たちのほとんどが受けた戒律の系統はこの低地律である。つまり、この東チベットにおける戒律の復興によって多くの持律者が輩出され、それがその後の出家集団を形成する原因となり、カダム派の成立に繋がっていったのである。

次に、カダム派の成立並びに後伝の興りに関わる出来事の2つ目は、西チベットのグゲ・プラン *Gu ge pu hrang* 王国⁴⁹の王たちによる「アティシャの招請」である。10世紀、古代王国の末裔が建てたグゲ・プラン王国においても、王イエシェー・ウー *Ye shes 'od* が⁵⁰、インドからダルマパーラ *Dharmapāla* やプラジュニャーパーラ *Prajñāpāla* などのパンディタを招聘して戒律の復興が起こり、東チベットの「低地律」に対して「高地律」*stod 'dul* という戒律の系統が始まっていた⁵⁰。イエシェー・ウーは、戒律の復興を契機としてさまざまな仏教復興の事業を展開した。当時、チベット全土で流行していた性的な儀礼や呪術などを払拭し、特に大乘に基づいた仏教復興のため、リンチェン・サンポ *Rin chen bzang po* (958-1055) やゴク・レクパーシェーラ *Ngog legs pa'i shes rab* (b.10c.)、ナクツォ・ツルティムゲルワ *Nag tsho tshul khriims rgyal ba* (1011-1064) 等をカシミールやインドに派遣して仏教を学ばせるとともに、チベット人翻訳師とインド人パンディタによる翻訳事業の施主となった。王国のこのような事業は、イエシェー・ウーの甥であった王チャンチュブ・ウー *Byang chub 'od* にも引き継がれ、1042年には当時ヴィクラマシーラ *Vikramaśīla* の座主であったアティシャが王国に招請された⁵¹。このアティシャの西チベット到着を受け、ドムトンパが中央チベットにアティシャを招請した。アティシャとドムトンパのもとには後にカダム派となる者たちが次々と集まり、ひとつの集団としてのカダム派が形成されていった。

⁴⁸ 東チベットの戒律復興及び「ウー・ツァンの10人（または6人）」については、羽田野（1986c）、川越（1988）（2004）に詳しい。

⁴⁹ 10世紀後半、それまでソング *Srong nge* がグゲを、コレ *'Khor re* がプランを支配していたのを、グゲを支配していたソングが出家してイエシェー・ウーと称し、プランを支配していた兄のコレに王位を譲ったことにより、グゲとプランの統一王国が成立した。そして再び11世紀後半にツェデ *rTse lde* がグゲを、ツェンソン *bTsan srong* がプランをそれぞれ支配するまで、グゲ・プランの統一王国は存続した。グゲ・プラン王国については、1996年に *mNga' ris rgyal rabs* が出版されたことにより具体像が明らかになった。またウィーン大学のISTB (Institute für Südasien-, Tibet- und Buddhismuskunde) などによりリンチェン・サンポ建立のタボ *Ta bo* 寺（インド・ヒマチャルプラデーシュ州スピティ *Spiti*）の写本や壁画資料の newly 出資料も多く報告され、その具体像が明らかになりつつある。

⁵⁰ *Bu ston chos 'byung* : p.201.

⁵¹ 羽田野（1986a）pp.70-84.

2) ドムトンパ略伝 —ラディン寺建立縁起—

カダム派の成立をめぐる、後伝の興りに関わる先の2つの出来事と並んで重要なのは、開祖ドムトンパによる総本山ラディン Rwa sgreng 寺⁵²の建立である。ラディン寺は、アティシャの死後2年後の1056年、ペンユル 'Phan yul (ラサの北に位置する、本論 I : 5 参照)に建立された。この「ラディン寺建立の経緯」、そして先の2つの出来事(「東チベットの戒律の系統」と「(中央チベットへの)アティシャの招請」)に関しては『カダム明灯史』に所収されるドムトンパの伝記部分 (*gSal ba'i sgron me* : ff.83b2-105b4) に詳しい⁵³。「カダム派の章」ではラディン寺建立の経緯について述べられていないので、以下、『カダム明灯史』のドムトンパの伝記より、一連の出来事について注目しながら、ドムトンパの一生を、<①出自>、<②カムにおけるドムトンパ>、<③アティシャをウー・ツァンに招請>、<④ラディン寺建立の経緯>、<⑤晩年>の5つに分けて見ていくことにしたい⁵⁴。

① 出自

ドムトンパは、火・午の年(1006年)に、ニエンチェンタンラ *gNyan chen thang lha* 山脈の麓、トゥールン *sTod lung* の谷、ツァケモ *rTsa skye mo* の地に、父クシェン・ヤクシエルペン *sKu gshen yag gzher 'phen* と母クオーサ・レンチクマ *Khu 'od bza' lan cig ma* の息子として生まれた⁵⁵。ドム 'Brom は出身の氏族名であり、「ドムトンパ」という呼称は「ドム出身のトンパ(宗教指導者) *ston pa*」を意味する。幼い頃に母親を亡くするなど家庭に恵まれず、13歳から家を出て4年間、叔父のところではユンチューゴン *g-Yung chos mgon* という人に読み書きなどを学んだ。

(*gSal ba'i sgron me* : f.84b1-2)

母親は以前に亡くなり、父親が継母を娶ってそれと同居していた。ある日、その継母が乳搾りをしているとき、子供(ドムトンパ)が転んだことによって、牛が飛び跳ねて驚いたので、乳がこぼれてしまった。[そこで、]継母は[ドムトンパを]叩いた。[ドムトンパは]子供の頃から勇しかったので、「彼女と一緒に住むよりも、チベット人の馬飼いをした方が楽しいだろうか」と思い、家を出た。

⁵² 現在のフンドゥブ県 *lHun grub rdzong* にある。現代の同寺の僧侶により、ラディン寺史一般と同寺における儀軌について、*gZigs pa sprul sku blo bzang bzod pa, Phun tshogs* (2006) が出版されている。

⁵³ ドムトンパの単独の伝記は存在しない。*Deb ther sngon po* にもドムトンパの伝記があり、この部分には羽田野 (1986a) : pp.79-103 の和訳がある。

⁵⁴ この「ドムトンパ略伝」は、井内 (2000) と (2008) : 付録 A に訂正加筆したものである。

⁵⁵ *Deb ther sngon po* : ca f.5b2 はドムトンパの生年を土・申の年(1005年)としており、父母の名前も父タクスムシエル *rTa gsbum bzher*、母クトーサ・レンチクマ *Khu lto gza' lan cig ma* とあり若干の違いがみられる。

② カムにおけるドムトンパ

ドムトンパは、「低地律」の流れを汲むギェー・ハカン rGyal lha khang のシャン・ナナム・ドルジェワンチュク Zhang sna nam rdo rje dbang phyug (976-1060)⁵⁶ より優婆塞戒を受け、ギェルウェー・ジュンネーの名を授かった。17歳のとき、カム（東チベット）からインドに行こうとしていたセツン・ワンチュクシヨンヌ Se btsun dbang 'phyug gzhon nu⁵⁷ という人物に出会い、セツンの本拠地があったカムのデンマ 'Dan ma（又はデンコク 'Dan khog)⁵⁸ に赴いて、後20年間彼に師事した。このセツンこそ、シャン・ナナム・ドルジェワンチュクと同じ「低地律」の流れを汲む人物であり、ゴンパラプセルから戒を受けたトゥム・イエシェーギェルツェン Grum ye shes rgyal mtshan の弟子の1人であった⁵⁹。

(gSal ba'i sgron me : f.85a1-2)

19歳のとき、カムのデンマの地のセツンのもとに商人と連れ立って行かれた。屋内では召し使いとして製粉に至るまで、屋外では牛や馬などの家畜が多くいたので昼間はそれらの番をなされた。夜は駿馬に乗って棘のような武器を持って見回りをなされた。経典を製粉小屋に置いて見るなどして学ぶこともなされた。粉を挽いていたので、手のひらは牛の首のように〔荒れて〕しまった。

ドムトンパはこのような仕事をしながらデンマの地において勉学に励み、「法を榮えさせる居士」dGe snyen chos 'phel と呼ばれる最高の賢者となった。セツンのもとで中観と菩薩行関係、古タントラなどを学び⁶⁰、当時同じくデンマに居たスムリティジュニャーナキ

⁵⁶ gSal ba'i sgron me : ff.81b6-82a3. ギェー・ハカン（フンドゥブ県）は現存する寺院で、建立者はシャン・ナナム・ドルジェワンチュクである。ギェー・ハカンについては、Chos 'phel (2004) : pp.178-180、Roesler (2004) : p.24 を参照のこと。ペンユルには他にも、シャン・ナナム・ドルジェワンチュクに由来する寺院がいくつかある。特にシャン・ナナム・ドルジェワンチュクが一日で造ったと伝えられる「チャンバ・プンスム（弥勒三兄弟）」Byams pa spun gsum といわれる三体の弥勒仏が有名である。井内 (2008) : p.45 参照。

⁵⁷ セツンについて、詳細は明らかでないが、当時、デンマにおいてカムやウー・ツァンから多くの弟子を集めていたようである。アティシャの主要な弟子を「ク・ゴク・ドム・スム」khu rngog 'brom gsum というが、ドムトンパ以外の他の2人（クトゥンとゴク・レクペーシェーラプ）も、デンマのセツンのもとで学んだ。井内 (2008) : pp.463-462, 註24 参照。

⁵⁸ デンマ、またはデンコクといわれる地域は、現在の四川省ガンゼ・チベット族自治州セシル県 Ser shul rdzong (デンメー 'Dan smad) とチベット自治区チャムド区ジョンド県 Chab mdo ljong mda' rdzong (デントゥー 'Dan stod) にまたがる地域をいう。古代王国時代よりラサヤアムドに向かう商人が活発に往来する交通の要所であり、交易と文化の十字路であった。井内 (2008) 参照。

⁵⁹ gSal ba'i sgron me : f.84b3.

⁶⁰ ドムトンパがセツンのもとで学んだ内容は、文献により若干異なる。詳細は羽田野 (1986c) : pp.225-226 を参照のこと。

ールティ *Smṛtijñānakīrti* (以下スマリティ)⁶¹ にサンスクリットやインドの文字も学んだ⁶²。

③ アティシャをウー・ツァンに招請

ドムトンパは、デンマにおいて、インドからガリ(西チベット)に招かれていたアティシャの評判を聞き、アティシャに師事するためにガリに向かった。

(*gSal ba'i sgron me* : ff.85b4-86a3)

そのとき、そのパンディタ(スマリティ)に、「今、インドで偉大なパンディタはどのような方がいますか」と尋ねると、「お年を召された方ではナーローパ *Nāropa* (1016-1100)⁶³ とシャーンティパ *Śāntipa* という方がいる。しかし彼ら2人は今頃亡くなっているだろうか。今は「パンディタ・ディーパンカラ」(アティシャ)という王族から出家した人がいて、今日では彼が偉大になっているだろう」と言ったので、トンパ(ドムトンパ)のお心に、「彼の方にお会いできたならば喜ばしい、何としてもお会いしたい」という思いが生じた。(中略)それから、「ジョボ(アティシャ)がガリに行かれる」と旅人にお聞きになり、セツンにガリに行くことを請うた。彼(セツン)もまた不快〔の色〕を示すことなく、経を一緒にした一駄の荷物をお与えになって、〔ドムトンパは〕行かれた。

北路に至ったとき、〔ドムトンパは〕「ガリのハラマの叔父・甥(イエシエー・ウーとチャンチュプ・ウーのこと)が「ジョボジェ・ハチク」*Jo bo rje lha gcig* (アティシャ)というある偉大なパンディタを招いている。彼は長く留まらずインドに帰ってしまわれた」とお聞きになった。そこで、ジョボ(アティシャ)のお名前を聞いただけで心が自然に揺れ動き、限りない信仰と尊敬がお生まれになって、会いに行きたいという望みが大いに生じたという。

ドムトンパは、カイラス山南のプラン *Pu rangs* で、インドへ帰ろうとしていたアティシャと出会い、以降、常に行動を共にした。アティシャは、出会ったその日の夜から枕を連ねてドムトンパに教えを説き、灌頂を与え、『ラムドゥン(菩提道灯論)』*Byang chub lam gyi sgron ma* (P.5378/D.4465)についても一晩かけて説いた。

⁶¹ チベット語でデンパ・イエシエー *Dran pa ye shes* ともいわれる彼は、大翻訳師リンチェン・サンポと並んで「新訳密教」*gSang sngags gsar ma* をチベットにもたらした人物である。インドの密教行者で、10世紀後半チベットに入り、カムでジュニャーナパーダ *Jñānapāda* 流の密教を伝えた。師にナーローパ等がいる。川越(1986) : p.181, n.4、井内(2008) pp.462-460を参照のこと。

⁶² 『カダム明灯史』以外の文献は、ドムトンパにサンスクリットを教えた人物を、パンディタ・デーツェルマ *sGra'i tsher ma* とする。羽田野(1986c) : p.226 参照。

⁶³ カギユ派の開祖マルパ *Mar pa lo tsā ba chos kyi blo gros* (1012-1097)の師。「カギユ派の章」立川(1987) : pp.15-16を参照のこと。

(gSal ba'i sgron me : ff.87a5-87b4)

ジョボ (アティシャ) と従者がプランのギェルシン rGyal zhing というところにいるとき、尊母ターラーが、「この後、3晩経った4日目に、チベットの偉大な優婆塞が来るので彼に加持せよ」とおっしゃった。(中略) [アティシャが] ある村に説法に行かれたとき、ゲシェー・トンパ (ドムトンパ) と従者がお越しになったのに対して、[アティシャの] 従者全員が、「今すぐ、[アティシャが] お越しになるので待っていて下さい」と言うと、[ドムトンパは] 「わたしは大乗のラマに会うときは一瞬でも早く会いたいのので、後と先ならば先を選ぶ」とおっしゃって立ち去った。ジョボとある道で会って礼拝なされて、土産の金を差し上げた。すると、ジョボは御手をトンパの御頭の上に置いて、サンスクリット語で賛美なされて、「加持した」とおっしゃった。

アティシャは当初、3年の滞在のつもりでガリを訪れていたが、一行の帰途にあったチベットとネパールの国境付近のペルポゾン Bal po rdzong で戦争が起こったために通行できなくなり、キーロン sKyid grong で1年間足止めに遭った。そこで、ドムトンパはアティシャをガリからウー・ツァン (中央チベット) に迎えようと考え、アティシャがインドに帰らないように説得をするとともに、カワ・シャキャワンチュク sKa ba shākya dbang phyug⁶⁴ 等に手紙を出し、アティシャをウー・ツァンに迎える手筈を整えた。

(gSal ba'i sgron me : f.88b3-6)

[ドムトンパはアティシャに] 「わたしの [いる] ラサ [には] サムイェー bSam yas などの寺廟 gtsug lag khang と、親教師ボーディサットヴァ (シャーンタラクシタ Śāntaraksita) とカマラシーラ Kamalaśīla などがお招きした多くのインドの経典と千人ほどの比丘が居られる」などと多くの状況をお聞かせした。[すると、] そこ [にいる] 全員も、「ジョボよ、チベットに行かれることを喜ばれますか」と伺った。すると、ジョボは大変喜んで、「濁世にそれほど多くの比丘はインドにも居られない。それほどいるならば必ず阿羅漢も居られるだろう」とおっしゃった。[そして] 臍を震わせチベットの方向に礼拝をなされた。[アティシャは] 「全ての者がわたしが来ることを喜ぶならば、わたしは僧伽 [があるところ] の言葉を破らないと誓う」とおっしゃったので、ゲシェー・トンパは勇気を生じて、ジョボにチベットに来られることをお願いしたので、ジョボは承諾なされたのである。

アティシャはインドのヴィクラマシーラに『ラムドゥン』とその註釈を送り、そのまま

⁶⁴ gSal ba'i sgron me : f.81b3-6.

チベットに滞在することを許可された。ドムトンパはアティシャをウー・ツァンに迎えて以降、アティシャによく仕え、ウー・ツァンでのアティシャの行動に常に同行した。

その後、アティシャは、クトウン・ツォンドゥー・ユンドウン *Khu ston brtson 'grus g-yung drung* (1011-1075) によりタンポチェ *Thang po che*⁶⁵、ドムトンパによりニェタン、ゴク・レクペーシェーラブによりイエルパ *Yer pa*⁶⁶ に迎えられるなどし、多くのウー・ツァンの地を訪れた。最期はニェタンに戻り、ドムトンパに看取られて木・午の年 (1054年) 9月18日に入滅した⁶⁷。ウー・ツァンにアティシャを招聘したのも、その最期を看取ったのもドムトンパであったことからわかるように、アティシャの弟子の中でドムトンパは特別な存在であった。2人の師弟関係について『カダム明灯史』は次のように記す。

(*gSal ba'i sgron me* : f.98a3-4)

ゲシェー・トンパは〔アティシャに献上するための〕金を求めて行かれた1ヶ月とクトウンが〔アティシャを〕迎えた1ヶ月の2ヶ月を除いて、初めて会ってから〔アティシャが〕お亡くなりになるまで一瞬も離れたことはなかった。

(*gSal ba'i sgron me* : f.99a4-5)

ジョボ (アティシャ) は、「わたしはお前にこれを説かなかったか」とおっしゃって、それぞれの法に対して何度もお答えをおっしゃったという。そのように〔アティシャがドムトンパを〕氣遣ったのでアティシャの功德を一つの器に移したようなものがゲシェー・トンパである。

④ ラディン寺建立の経緯

ラディン寺は、アティシャの供養を目的に、1056年にドムトンパによって建立された。ドムトンパがペンユルの地に僧院を建立することになったのは、アティシャと出会う以前、シャン・タンカ・ベルチュン *Zhang 'phrang kha ber chung* という人物と出会い、彼からラディンの土地を寄進されたことによる。

(*gSal ba'i sgron me* : ff.86a4-86b3)

⁶⁵ タンポチェは、トゥ・メル・ツルティムジュンネー *Gru mer tshul khirms 'byung gnas* により 1017年に建立された。Dung dkar blo bzang 'phrin las (2002) : p.1935 参照。*gSal ba'i sgron me* : ff.92a6-92b5によると、アティシャは1ヶ月間タンポチェに滞在したが、クトウンの性格が傲慢であったため、アティシャによく仕えなかったことから、すぐにその地を去っている。

⁶⁶ ラサ市タクツェ県 *sTag rtse rdzong* にある。パドマサンバヴァ *Padmasambhava* やハルン・ベルキドルジェ *IHa lung dpal gyi rdo rje* が瞑想した洞窟があることで知られる。『カダムレクパム』は、アティシャによってこのイエルパの地で説かれたものといわれる。本論Ⅱ：第1節4を参照のこと。

⁶⁷ *Deb ther sgron po* : ca f.10a3 はアティシャの没年を同年の中秋 (8月) 20日とする。

それから〔ドムトンパは〕ソクチュカ Sog chu kha⁶⁸に行かれた。〔そのとき、〕ある家が騒がしかったので、「ここには何があるのか」と尋ねると、「タンカ・ペルチュンによる父親のペルチュン Ber chen の葬儀と兄弟たちを集めての振る舞い酒がある」と言った。そこで、遠くからやって来たところであったので、そこに飲み物を求めて行かれた。タンカ・ペルチュンが、〔ドムトンパに〕「お前は寺から来た居士であって、わたしもシャン・タンカ・ペルチュンという偉大な者である。お前はそこで立ち上がってキツネが速く動くように礼拝せよ」と言ったので、トンパ（ドムトンパ）はそのようになさったという。

そこで、ペルチュンは法談を好んだので、多くの法談をした。そのとき、ドム〔トンパは〕が彼の言葉の端を一々くじいてしまったので、彼に迷いが生じて、「東のカムにはドムトンパという居士で仏教者がいるという、それはあなたのことか」と尋ねた。すると、〔ドムトンパは〕「そうでもあるが」とおっしゃったので、彼は驚いて、彼の敷物をゲシェー・トンパに勧め、良馬の首にダタル mda' dar（飾り矢）をつけて献上した。〔そして、〕先ほど礼拝を受けたこと、そして議論したことの許しを請うた。〔タンカ・ペルチュンが〕「このラディンの地に寺院を建て供養処を建てて下さい」と請うた。するとトンパは、「わたしはこの度は留まる暇がない。西のガリに偉大なパンディタ（アティシャ）が来られたというのでそちらに行く」とおっしゃった。

その後も、タンカ・ペルチュンはドムトンパに何度も人を送り、ペンユルのラディンに来るように要請した。ドムトンパは、アティシャと行動を共にしている間はタンカ・ペルチュンによるこの申し出を断っていたが、アティシャの死後、ついにラディンに行くことを決意する。

(gSal ba'i sgron me : ff.100b4-101a2)

そのとき、ある日、乞食が現れて、〔ドムトンパが〕「どこから来たのか」と尋ねると、「ルンシヨー Klungs shod⁶⁹ から来た」という。〔ドムトンパが〕「そ

⁶⁸ ソクチュ Sog chu、つまり現在のチベット自治区ナクチュ区パチェン県 Nag chu sBra chen rdzong を流れる河の周辺地域と思われる。Wu (1995) : pp.462-463 参照。

⁶⁹ ルンシヨーについては、Dung dkar blo bzang 'phrin las (2002) : p.123 に、「ラサのキチュ sKyid chu (川)の上流にあるウルトウー dBu ru stod (キチュの上流ディクン 'Bri gung などの地域)などをいい、その範囲にはラディン、ディクン、ウトウー dBu stod (ウルトウーと同じ意味)、メルドコン Mal gro gung (ラサの東、現在のメルドコンカル県 Mal gro gung dkar rdzong) などがある」とある。ルンシヨーにはペンユルと同じく、多くのカダム派寺院が建立され、カダム派の祖師たちの中にもルンシヨー出身の者が多い。

この全ての人の〔うわさになる〕新しい話はないのか」とおっしゃると、「他に新しい話はないのですが、シャン・タンカ・ベルチュンの子供をゲシェー・トンパという人を招くために送ったが、ペンユルのゲンチュ Ngan chu⁷⁰に流されてしまった」という。ゲシェー・トンパ（ドムトンパ）は、「新しい話は大変重大だ」とおっしゃった。それからまた、タンカ・ベルチュン〔から〕の要請が何度も送られてきたので、ゲシェー・トンパは、「我々を迎える者がいるならば行こうか行くまいか」とおっしゃった。ゴンパワは、「彼（ドムトンパ）の代わりに行く必要はないだろうか」とおっしゃった。そこで彼（タンカ・ベルチュン）は熱心なのでゲシェー・トンパは承諾なされて、先に本尊グルドクチェン（銀の傘を伴ったもの）*dngul gdugs can*を送った。その後、火・男・申の年（1056年）の新年にラディンに來られた。

⑤ 晩年

ラディン寺建立後、ドムトンパは世事に關与することなく1064年に没するまで、ラディン寺で静かな生活を送った。彼の晩年、ラディン寺には50人前後の僧侶しか居らず、その規模は大変小さなものであった。ドムトンパの最期について、『カダム明灯史』は以下のように記す。

(*gSal ba'i sgron me* : f.105a2-6)

〔ドムトンパは〕涅槃に入られるとき、ポトワの膝に頭を乗せておられた。そのとき、ポトワは、「〔ドムトンパが〕恐ろしい所に運ばれ、捨てられるようなことがあったならば、誰に頼ればいいのか」とお考えになり、涙がゲシェー・トンパの衣の上に落ちた。すると、ゲシェー・トンパ（ドムトンパ）は〔ポトワが泣いているのが〕おわかりになって、遺言として、「これ以降、この善知識（ドムトンパ）に頼るべきでなく、経を見よ、善知識を経として見よ。怒った目付きの者とも親しくなれ。同じレベルの者⁷¹でもいけない。2、3人では少ない。1人ではいけない。4、5人までがいい。それより多くてはいけない。心を良くせよ。特別な者と出会うだろう」とおっしゃって、前にはジョボレク *Jo bo legs*⁷²がいて、「良い心というのは菩提心のことを言うのではないですか」と申し上げると、「そうであるが、、」とおっしゃって、木・男・辰の年（1064年）の心宿の月⁷³20日にラディンにて亡くなられた。

⁷⁰ ラサのキチュ川に合流するペンユルを流れる川。

⁷¹ 原文 (*gSal ba'i sgron me* : f.105a4) は「*kha mnyam lag mnyam*」とある。

⁷² *gSal ba'i sgron me* : ff.106a4-106b1.

⁷³ 「*snron zla ba*」とは、チベット暦4月15日から5月15日のことをいう。『藏漢大辞典』Zhang (1993) : p.1602 参照。

5 カダム派の展開

1) 「クムチェースム」の時代

カダム派が、アティシャとドムトンパの時代、つまり成立当初から「カダム」として一つの宗派（集団）の様相を呈していたのかは明らかでないが、『テプテルゴンボ』によれば、先に由来を述べた「カダム」の名が使われるようになったのは、ドムトンパの弟子たち、つまり「クムチェースム（御三兄弟）」sku mched gsumの時代であったという⁷⁴。クムチェースムとは、ドムトンパの直弟子たちの、特にポトワとプチュンワ、チェンガーパ sPyan snga pa tshul khrim 'bar (1038-1103) の3人をまとめていう総称である。同様に、『カダム明灯史』も、カダムの教えが広がっていったのは、クムチェースムとその弟子たちの時代であると述べる。

(gSal ba'i sgron me : f.19b3-5)⁷⁵

ジョボ（アティシャ）ご自身のとき、このカダムという宝をお始めになり、ゲシェー・トンパ（ドムトンパ）がお開きになった。クムチェースムの時代、盛んに広げなされた。ジョボがチベットに来られたとき、ジョボのラマであるパンディタ・ハラナクポ Paṇḍita ha ra nag po という人が、「お前には弟子がたくさん現れる。それらの弟子たちも孫弟子も曾孫弟子もよくなるだろう。そして馳んでいく恐れがある」と予言された。〔その〕孫弟子とはクムチェースムで、その曾孫弟子とはラン（ランリタンパ Glang ri thang pa rdo rje seng ge, 1054-1123）とシャル（シャラワ Sha ra ba yon tan grags pa, 1070-1141）、チャユルワ Bya yul ba gzhon nu 'od (1075-1138) である。その時代こそ、教えの広がりが広がったのである。

このクムチェースム以降、カダム派は大きく、ポトワの系統のシュン派 gZhung pa とゴンパワ（アティシャの弟子）とチェンガーパの系統のダムガク派 gDams ngag pa の2つに分かれ⁷⁶、それぞれの特色の中で展開して後継者を徐々に増やしていった。この2派の違いは、トゥカンが「カダム派の章」において、「2つ（シュン派とダムガク派）とも内容

⁷⁴ Deb ther sngon po : ca f.11b2、羽田野（1986a）：p.93 参照。

⁷⁵ 『カダム明灯史』のこの箇所にはツルティム・藤仲（2005b）：pp.55 に和訳があり参考にした。『一切宗義』「カダム派の章」（本論Ⅱ：第1節1）にも同様の記述がある。

⁷⁶ カダム派の系統に関しては、他に「シュン派」、「ラムリム派」Lam rim pa、「ダムガク派」の3つ、或いは「シュン派」、「ダムガク派」、「メンガク派」Man ngag pa の3つに分ける場合があるようである。ツルティム（1983）：p.26 とツルティム・藤仲（2005）：pp.64-66、Dung dkar blo bzang 'phrin las（2002）：p.164 は、ゴンパワの系統をラムリム派 Lam rim pa とし、チェンガーパの系統をダムガク派とする。また、羽田野（1986d）：p.286 は、ゴク・レクペーシューラプの系統をメンガク派（或いはシュン派 gZhung lugs pa）とする。しかしながら、gSal ba'i sgron me の中にはこれらの区分は見られない。

カダム派寺院の広がり

*建立者 (寺院名, 建立年代)

'Brom ston pa (Rwa sgreng, 1056)

Zhang sna nam rdo rje dbang phyug (rGyal lha khang, 10-11c.)

sKa ba shākya dbang phyug (sGrol ma lha khang, 1055)

rNgog legs pa'i shes rab (gSang phu ne'u thog, 1073)

シュン派 gZhung pa

Po to ba (Po to, 11c.)

Giang ri thang pa (Giang thang, 1093)

Sha ra ba (Sha ra, 11c.)

dGe bshes grab pa (Grab gnas gsar, Pho brang sdings, 11-12c.)

lHa 'bri sgang pa ('Bri sgang gi dgon pa, 12c.)

gNyal pa chos 'bar (Bra gor gyi dgon pa, 12c.)

Ri steng pa rgyal mtshan bzang po (Ri steng, 12c.)

'Chad kha ba ('Chad kha m'ying ma'i dgon pa, 12c.)

Gan pa da re (mKha' ru dgon pa, 12c.)

Se spyil phu ba ('Chad kha gsar ma, sPyil phu'i dgon pa, 12c.)

rGya spangs sa thang pa (sPang sa'i dgon pa, 12c.)

lHa sdings pa (lHa sdings kyi dgon pa, 12c.)

gTum ston blo gros gregs (sNar thang, 1153)

ダムガク派 gDams ngag pa

ゴンパワの系統

Phu chung ba (Phu chung, 11c.)

sNe'u zur pa (sNe'u zur, 11-12c.)

Ka ma ba (Ka ma dgon pa, 11-12c.)

dGyer sgom chen po (Rin chen sgang, 12c.)

チェンガーバの系統

sPyan snga pa tshul khriims 'bar (Lo, 1095)

Bya yul ba gzhon nu 'od (Bya yul, 1114)

Mal shes rab sems dpa' (Tsha thog, 11c.)

sMyug rum pa chen po (sMyug rum, 11c.)

Mang ra dgon pa brison 'grus 'bar (Thang skyai dgon pa, 11-12c.)

sTod lung pa rin chen snying po (bTsan gro, 1103)

Brul sgom chen po dbang phyug rgyal mtshan (rGyal steng, 12c.)

dGe ye ba byang chub 'od (dGe ye, 12c.)

rGya ri ba chen po (rGya ri dgon pa, 12c.)

rTa pa zhang sgom chen po (rTa phu'i dgon pa, 12c.)

bKra shis sgang pa chen po (sMon grong dgon pa, 12c.)

gNam par ba (gNam par gyi dgon pa, 12c.)

dGe bshes se mal 'byor pa (dByi phu dgon pa, 12c.)

Ri mer pa chen po (Ri mer gyi dgon pa, 12c.)

Khrom gzher chen po (Kam kam gyi gsug lag khang, Bar bar gyi lha khang, 12c.)

においては等しいが、典籍の講説の議論を詳しくする（シュン派）か、しないか（ダムガク派）という点において別々に数えるだけである」と説明しているとおりで⁷⁷、一般に、シュン派は顕教を重視し、ダムガク派は密教（の實踐）を重視するとされる。彼らはラサ周辺（ウー dBus 地方）、中でもペンユル、またはペンボ 'Phan po（現在のラサ市フンドゥブ県 lHun grub rdzong 周辺）といわれる地域を中心に多くの寺院を建立した⁷⁸。それはカダム派祖師それぞれに一寺院の割合で増えていき、まさに寺院の建立と共にカダムの教えも広まっていった（図「カダム派寺院の広がり」を参照）⁷⁹。

2) カダム派と寺院の変遷

クムチェースム以降、次々と建立されたカダム派寺院の多くは現存する。しかしながら、建立から現在に至るまで、宗派間の抗争やモンゴル軍の侵攻⁸⁰、そして20世紀の文化大革命による破壊などを経験し、建立当初の状態で存続するカダム派寺院は皆無である。カダム派とカダム派寺院の変遷をめぐっては、主に、以下の<①宗派の変化>、<②尼寺への移行>、<③規模の縮小>の3つが特徴的である⁸¹。

① 宗派の変化

全てのカダム派寺院は、後にゲルク派やその他の宗派に吸収された。したがって、厳密に言えば、現存する寺院は全て「カダム派に由来する寺院」である。カダム派寺院の所在地であるペンユルにおいて、今日に至るまで比較的規模が大きな寺院は、ゲルク派のガン

⁷⁷ 本論Ⅱ：第3節 1.2.3.1 を参照のこと。

⁷⁸ ツァン地方にもナルタン寺などの著名なカダム派寺院があるが、大半のカダム派寺院の所在地はペンユル（ペンボ）である。ペンユルはカダム派寺院の所在地だけでなく、カダム派祖師たちの出身地としても知られた。ペンユルの歴史は古代王国以前、ナムリソンツェン Nam ri srong btsan 王（ソンツェンガンポの父）以前に遡り、敦煌文献 Pt. 1286 と Pt.1287 にもその名が現れる。かつてその名は「ゲーポ」Ngas po として知られたが、ナムリソンツェンの時代にペンユルの名になった。Pt.1287 の記述によると、当時のペンユルの範囲はユナ Yu sna の地、つまりディクン（現在のメルドコンカル県）のあたりからコン Kong、つまりコンボ Kong po（現在のチベット自治区ニャンティ区 Nyang khri）までの非常に広い地域であった。古代王国の崩壊後、ペンユルを指す範囲は徐々に縮小していったようであるが、それでも現在のフンドゥブ県と言われる範囲よりも格段に広い地域を指した。Pt. 1286 と Pt.1287 の和訳は佐藤（1978）：pp.400-403 及び山口（1985）：pp.466-471 を参照のこと。ペンユルについては bSod nams chos dar（2003）と Roesler（2004）：p.11 の地図、井内（2010）：pp.40-42 を参照のこと。

⁷⁹ 図のカダム派寺院は、gSal ba'i sgon me に見られる主な寺院の一部を挙げたものである。

⁸⁰ 1240年、コデン Köden がチベットに派遣部隊を送り、モンゴル軍はソクチュカ（ナクチュ周辺）やペンユルにまで至った。その際、ギェー・ハカンヤラディン寺はモンゴル軍により破壊された。Petech（1990）：p.7 参照。

⁸¹ これについては、the 12th Seminar of the International Association for Tibetan Studies（University of British Columbia, 2010）において、Changes in Early bKa' gdams pa Monasteries with Shifts in the Structure of the Buddhist Community in Tibet のタイトルで口頭発表を行った。

デン・チューコル dGa' ldan chos 'khor⁸² とサキヤ派のナーレンドラ Nāleन्द्रa⁸³ の二寺である。したがって、両寺院の影響からか、ペンユルのカダム派寺院は後にゲルク派、或いはサキヤ派に宗派が変わった寺院が多い。例えば、総本山ラディン寺やドムトンパが優婆塞戒を受けたギェー・ハカンはカダム派からゲルク派に、ランリタンパ建立のランタン Glang thang 寺⁸⁴ はサキヤ派に宗派が変わった。

宗派の変化にともなって、ほとんどのカダム派寺院は、吸収されたそれぞれの宗派の関係の中に組み込まれ、それによって徐々にそれまで存在したカダム派の寺院間の関係性は薄れていった⁸⁵。具体的な例を挙げれば、井内 (2010) で取り上げたチェンガーパ (クムチェースムの1人) 建立のロ Lo 寺は、カダム派時代、チェンガーパの直弟子が建立したチャユル Bya yul 寺 (メルドコンカル県 Mal gro gung dkar rdzong、現在はマンラ Mang ra 寺或いはマラ Ma ra 寺という) と座主を同じくするなど密接な関係があった。しかしながら、ゲルク派に宗派が変わってからは、その関係は完全に消失した。現在はデプン・ロセリン学堂 Blo gsal gling grwa tshang やギェトウー rGyud stod との関係が深い⁸⁶。

② 尼寺への移行

カダム派寺院の中には後に尼寺となった寺院が非常に多い⁸⁷。例えば、ポトワ建立のポト Po to 寺⁸⁸ やシャラワ建立のシャラ Sha ra 寺⁸⁹、パツァブ翻訳師 Pa tshab lo tsā ba nyi ma grags (1055-?) 建立のロツァ・ハカン Lo tsā lha khang⁹⁰ (いずれも現在はゲルク派) がその例である。トゥカンは「カダム派の章」の中で、カダム派寺院の多くが尼寺に変わったその理由について以下のように述べる。

⁸² ガンデン・チューコルの正式名がタンサク・ガンデン・チューコル Thang sag dga' ldan chos 'khor であることから、『テプテルゴンポ』(cha ff. 8a2-8b3) が伝えるタンサク Thang sag 寺であり、建立者はパツァブ翻訳師の弟子とされるシャン・タンサクパ Zhang thang sag pa ye shes 'byung gnas (11c.-12c.) である。Chos 'phel (2004) : pp.166-167, Roesler (2004) : pp.36-37, Yoshimizu (2006) p.127, Yoshimizu (2010) : p.443n.1 を参照のこと。

⁸³ 1436年にロントン・マウエセンゲ Rong ston smra ba'i seng ge (1367-1449) により建立された。寺院の名はインドのナーランダ大僧院に由来する。詳細は Jackson (1989) を参照のこと。他に、Chos 'phel (2004) : pp.172-174, Roesler (2004) : p.26-29 にも詳しい。

⁸⁴ 1093年にランリタンパにより建立された。ランタン寺については、三宅 (1998)、Chos 'phel (2004) : pp.170-172, Roesler (2004) : pp.30-33 を参照のこと。

⁸⁵ 井内 (2010) : p.55, 註 77, 78 参照。

⁸⁶ ロ寺とデプン、ギェトウーとの関係は *Bai dūrya ser po* : pp.171-172 にも記述がある。

⁸⁷ Grong khyer lha sa srid gros lo rgyus rig gnas dpyad yig rgyu cha rtsom 'bri u yun lhan khang (ラサ市政協文史資料編纂委員会) (1997) : p.55 に、フンドゥブ県にある寺院の現状についての報告があり、それによると、65ある寺院のうち、22の寺院が尼寺である。また4109人いる出家者のうち、1367人が尼僧である。つまり、フンドゥブ県にある寺院の約30パーセントが尼寺である。

⁸⁸ ポト寺については、Chos 'phel (2004) : pp.194-195, Roesler (2004) : pp.46-49 を参照のこと。

⁸⁹ シャラ寺については、Chos 'phel (2004) : pp.188-191, Roesler (2004) : pp.34-35, pp.55-73 を参照のこと。

⁹⁰ ロツァ・ハカンについては、Chos 'phel (2004) : pp.177-178 を参照のこと。

(G : f.6b3-6, 本論Ⅱ : 第1節6)

カダムの人たちは女性を非常に避けていたので、空行母の変化身である女性が寺に来たのを厳しく追い出した。そのとき、[空行母が]「今、あなたがたは我々の類(女性)を避けているが、後、寺院の跡地は女性によって守られるだろう」と呪ったのでその縁起によって[尼寺が多くなっているの]である。

またこのトゥカンの記述に関連して、カダム派の祖師たちの尼僧(または女性)に対する態度について『カダム明灯史』は以下のように述べる。

(gSal ba'i sgron me : f.20b3-5)

ゴンパワが亡くなってから、クムチェースムがパボンタン Pha bong thang⁹¹で相談をなされたとき、「我々は今生で人に法を説くべきでない。尼僧の献じたものを食すべきでない。部として寺を所有しない。来世仏である弥勒とジョボ(アティシヤ)の御前で請願しよう。お互いに依って善行を共にしよう」と相談なされた。

「カダム派の章」の記述のとおり、多くのカダム派寺院はトゥカンの時代(18世紀後半)には既に尼寺となっていた。トゥカン以前の文献では、デシー・サンゲーギヤムツォ sDe srid sangs rgyas rgya mtsho (1653-1705)著『ヴァイドゥリヤセルポ』*Bai dūrya ser po* (1698年成立)が、ポト寺(ポトワ建立)を既に尼寺として記録している⁹²。上の「カダム派の章」に見られるカダム派寺院の多くが尼寺になった理由については、「カダム派の章」の典拠となる『テプテルゴンポ』や『カダム明灯史』には見られない。尼寺として存続するカダム派寺院が、いつ頃、どのような理由で尼寺に移行したのかについては多くの疑問が残る。

③ 規模の縮小

カダム派の全盛時代、「六大寺」gDan sa drug と呼ばれる寺院群があった。六大寺とは、 Samp・ネウトク gSang phu sne'u thog⁹³、ニェタン・デワチェン sNye thang bde ba can (またはラトウー Ra stod)⁹⁴、ツェル・クンタン Tshal gung thang⁹⁵、ガドン dGa' gdong⁹⁶、キョルモルン sKyor mo lung⁹⁷、スルプ Zul phu⁹⁸の6寺を指し、ゲルク派の「三大寺」gDan sa

⁹¹ ラサのパボンカ Pha bong kha と同じと考えられるが、詳細は不明。

⁹² *Bai dūrya ser po* : p.172, pp.175-176 のトゥールンの項とベンユルの項にポト寺の記述が見られ、どちらも尼寺となっている(表記が「sPo tho」、「Pu to」と若干異なる)。

⁹³ Samp・ネウトクはトゥールン・デチェン県 sTod lung bde chen rdzong に現存する。1073年にゴク・レクペーシェーラプにより建立された。後、チャパ・チューキセンゲ Phywa pa chos kyi seng ge (1109-1169)も18年間座主を務め、論理学の中心地であった。伝統的に、ジャン'Jang 寺(ラサ市チュシユル県)の冬安居 dgun chos に対して夏安居 dbyar gnas が行われる場所である。

gsum (セラ Se ra 寺、デプン寺、ガンデン dGa'ldan 寺) 以前、チベット、特に中央チベットにおいて、中心的な役割を担った大寺院であった。この「六大寺」はいずれもカダム派と関わりが深い寺院であり、中でも、初期カダム派祖師の1人であるゴク・レクペーシェーラプ建立のサンブ僧院(サンブ・ネツク)は、序論で述べられるとおり、チベット仏教のその後の展開に大きな影響を及ぼした寺院であり、同寺の座主を務めたチャパ・チューキセンゲ Phywa pa chos kyi seng ge (1109-1169)により形成された問答の流儀や学問体系はその後のサキャ派やゲルク派の僧院にも広く取り入れられた。ツォンカパやその弟子である「三大寺」の建立者たちもサンブ僧院にて学んだ⁹⁹。しかし、今日のサンブ僧院の状況を述べれば、寺院に所属する僧侶はほんの数名であり、かつての学問寺の活気はなく、当時の面影は全く見られない。同様に、「六大寺」の中のスルブ寺に至っては、寺院跡が廃墟として残るのみで、伝統そのものが完全に途絶えてしまっている¹⁰⁰。同様のことは六大寺のみならず、多くのカダム派に由来する寺院に共通して言えることである¹⁰¹。

以上述べたようなカダム派とカダム派寺院をめぐる変遷の詳細については、カダム仏教史文献以外の後代に書かれた文献の中に、カダム派に由来する寺院についてのその後(カダム派時代以降)の記述が極端に少ないために不明な部分が多い¹⁰²。今後、カダム派祖師

⁹⁴ チュシユル県にあり、1205年にギャ・チンルワ rGya ching ru ba により建立された。建立者については諸説あり、建立者をカワ・シャキヤワンチュクとする説もある。ゴク・ロデンシェーラプ rNgog blo ldan shes rab (1059-1109)が晩年座主を務めたことでも知られ、ツォンカパもここで般若を学んだ。Chos 'phel (2004) : pp.125-128 参照。

⁹⁵ ラサ市にあり、クンタンラマ・シャン・ツォンドウータクパ Gung thang bla ma zhang brtson 'grus grags pa (1123-1193)により1175年に建立された。Chos 'phel (2004) : pp.78-80 参照。

⁹⁶ トゥールン・デチェン県にあり、シクボ・シェーラプ Zhig po shes rab により建立された。Chos 'phel (2004) : pp.98-99 参照。

⁹⁷ トゥールン・デチェン県にあり、阿羅漢ワンチュク・ツルティム dGra bcom pa dbang phyug tshul khrim により1169年に建立された。Dung dkar blo bzang 'phrin las (2002) : pp.271-272、Chos 'phel (2004) : pp.96-98 参照。

⁹⁸ 建立者不明。

⁹⁹ 小野田(1989) : pp.352-362 参照。

¹⁰⁰ 寺院跡は現在のチュシユル県ツァナ Tshar sna 郷にある。

¹⁰¹ 20世紀の大学者ゲンドウン・チューベル dGe 'dun chos 'phel (1903-1951)は、『世界知識行』gSer gyi thang ma (dGe 'dun chos 'phel (1990) : pp.11-12)において、ペンユルにあるカダム派寺院、パツァブ翻訳師建立のロツァ・ハカンについて、「このような大変有名な寺々は歴史などに通じていない者たちが「ウー・ツァンのほうにある」と言う以外どこにあるのか全く知らない」と述べている。ちなみに、『世界知識行』については、加納(2010a)の和訳と研究があり、以降も順次発表予定である。

¹⁰² 井内(2010)において、ロ寺を例にして述べたように、このようなカダム派寺院の変遷をめぐっては、チベット社会の変化も理由の1つとして挙げられる。同寺が文化大革命後も復興を遂げ、現在もある程度の規模を保ち続けることができたのは、同寺が「チベットの三大転生ラマ」Bod kyi sprul sku rnam gsum の一人であるロセンバ・トゥルク Lo sems dpa' sprul sku の寺院であり、経済的に恵まれた環境にあったことは見逃せない。

の著作や伝記も多く含まれるデブン寺所蔵の新出文献の公開やそれに対する研究、また現存するカダム派寺院に対する個別の調査によってその詳細が徐々に明らかになることが予想される。

Ⅱ 『一切宗義』 「カダム派の章」 和訳と註釈

「カダム派の章」 章節・科段目次

序 (ff. 0a1-1a4)

第1節 ジョボチェンボ(アティシャ)の恩恵によりカダムの流儀が生じた有様 (ff. 1a4-6b6)

- 1 カダムの意味 (ff. 1a4-2b4)
- 2 ジョボの伝記概略 (ff. 2b4-3a4)
- 3 ジョボがチベットに来られた有様 (ff. 3a4-4b6)
- 4 チベットに来られて教えに対してなされた有様 (ff. 4b6-5a6)
- 5 カダム派の流儀が広がった有様 (ff. 5a6-6b1)
- 6 カダム派の各寺院 (ff. 6b1-6b6)

第2節 カダムの教えに依って他の教えの守持者が生じた有様 (ff. 6b6-9a4)

- 1 カギユ派が生じた有様 (f. 7a1-6)
- 2 サキヤ派が生じた有様 (ff. 7a6-7b2)
- 3 ゲルク派が生じた有様 (ff. 7b2-8a4)
- 4 顕教の典籍が広がった有様 (ff. 8a4-9a4)

第3節 カダムの教えの概説 (ff. 9a4-17a3)

- 1 法の種類
 - 1.1 カダム派の「典籍」
 - 1.1.1 カダム派の特徴と『ラムドゥン (菩提道灯論)』 (ff. 9a5-10a2)
 - 1.1.2 カダム六宗典 (ff. 10a2-4)
 - 1.2 カダム派の「教誡」
 - 1.2.1 見解を主に説いたもの (ff. 10a4-10b4)
 - 1.2.1.1 カダム派の見解 (ff. 10b4-11a4)
 - 1.2.2 行が主となる教誡 (ff. 11a4-11b2)
 - 1.2.2.1 ロジョン (修心) の伝統 (f. 11b2-6)

- 1.2.2.2 『ロジョン・トンドウンマ（修心七義）』の教示の順序（ff. 11b6-12b1）
- 1.2.2.3 『メンガク・トゥンゲーマ（口訣八頌）』と菩提心の修習（ff. 12b1-13a2）
- 1.2.3 見解と行を合わせて説いた口訣の王（『ラムドゥン（菩提道灯論）』）（f. 13a2-4）
 - 1.2.3.1 ラムリム（道次第）の継承（ff. 13a4-14a3）
- 1.3 カダム派の「口訣」
 - 1.3.1 『カダム父法』と『カダム子法』（ff. 14a3-14b1）
 - 1.3.2 秘法『カダムレクパム』の伝統（ff. 14b1-15a1）
 - 1.3.3 「五随念」と「四尊三蔵」（f. 15a1-4）
- 1.4 カダム派の密教の口訣（ff. 15a4-16a3）
- 2 カダム派の修行者の行い（ff. 16a3-17a3）

結論（ff.17a3-17b2）

序

『一切宗義の起源と綱要を示す善説水晶鏡』より、カダム派の宗義が生じた有様。

[1a] 最上の〔菩提〕心である如意宝を真髓として持ち
無量である菩薩行の大海にて
遊ぶ千の蛇の冠を持つ賢者にして成就者たちのために
カダム派として知られる〔その〕宗義の興りを述べよう

第2に¹、カダム派の宗義が興った有様を簡略に述べるに際しては〔以下〕3つ〔がある〕。

- (第1節) ジョボチェンポ Jo bo chen po (アティシャ Atiśa, Dīpaṃkaraśrījñāna, 982-1054)²
の恩恵によりカダムの流儀が生じた有様
(第2節) それ(カダムの教え)に依って教えと他の教えの守持者が生じた有様
(第3節) カダムの教えの概説

第1節 ジョボチェンポ(アティシャ)の恩恵により カダムの流儀が生じた有様

1 カダムの意味

第一は〔以下の通り〕。

それについても、先代のラマたちは、カダム [2a] 派という語義説明において、異なることを僅かに仰っているけれども³〔例えば以下の通り。〕

ジェ・リンポチェ rJe rin po che (ツオンカパ Tsong kha pa blo bzang grags pa, 1357-1419)⁴がチェンガ・リンチェンベル sPyan snga rin chen 'phel (1357-

¹ 『一切宗義』全体の構成として、第一章の「ニンマ派の章」の次が「カダム派の章」であるので、「第2に」とある。本論 I : 1 を参照のこと。

² ジョボチェンポとは、アティシャに対する呼び名で、本章では他にも、ジョボ Jo bo、ジョボジェ Jo bo rje、アティシャ A ti sha、ジョボジェ・ベルデン・アティシャ Jo bo rje dpal ldan a ti sha などと呼ぶ。Cf. 「ゲルク派の章」立川・石濱・福田 (1995) : 註 11。アティシャの思想の概要については、たとえば Miyazaki 2008 参照。

³ 本論 I : 3 を参照のこと。

1419)⁵に、「カダムという〔言葉の〕意味は何か」と仰ったところ、チェンガは、「仏のお言葉 bka' から「ナ」na の文字⁶ 一文字も残さず教誡 gdams ngag⁷として理解することを言います」と申し上げた。すると、「その通り、その通り」と大変お喜びになられた。僧院に行かれて、「ゲシュー・リンチェンペルがわたしに正法の贈り物を持ってきた。彼がそのように言っているが、それは全くその通りだ」と仰った⁸。

それ故、仏のお言葉である [2b] 三蔵の残すことのない一切の意味をアティシャの教えである三士⁹の道次第 (ラムリム) として集めて実践するので「カダム派」といわれるのである。〔それは〕ドム 'Brom (ドムトンパ 'Brom ston pa rgyal ba'i 'byung gnas, 1004/5/6-1064)¹⁰ が、

希有なる仏のお言葉 (カ bka') は三蔵であって
教え (ダムパ gdams pa) は三士によって飾られたもの
〔そのような〕カダムの宝である金の数珠は
いかなる衆生が数えても意味が生じる¹¹

⁴ ゲルク派の開祖。ツォンカパの伝記については「ゲルク派の章」立川・石濱・福田 (1995) : p.xii、その生涯及び伝記の和訳については「ゲルク派の章」立川・石濱・福田 (1995) : pp.4-51 と石濱・福田 (2008) を参照のこと。

⁵ *gSal ba'i sgron me* : ff. 209b5-210a2. ツォンカパの弟子の1人で、サンプ・ネウトクやキョルモルンにて学び、特に、チャユルワの弟子であるドゥルゴムチェンポ・ワンチュクギェルツェン *Brul sgom chen po dbang phyug rgyal mtshan* が建立したゲテン *rGyal steng* 寺 (メルドコンカル県) のチューキドルジェ *Chos kyi rdo rje* (14c.) に就いて学んだ。チューキドルジェの後、ゲテン寺の座主も長年務めた。

⁶ 「一文字も～ない」という比喩表現。一般に、ナ na の文字が用いられる。

⁷ 原則として、本訳ではダムパ *gdams pa* を「教え」、ダムガク *gdams ngag* を「教誡」、メンガク *man ngag* を「口訣」と分けて訳した。*gSal ba'i sgron me* : f.11a4-6 はダムガク (教誡) とメンガク (口訣) の違いについて次のように説明する。

一般に、ダムガクもメンガクであって、ジョボ (アティシャ) も、「ウパデーシャ *upadeśa* は何と訳すか」とおっしゃって、トンパ (ドムトンパ) が、「メンガクと訳します」と申し上げると、「メンガクの意味は何とするか」とおっしゃった。「秘密に示すことです」と申し上げると、「そうでもあって、メンガクの害のある意味を捨てて〔害のなきものを〕取り出したものをいうのである」とおっしゃった。ウパデーシャをそのまま訳すと、「良く説くこと」というように訳すのであって、それもまたすぐに分かる意味であるのだ。

⁸ *gSal ba'i sgron me* : f. 3b4-5 と一致。

⁹ 「三士」とは、アティシャが『ラムドゥン』の中で説いたもので、「小士」*skyes bu chung ngu* は無常を思い自己の後生を重視する者、「中士」*skyes bu 'bring ba* は輪廻を厭い自利の解脱を求める者、「大士」*skyes bu chen po* は大悲を生じて利他のために無上正等覚を目指す者をいう。ツルティム・藤仲 (2005a) : p.3 参照。

¹⁰ ドムトンパについては、本論 I : 4-2 を参照のこと。

などと仰っている通りである。

その特別なカダムの流儀がどのように生じたかという有様については、ジョボジェ・ペルデン・アティシャから始まって、トンパ・リンポチェ（ドムトンパ）が流派を開き、「クムチースム（御三兄弟）」sku mched gsum¹² が盛り立てて広めなされた。ラン Glang（ランリタンパ Glan ri thang pa rdo rje seng ge, 1054-1123)¹³、シャル Shar（シャラワ Sha ra ba yon tan grags pa, 1070-1141)¹⁴ の 2 人とチャユルワ Bya yul ba（gzhon nu 'od, 1075-1138)¹⁵ などにもさらに広めなされた。

2 ジョボの伝記概略

ジョボジェの伝記の詳しいものは他に書かれている通りであるが¹⁶、偉大な優れた点〔について〕の要約は、仏教史『〔カダム〕明灯〔史〕』gSal ba'i sgron me¹⁷ に、

東方のサホル Za hor 王のご子息として誕生し¹⁸
内外の明など全てに精通した
清浄な三学の住处である律を保持し
根本四部と枝末十八部派¹⁹ の
流儀などそれぞれを区別して理解なさせて
一切により尊敬され、あなたのお言葉は規範である、と受け入れられ
ヴィクラマシーラ rNam gnon ngang tshul（Vikramaśīla）などのマガ [3a] ダ国
の
一切の重要な経堂の主をなさり
数限りない本尊のお顔をご覧になって

¹¹ アメーシャプ・ガワンクンガーソナム（1597-1662）著 *Sa skya pa'i gdung rabs ngo mtshar rin po che'i bang mdzod*（*Sa skya rgyal yongs gsung rab slob gnyer khang*, Kathmandu 2000, f.53b3）と一致する。Geshé Lhundub Sopa（2009）：n. 333 参照。

¹² ドムトンパの弟子であるポトワ、プチュンワ、チェンガーパの 3 人を指す。本論 I：5-1 を参照のこと。

¹³ *gSal ba'i sgron me*：ff.228a3-229b1。『デブン寺所蔵古籍目録』no.017604（p.1559）に単独の伝記も確認できる。ポトワの弟子で、1093 年にランタン寺（フンドゥブ県）を建立した。ランタン寺については、本論 I：註 84 を参照のこと。

¹⁴ *gSal ba'i sgron me*：ff.236a6-240b4。ポトワの弟子の 1 人。

¹⁵ *gSal ba'i sgron me*：ff. 252b5-263a4。チェンガーパやトゥールンパ sTod lung pa rin chen snying po（1032-1116）の弟子で、1114 年にチャユル寺を建立した。チャユル寺については、Chos 'phel（2004）：pp.215-216、井内（2010）：pp.44-45 を参照のこと。

¹⁶ アティシャの単独の伝記として *rNam thar rgyas pa* がある。

¹⁷ 『カダム明灯史』については、本論 I：2 を参照のこと。

¹⁸ サホルとは現在のベンガル地方をいう。

¹⁹ 「インドの思想と仏教」川崎・吉水（2007）：pp.43-45 を参照のこと。

三蔵とタントラ部の法についてご存知ないものはなく
セルリン gSer gling (chos kyi grags pa, 10c.)²⁰ の如意瓶からもらった
菩提心の甘露を完全に召し上がった
論証と批判する正理の声によって
悪い対論者という象を酔わせて
福分を持つ者たちにはそれぞれ考えに
従って正法によって満足をさせる
賢劫の菩薩という
ターラーにより予言されたナーローパ Nāropa (1016-1100)²¹ によって
教えの主として任された
それがパルデン・マルメゼーパル dPal ldan mar me mdzad dpal (アティシャ)
である²²

とある通りである。

3 ジョボがチベットに來られた有様

ジョボジェ、その方がチベットに來られた有様については〔以下の通り。〕

それについても、有雪の国（チベット）には教えの盛衰が幾度もあり、「ケン・ロブ・チュー・スム」mkhan slob chos gsum²³ によって教えの流儀が創られたがそれを〔中国の〕和尚が破壊した。それをカマラシーラ Kamalaśīla (ca.740-795/797) が論破し、清浄な見と行が発展していた。それを悪王ランタルマ Glang dar ma (8c.-842) が破壊し、70年ほどの間、チベットは暗闇の国となった。そして、ラチェン・ゴンパラブセル Bla chen dgongs pa rab gsal (953-1035) がドカムメー mDo khams smad (アムド A mdo とカム Khams) から教えの残り火を興した。大翻訳師（ロチェン lo chen）[3b] リンサン Rin bzang（リンチェン・サンポ Lo chen rin chen bzang po, 958-1055）²⁴ がガリ mNga' ris（西チベット）のトゥー sTod から〔ゴンパラブセルが興した教えの火を〕燃やしたので、ウー・ツァン dBus gtsang（中央チベット）の地に僧伽が繁栄した²⁵。しかしながら、ある者は律を敬って密教は軽視し、ある者は密教を敬って律を軽視したので、教えが偏ったものになってしまった。大半は宗

²⁰ インドにおけるアティシャの師の1人で、セルリンパのこと。セルリンパの著作と学説に対する研究には斎藤（2003a）（2003b）がある。

²¹ 序論：註9を参照のこと。

²² gSal ba'i sgron me：ff.414b6-415a4 と一致。

²³ シャーンタラクシタ mKhan chen zhi ba 'tsho（Śāntarakṣita）、ペマジュンネー Slob dpon padma 'byung gnas（パドマサンバヴァ）、ティソン・デツェン Chos rgyal khri srong lde btsan（在位 754-796）の3人をいう。

義を部分的に説くだけで、仏説の全てを実践にもたすことができる者はもちろん、部分的にすら理解する者も稀になった。

特に、ランタル〔マ〕によって破仏があったその間、密教行者の中には、記憶しているタントラの言葉を文字に書いて、途中の言葉で忘れて出てこないものは頭〔の中で〕作った不純なものが含まれる術語を出てくるままに編纂した。またある者は、タントラの名を付けた自分勝手に作った町の言葉（町で使われるその辺の言葉）のみを好んで書いた。自分の妻に、「今日は旨い酒を作れ、〔そうすれば〕わたしは一帙に達するまでのタントラの経を書こう」という密教行者までも現れた。インドから阿闍梨マルポ dMar po という者と、パンディタ・シャムタブ・ゴンポチェン Sham thabs sngon po can など何人かが現れ、女性を行に用いることと、敵などの有情を殺すことで救度する、という性瑜伽と呪殺 sbyor sgröl などの [4a] 誤った法と、他にも密教と名付けられた多くの粗悪な行いが広まった。それらのせいで、清浄な（誤りのない）見と行を持つ者は少なく、誤った法を行う者が多くなってしまった。〔それに対して〕ハラマ・イエシェー・ウー lHa bla ma ye shes 'od (10c.)²⁶ とポタン・シバ・ウー Pho brang zhi ba 'od (11c.)²⁷、大翻訳師リンサン（リンチェン・サンポ）などが誤った法を批判する文書を書いて公布したけれども有効ではなかった²⁸。その時に、ガリの王ハラマ・イエシェー・ウーはチベットの教えの状況がそのようになっていることに忍び難く、インドから偉大なパンディタで教えに対して規範となるような方をお招きして〔そのような状況を〕正して頂く以外に有効な方法は他にない、とお考えになって、ギャ・ツォンドウセンゲ rGya brtson 'grus seng ge (b.10c.)²⁹ にたくさんの金を託し、アティシャを迎えようと派遣したが、お招きできなかった。さらにたくさんの金を探してお招きするために託そうとお考えになり³⁰、金を探しに行かれた先でカルロク Gar log³¹ の

²⁴ 後伝初期の翻訳師。一般に、チベットにおける密教の訳経史は「旧訳」gsang sngags rmying ma と「新訳」gsang sngags gsar ma に分けられ、リンチェン・サンポによる密教の翻訳をもって「新訳」とされる。リンチェン・サンポに関しては、gSal ba'i sgron me : ff.66a2-67b1 にも伝記があるが、単独の伝記として Rin chen bzang po'i rnam thar がある（伝記の詳細は井内（2003）：註（2）を参照のこと）。リンチェン・サンポは西チベットのキュワン Kyu wang に生まれ、カシミールや東インドに赴き翻訳を学ぶ。グゲ・プラン王国のハデ lHa lde 王の支援を得て、インドのパンディタと共に多くの翻訳をし、西チベットを中心に、トディン mTho gling 寺やタボ寺をはじめ多くの寺院を建立した。

²⁵ 本論 I : 4-1 を参照。

²⁶ グゲ・プラン王国の王。『デプン寺所蔵古籍目録』no.017258 (p.1530) に単独の伝記が確認される。

²⁷ gSal ba'i sgron me : ff.66a2-67b1. グゲ・プラン王国の王で、チャンチュブ・ウーと同じく、ハラマ・イエシェー・ウーの甥にあたる。翻訳師として知られ、rDo rje 'phreng ba (P.82/D.445) などを翻訳した。

²⁸ ハラマ・イエシェー・ウーが中央チベットにいた密教行者たちに宛てた「布告」bka' shog がニンマ派のソグドクパ・ロドーギェルツェン Sog bzlog pa blo gros rgyal mtshan (1552-1624) の著作集 gSang sngags snga 'gyur la bod du rtsod pa snga phir byung ba rnam kyī lan du brjod pa nges pa don gyi 'brug sgra に所収される。Karmay (1980) : pp.9-16 にチベット文の全文と英訳がある。

²⁹ gSal ba'i sgron me にまとまった記述は見られない。ハラマ・イエシェー・ウーによってインドへ派遣されたことやアティシャの著作（例えば 'Phags pa lag na rdo rje gos sngon po can gyi cho ga zhes bya ba'i gzung. (P.132/D.748) など）を翻訳したことで知られる。

王により捕まって釈放されなかった。イエシェー・ウーの甥のチャンチュプ・ウー Byang chub 'od (11c.)³² は、たくさんの金を探して叔父の身代金を払いに行ったが、釈放できなかった。そしてイエシェー・ウーはカルロク [の王] によって殺された³³。チャンチュプ・ウーは、彼 (イエシェー・ウー) の指示の通りにナクツォ翻訳師ツルティムゲルワ Nag tsho lo tsā ba tshul khriims rgyal ba (1011-1064)³⁴ にたくさんの金を託し、パンディタをお招きするためにインドへ送った。[4b] ナクツォとギャ・ツォンセン (ツォンドウセンゲ) の2人は集まり、アティシャに対してチベットの教えの状況とイエシェー・ウーが苦勞した有様などを詳しく申し上げ、チベットに来られるように請願した。以前より、ジョボにはチベットに行くという多くの予言があったけれども、その夜再び、尊母ターラーなどに請願をしてお伺いをお立てになったところ、「ある空行母がいるので問いなさい」とおっしゃったのに従って、問いかけると、「チベットに行けば、教えに利益し、特に一人の優婆塞に依って利益がある (利益が大きくなる)」という予言があった。[因って] チベットに行くことを承諾なされた。

教えにおける盛衰と混沌の有様と、その (教えの) ためにハラマの叔父・甥 (イエシェー・ウーとチャンチュプ・ウー)、翻訳師たちが多大な苦勞をなされた様子の詳細を知るならば、それらの恩恵を思い起こして清浄な法は得難いことを知って、軽率に取り組まずに区別を知って取り組むことなどの必要性は大きい。因って、詳しく書くべきであるが、文字が多くなることを恐れてここでは僅かしか取り上げない。[詳しくは] 他において知るべきである。

³⁰ インドやカシミールからパンディタを招く際、或いはチベットの翻訳師たちがインドでパンディタたちに就いて学ぶ際に報酬として金を支払うことはチベットの伝記史料の随所に見られる。これについては大西 (2007) に詳しい。

³¹ 本論 I : 4-1 を参照のこと。

³² *gSal ba'i sgron me* : ff.68a6-68b5. チベットの仏教史書全般ではアティシャをチベットへ招いた人物とされる。

³³ イエシェー・ウーがアティシャを招請するために金を探しに行き、カルロクの王に捕まったというエピソードはアティシャの伝記である『ナムタルゲーワ』*rNam thar rgyas pa* : ff.47a5-47b3 以降に見られ、後の仏教史書 (*Deb ther dmar po* : p.42 や *Deb ther sngon po* : ca ff.2a7-2b4 など) のイエシェー・ウーに関する記述はこの『ナムタルゲーワ』に従っているとされる。Petech (1990) : pp.249-250, Petech (1999) : pp.1-8 参照。ガリの王統紀『ガリ王統紀』*mNga' ris rgyal rabs* にはイエシェー・ウーの死にまつわるこのエピソードは見られず、イエシェー・ウーはトディン寺 (リンチェン・サンポにより 996 年に建立) で病死したと伝える (*mNga' ris rgyal rabs* : p.59)。イエシェー・ウーの没年については不明であるが、Vitali (1996) : pp.171-185 は 1024 年とし、Scherrer-Schaub (1999) : pp.220-221 は 1019 年とする。井内 (2003) 参照。

³⁴ *gSal ba'i sgron me* : ff.67b2-68a6. ナクツォ翻訳師については川越 (2000) (2001) の詳細な研究がある。

4 チベットに來られて教えに対してなされた有様

チベットに來られて教えに対してなされた有様については〔以下の通りである。〕『ラムリムチェンモ（菩提道次第大論）』 *Lam rim chen mo*³⁵ においてジョボジェの偉大さを説く箇所に、

ガリ〔すなわち〕トゥーに來られた時、〔アティシャに〕仏の教えを [5a] 正すことを請願したことにより、顯密の要所の一切を集めて実践する次第を並べた典籍である『ラムドゥン（菩提道燈論）』 *Byang chub lam gyi sgron ma* (P.5378/D.4465)³⁶ を著されたことなどを通じて、教えを広められた。また、ガリに3年、ニェタン sNye thang³⁷ に9年、他のウー・ツァン〔の地〕に5年の間³⁸、縁を持つ者たちに顯密の典籍と教誡を残らず教えて、消滅した教えの伝統などは新たに打ち立て、わずかに伝統を持ったものは栄えさせた。誤った理解という垢によって汚れたものを正しく〔汚れを〕取り除いて、教えの宝を汚れから離れるようになされた³⁹。

と説いている通りである。このお言葉を詳しく考えるならば、非常に重要な理解すべきことが多くあると思われる。

〔アティシャは〕チベットに17年間居られて、御歳73歳の水・男・午の年（1054年）の9月18日⁴⁰、ニェタンにおいて涅槃に入る様をお示しになって、兜率天の弥勒菩薩の御前で菩薩「汚れのない空」 *nam mkha' dri ma med pa* というものになった。

5 カダム派の流儀が広がった有様

ジョボチェンポに、インドとチベットのどちらにも、学者で且つ成就を得た弟子が多く現れたが、〔アティシャが〕教えを壺いっぱい注ぐように与えて教えの主として加持した者は、[5b] 聖なる観音菩薩の化身であり、アティシャ自身にターラーが予言し、〔また〕

³⁵ 『ラムリムチェンモ』については、「ゲルク派の章」立川・福田・石濱（1995）：pp.42-44を参照のこと。全訳として Lamrim Chenmo Translation Committee による英訳（*The Great Treatise on the Stages of the Path to Enlightenment*, Snow Lion, Ithaca, vols.1-3, 2000, 2002, 2004）がある。和訳の部分訳としてツルティム・藤仲（2005b）がある。

³⁶ ツルティム・藤仲（2007）：pp.400-405に偈の全訳がある。

³⁷ 本論Ⅰ：註38参照。

³⁸ アティシャは、クトウンが居たタンポチェヤゴク・レクパーシェーラプが居たイェルバなどを訪れた。アティシャがウー・ツァンに滞在した年数は文献によって若干の相違が見られる。これについては羽田野（1987b）に詳しい。

³⁹ *Lam rim chen mo* : ff.6a4-7a1. ツルティム・藤仲（2005b）：p.89の和訳を参照した。

⁴⁰ *Deb ther sngon po* : ca f.10a3 は、アティシャの没年を同年の中秋（8月）20日とする。

『華嚴經』 *Sangs rgyas phal po che* (*Buddhāvataṃsakanāmamahāvaiṣṭyasūtra*, P.761/D.44) と『大悲白蓮華經』 *sNying rje padma dkar po'i mdo* (*Mahākaruṇāpūṇḍarīkanāmamahāyānasūtra*, P.779/D.111) にて「法を榮えさせる居士」 *dge bsnen chos 'phel* と予言されたドム・リンポチュエ・ギェルウエージュンネー (ドムトンパ) である⁴¹。トンパ・リンポチュエ (ドムトンパ) がカダムの伝統を開き、クムチェースム (ポトワ、チェンガーパ、プチュンワの3人) などによって広まり盛んになさった。この有様を詳しく述べるならばとても多くなるのでカダムの仏教史などから知るべきであり、簡略には『[カダム] 明灯 [史]』に、

そして 10 年の間

ゲシェー・[ドム] トンパが [僧たちの] 集団の長をなさって

ジョボの法座である吉祥のラディン *Rwa sgreng*⁴² を建てた

清浄な弟子の集団をお育てになった

そして 20 年余り

クムチェースムのご活躍が花開いた

ウル *dbu ru* の北⁴³ にカダムの太陽が昇った

雪山 (チベット) を残らず光によって満たした

大仙人ポトワ *Po to ba* (*rin chen gsal*, 1031-1105)⁴⁴ には

清浄な見と行 [を持つ] 弟子が

短い間にも 2 千人余りと

チェンガーパ *sPyan snga pa* (*tshul khrim 'bar*, 1038-1103)⁴⁵ に 800 人 [から]

900 人集まった

プチュンワ *Phu chung ba* (*gzhon nu rgyal mtshan*, 1031-1106)⁴⁶ は集団を育てな

かったが

隠された方法により無数 [の弟子を] お育てになった⁴⁷

カムパルンバ *Kham pa lung pa shākya yon tan* (1025-1115)⁴⁸ の『[メンガク]

⁴¹ *sNying rje padma dkar po'i mdo* : f.84a2.

⁴² ラディン寺建立の経緯については本論 I : 4-2 を参照のこと。

⁴³ ウルとは、『藏漢大辞典』(Zhang (1993) : p.1942) によると、ラサのラモチュエ *Ra mo che* を中心として東はオルカ *'Ol kha* のシュクパブドゥン *shug pa spun bdun* (オルカはツェタンの東、現在のロカ区サンリ県 *lHo kha zangs ri rdzong*)、南はホマラ *lHo rma la* 山脈、西はニエモ *sNye mo* (現在のシガツェ区ニエモ県)、北はランマグルブツ *Glang ma gur phub* までの地域をいう。五翼 *ru chen lnga* については佐藤 (1978) : pp.348-357 に詳しい。

⁴⁴ *gSal ba'i sgron me* : ff.215b4-222b2. クムチェースムの 1 人で、ドムトンパの他にクトゥンにも学んだ。

⁴⁵ *gSal ba'i sgron me* : ff.164b1-168b3. チェンガーパはクムチェースムの中の最年少で、ドムトンパの晩年、ラディン寺にて師事した。チェンガーパについては井内 (2010) : pp.45-49 を参照のこと。

⁴⁶ *gSal ba'i sgron me* : ff.267a1-268a4. ペンユルのユンワ *Yung ba* (フンドゥブ県) にプチュン *Phu chung* 寺を建立した。クムチェースム建立の寺院の中で唯一現存しない。Roesler (2004) : pp.50-51 に寺院跡の写真がある。

トウンゲーマ』 *thun brgyad ma* にもまた
解脱を求める 800 人が [6a] 集まった、といわれる
クムチェースムによってよく育てられた弟子である
ランタンパ *Glang thang pa* (ランリタンパ) に千人ほどと
ゲシェーチェンボ・シャラワに
行いが清らかな者 3 千人余りが集まった
ゲシェー・ヤゲーパ *Ya gad pa* (ゲシェー・トルワのこと)⁴⁹ には千人余りと
チャユルワには 2700 人など
[3 人の] ご活躍により育てられた善知識は無数であって
この時代だけでも教えの流布は大きかった⁵⁰

とある通りである。

そのように、ガリの王ハラマの叔父・甥が教えのみを心に想い、身命も財産も顧みず、多大な労苦によりジョボジェ・ペルデン・アティシャをチベットにお招きした。このことにより、密教を騙った粗悪な法などの誤った行いなどや顕教と密教の 2 つが熱と冷のように相反するものであると捉える誤った認識などは、太陽が昇ると暗闇が自然に消えてしまうようになった。ラチェンボ (ゴンパラプセル) の伝統を持つ者などの後伝仏教の清浄な見と行を持つ一切の者も、ジョボの教えの伝統の下にあり、ウー・ツァンの地全ては、内も外も清浄な蓮花の花のような行いを護持するジョボ・カダム派の教えを持つ者によって全てが満たされる [6b] ようになった。

6 カダム派の各寺院

カダムの流儀を持つ多くの寺院がウー・ツァンの地全てに遍満した。このうち、最近ま

⁴⁷ このようなプチュンワの態度は、*Deb ther sngon po* : ca f.13a3-4 も伝えている。以下、該当部分の和訳は羽田野 (1986a) : pp.103-104 より引用する。

プチュンワ・シヨヌギェルツェンは、「屠殺した羊の肉は自身で食べる」とおっしゃって、徒弟衆 *tshogs* を養育せず、[そのための物資をもって] 三宝供養の事業に非常に精励し、内面的には禅定し、法縁を結ぶことを請う者たちに対しては、四諦を広説なさった。

一方、*gSal ba'i sgron me* : f.268a3-4 には以下のようにある。

他にも、クムチェー 2 人 (ポトワとチェンガーパ) の弟子の大半は [プチュンワに] 法をお聞きになっていない者はいない。チェンガー [パ] が亡くなって、チャユルワがプチュンに至り、縁起の指導をお聞きになっておられたとき、マンラ *Mang ra* が、「今、プチュンには声聞の神通によって衆生の菩薩がいる」とおっしゃったという。

⁴⁸ *gSal ba'i sgron me* : ff.106b5-107b1. アティシャとドムトンパの弟子の 1 人。ペンユルのユンワ (フンドゥブ県) に生まれ、カムルン *Khams lung* (フンドゥブ県) にて逝去した。

⁴⁹ *gSal ba'i sgron me* : f.415b5 はゲシェー・バンケーパ *dGe bshes sbang gad pa* とする。

⁵⁰ *gSal ba'i sgron me* : f.415b1-5.

で衰退せずにあるものは北のラディンとツァンのナルタン sNar thang⁵¹、大菩提の閑寂処 Byang chub chen po'i dben gnas (チャンチェン Byang chen)⁵² などである。

これらは、『カダムレクパム』 *bKa' gdasms glegs bam*⁵³ に詳しく予言されている。また、ラディンはカダムの清浄な水源の地〔であり且つ〕ドムジェ・ギェルウエージュンネー (ドムトンパ) の智慧の^{へんげ}変化から生じたものであって、ナルタンはシャラワの弟子であるトゥムトン・ロドータクパ gTum ston blo gros grags pa (1106-1166)⁵⁴ が建立し、僧院長 (ケンポ) の伝統 mkhan brgyud は金山の連りのように流れが途切れることなく現れた。

他の寺院は時代〔の流れ〕により大部分はなくなり、多くは今、尼僧が守っているようである。カダム派の人たちは女性を非常に避けていたので、空行母の変化身である女性が寺に来たのを厳しく追い出した。その時、〔空行母が〕「今、あなたがたは我々の類 (女性) を避けているが、後、寺院の跡地は女性によって守られるだろう」と呪ったのでその縁起によって〔尼寺が多くなっているの〕である、と勝れた幾人かの方は仰っている⁵⁵。

第2節 カダムの教えに依って他の教えの守持者が生じた有様

第二は、〔以下の通り。〕

カギユ派、サキヤ派、ゲデン派 (ゲルク派) として知られるこれらもジョボジェの [7a] 恩恵によって生じたものが全てであって、〔以下の通りである。〕

1 カギユ派が生じた有様

カギユの開祖であるホダク・マルパ翻訳師 iHo brag mar pa lo tsā (chos kyi blo gros, 1002/1012-1097) は、インドに最後に行かれた時、ジョボジェとお会いして教えをお聞きになった⁵⁶。特に、ニャンメー・ダクポ・ハジェ mNyam med dwags po lha rje (bsod nams rin chen, 1079-1153)⁵⁷ は、最初、ジョボの直弟子であるネエンジョルパチェンポ rNal 'byor pa chen po (byang chub rin chen, 1015-1078)⁵⁸ の弟子、ギャ・ヨンダ rGya yon bdag からカ

⁵¹ 現在のチベット自治区のシガツェ市内にある。トゥムトン・ロドータクパにより建立された。gSal ba'i sgon me : ff.250a6-267a1 には歴代座主の伝記がある。

⁵² ナルトンの第6代座主サンゲーゴムパ Sangs rgyas sgom pa (またはセンゲーキャブ Seng ge skyabs, 1179-1250) によって建立された。Bai dūrya ser po : pp.261-262 参照。Chos 'phel (2008) : p.161 によると、チャンチェンカンリ Byang chen gangs ri ともいい、寺院は現存せずに寺院跡のみ残るようである。

⁵³ 本論Ⅱ : 3節 1.3 を参照。部分訳として Thupten Jinpa (2008) がある。

⁵⁴ gSal ba'i sgron me : ff.250a6-b5.

⁵⁵ 本論Ⅰ : 5-2 を参照。

⁵⁶ マルパはインドに3度、ネパールに4度赴いている。「カギユ派の章」立川 (1987) : p.51 参照。

ダム〔の教え〕をお聞きになった⁵⁹。その後、尊者ミラ Mi la (ミラレパ Mi la las pa, 1052-1135) から大印 Mahāmudrā をお聞きになって、カ〔ギユ〕と〔大〕印〔派〕の2つの大河が合流した教えである『ラムリムタルゲン (道次第解脱莊嚴)』*Lam rim thar rgyan*⁶⁰ を著わされた⁶¹。その弟子のドグン・パクモドゥパ 'Gro mgon phag mo gru pa (rdo rje rgyal po, 1110-1170) は、ゲシェー・トルワ dGe bshes dol ba (shes rab rgya mtsho, 1059-1131)⁶² からカダム〔の教え〕をお聞きになってテンリム bsTan rim の論書も著わされた⁶³。同様に、ディクン・ジクテンゴンポ 'Bri gung 'jig rten mgon po (1143-1217) はランルンパ Glang lung ba (brtson 'grus gzhon nu, 1123-1193)⁶⁴ から、タクルンタンパチェンポ sTag lung thang pa chen po (bkra shis dpal, 1142-1209/1210) はチェーカーワ 'Chad kha ba (ye shes rdo rje, 1101-1175)⁶⁵ から、カルマ・トゥスムケンパ Karma dus gsum mkhyen pa (1110-1193) はシャラワの弟子のネエンジョルパ・シェーラプドルジェ rNal 'byor ba shes rab rdo rje からカダム〔の教え〕をお聞きになった⁶⁶。行の方面の一切の実践はカダムの流儀のようになされたので、それ故、カギユ派の法の真髄である大印と〔ナーローの〕六法 chos drug⁶⁷ の教えを大乘の法にするもの、チャン (大麦の酒) の酵母のような菩提心の諸々の口訣は、カダムの法の伝統から全て生じたのである⁶⁸。

⁵⁷ ガンポパ sGam po pa ともいう。「カギユ派の章」立川 (1987) : pp.6-7, pp.52-53、ツルティム・藤仲 (2007) : pp.51-59 を参照のこと。

⁵⁸ *gSal ba'i sgron me* : ff.107b1-108b2. ネエンジョルパチェンポは、ドムトンパとゴンパワに並ぶアティシャの重要な直弟子の一人である。ドムトンパが亡くなった後、14年間ラディン寺の座主を務めた。

⁵⁹ ギャ・ヨンダについて単独の伝記はないが、ガンポパの伝記を述べる *gSal ba'i sgron me* : ff.278a4-278b3 (和訳はツルティム・藤仲 (2007) : pp.23-36) に、チャユルワ等と並んで名前が見られる。

⁶⁰ 和訳にツルティム・藤仲 (2007) がある。

⁶¹ 「カギユ派の章」立川 (1987) : p.52 を参照のこと。

⁶² *gSal ba'i sgron me* : ff.223b4-227a6. 『ベップム・ゴンポ』の編者として知られる。

⁶³ パクモドゥパ著のテンリム文献は、*Sangs rgyas kyi bstan pa la rim gyis 'jug pa'i tshul*. (Zogyam and Pema Lodoe. Bir, H.P. 1977). Jackson (1996) : pp.223-235 参照。

⁶⁴ *gSal ba'i sgron me* : ff.182b2-184b4. トゥールンに生まれ、バツァブ翻訳師等から沙弥戒を受け、25歳のとき、チャバ・チューキセンゲ Phywa pa chos kyi seng ge (1109-1169) 等を戒師に比丘戒を受けた。チェンガーパ建立のロ寺の第6代目座主。ロ寺の座主を12年、ロ寺とチャユル寺両方の座主を6年務めた。井内 (2010) : 註74 参照。

⁶⁵ *gSal ba'i sgron me* : ff.241b3-245b3. チェーカ 'Chad kha 寺 (メルドコンカル県) を建立した。チェーカーワとその著作については Kapstein (2009) : pp.138-143、チェーカー寺については Chos 'phel (2004) : p.22 を参照のこと。

⁶⁶ ネエンジョルパ・シェーラプドルジェはシャラワの弟子で、*gSal ba'i sgron me* : f.240b4-5 に若干の記述がある。「カギユ派の章」立川 (1987) : p.53 にはトゥスムケンパの師としてシェーラプドルジェの名は見られない。しかし、*gSal ba'i sgron me* : f.240b5 に、「彼 (ネエンジョルパ・シェーラプドルジェ) とシャラワの二人に、カルマパ・トゥスムケンパが会ったようである」とある。

⁶⁷ 「カギユ派の章」立川 (1987) : pp.29-34 を参照のこと。

2 サキヤ派が生じた有様

文殊菩薩サベン Sa paṅ (サキヤ・パンディタ Sa skya paṅḍita kun dga' rgyal mtshan, 1182-1251) もまたネウスルパ sNe'u zur pa (ye shes 'bar, 1042-1118)⁶⁹ の [7b] 弟子であるチオ・ヘーパ sPyi bo lhas pa (byang chub 'od) からカダム [の教え] をお聞きになり⁷⁰、彼 (サキヤ・パンディタ) の著作などにも、大乘の共通な道の実践の全てはカダムの流儀のみをお書きになったので、後のサキヤ派の者たちもそのような方法を行うのである。

3 ゲルク派が生じた有様

勝利者ツォンカパ・チェンボは、真の意味でジョボジェ (アティシャ) と心相続を同じくする者であることは信頼すべき [聖典の] 予言 lung によって明らかであり、一般の [人に見える姿でも (目に見えることでは)、親教師ナムカー・ギェルツェン Nam mkha' rgyal mtshan (1326-1401) とチューキャブサンポ Chos skyabs bzang po (b.14c.) の2人からカダムのラムリムをお聞きになった⁷¹。時代 [を経る] に従って、ジョボの教えについての無理解 ma rtogs、誤った理解 log rtog、疑惑 the tshom (ma rtogs でも log rtogs でもない) の [3つの] 汚れがあるようになった。それらを取り除き、これまでになかった善説の論書である大小のラムリム (『ラムリムチェンモ』と『ラムリムチュンワ (菩提道次第小論)』 *Lam rim chung ba*)⁷² などを著わされた。リボ・ゲデンパ Ri bo dge ldan pa (ゲルク派) の流儀もまたジョボ・カダム派の行いを基礎として置いて、[さらに] 中観の見解と密教を補足したようなものであるので、カダムを超えず、仏教史などにおいてゲデンの流儀は「新カダム派」bKa' gdams gsar pa の名でも呼んでいる。

またそれについても、『カダムレクパム』に予言されている。『[カダム] 父法』 *pha chos* 26章「未来の予言」 *ma 'ongs lung bstan* に、

最後に教えの残り火を

タク [8a] パ grags pa という名の人が燃やすであろう

多くの利益と楽を成就するであろう

⁶⁸ それぞれ、パクモドゥパはパクモドゥ派、ディクン・ジクテンゴンポはディクン派 'Bri gung pa、タクレンタンパはタクレン派 sTag lung pa、トゥスムケンパはカルマ派 Karma pa を始めた。このように、カギユ派の主要な分派の祖はカダム派の師に就いて学んだ。カギユ派の分派については「カギユ派の章」立川 (1987) : pp.4-9, pp.53-66 を参照のこと。

⁶⁹ *gSal ba'i sgron me* : ff.120a5-122a3. ゴンパワの弟子で、ペンユルにネウスル寺 (フンドゥブ県) を建立した。ネウスル寺については、Chos 'phel (2004) : p.193, Roesler (2004) : pp.38-41, pp.83-87 を参照のこと。

⁷⁰ 「サキヤ派の章」立川 (1974) : p.59 を参照のこと。

⁷¹ 「ゲルク派の章」立川・石濱・福田 (2008) : p.26 を参照のこと。

⁷² 全訳として、ツルティム・藤仲 (2005a) がある。

それもまたすばらしい聖地となろう⁷³

とおしゃっている。〔故に〕翻訳師（ゴク・レクペーシェーラプ）が、「この支分の名を根本に立てるならば完全なものとなる。〔それは〕本体より広がっていく支分の流儀である」と仰っている。〔このような〕偈によって、ジェラマ（ツォンカバ・ロプサンタクパ）と本山ガンデン dGa' ldan⁷⁴が予言され、その翻訳師（チューキャプサンボ）がおっしゃったことは、カダム派という本体のようなものよりも新カダム派、ゲデンパというその支分のようなもののほうがより発展する、という意味であると思われるからである。

他にも、スルプバ Zur phu ba は、ジョボの偉大な歴史を文字にして、トゥールンパ sTod lung pa (rin chen snying po, 1032-1116)⁷⁵ からカダム〔の教え〕をお聞きになった。彼の伝統の持律者が多く現れたが、その全てはカダム派〔に従う者〕であった。

4 顕教の典籍が広がった有様

そればかりでなく、諸々の顕教の偉大な典籍の講説の伝統も、ジョボジェの恩恵により生じた。その有様はどのようなかと言えば、〔以下の通りである。〕

このチベットにおいて中観と論理学、弥勒〔五〕法 byams chos（マイトレーヤの五法）⁷⁶を完全〔に自身のものとし〕主となったのはゴク大翻訳師と弟子、及び孫弟子であって、ゴク翻訳師レクペーシェーラプ rNgog lo tsā ba legs pa'i shes rab (b.10c.)⁷⁷ は、ジョボチェンボの直弟子であるばかりでなく、〔アティシャが〕イェルパ・ハリ Yer pa lha ri⁷⁸において、秘密の法である『カダムレクパム』をお与えになった唯一の心の [8b] 弟子であり、その彼にジョボがサンプ gSang phu⁷⁹を建てると予言をした〔その〕通りに〔サンプを〕建てた⁸⁰。その弟子でもあり、甥でもあるロデンシェーラプ Blo ldan shes rab (1059-1109)⁸¹ は、ジョボの諸法を叔父にお聞きになり、テンリムも著わされた⁸²。その〔ロデンシェーラプの〕

⁷³ 「ゲルク派の章」立川・石濱・福田（1995）：p.3に同じ文がある。

⁷⁴ 1409年にツォンカバにより建立された。ラサの「三大寺」の1つ。現在のメルドコンカル県にある。「ゲルク派の章」立川・石濱・福田（2008）：pp.60-63を参照のこと。

⁷⁵ gSal ba'i sgron me：ff.168b3-170b3。トゥールンパは最初、パンディタ・プムタクスンバ Paṇḍita 'bum phrag gsum pa（スムリティジュニャーナキールティと同時期にチベットに来ていた人物）などに学び、その後、セ・チルプバ Se spyil bu pa chos kyi rgyal mtshan（1121-1189）の弟子ケンパタレ Gan pa da re 建立のカル mKha' ru 寺にて学んだ。アティシャとも会い、ネエンジョルパに8年間、ゴンパワに5年間師事し、ネエンジョルパが亡くなった後はチェンガーパにも師事した。72歳の時、1103年にトゥールンにツェンド bTsan gro 寺を建立した。

⁷⁶ 序論：pp.6-7を参照のこと。

⁷⁷ gSal ba'i sgron me：ff.75a2-76a6。ドムトンパ等と共にカムのデンマでセツンのもとで学び、その後、ガリでアティシャに会って師事した。サンプ・ネットクの建立者。

⁷⁸ 本論I：註66を参照のこと。

⁷⁹ 本論I：註92を参照のこと。

弟子に、全ての聖典に精通したトルンパ・ロドージュンネー *Gro lung pa blo gros 'byung gnas* (b.11c.)⁸³、般若に精通したデチェンポ・シェーラプバル *'Bre chen po shes rab 'bar* (b.11c.)⁸⁴、論理学に精通したカンパシェウ *Gang pa she'u* (b.11c.)⁸⁵、中観に精通したキュン・リンチェンタク *Khyung rin chen grags* (b.11c.)⁸⁶、真の座主シャンツェポン *Zhang tshe spong chos kyi bla ma* (b.11c.)⁸⁷ などが現れた。トルンパは、若い時にジョボジェとドムからカダムの法をお聞きになった。〔トルンパは〕ジョボの諸々の小さな著作を主とした『百小部集』 *Chos chung brgya rtsa* (P.5378-5480/D.4465-4566) の意味を決定する註釈 (MHTL 11109) と大小のテンリム2つを著わされた⁸⁸。『テンリムチェンモ』 *bsTan rim chen mo*⁸⁹ は『ラムダウン』の無比なる註釈であるので、勝利者ツォンカバもまたこのレクパム (書) をご覧になった時、種々の供養をもってお迎えになり、『ラムリムチェンモ』も大部分はこれに従って著された。トルンパ、デ〔チェンポ・シェーラプバル〕、カンパ〔シェウ〕、キュン〔リンチェンタク〕、シャン〔ツェポン〕などの弟子の系統において天が地を覆うように順次現れた学者たちが学堂を多く建て、〔その〕講説と聴聞の伝統は現在まで存続するこれ (教義) である。

つまり、[9a] ゴ翻訳師シヨヌベル *'Gos lo gzhon nu dpal* (1392-1481) の『テプ〔テル〕ゴン〔ポ〕』 *Deb sngon* に、

後、チベットに現れた善知識たちや、成就の行を行う瑜伽行者たちの大部分

⁸⁰ アティシャがゴク・レクペーシェーラプに予言をした様子は、*gSal ba'i sgron me* : ff.76a2-4 に以下のようにある。

あるとき、〔ゴク・レクペーシェーラプは〕ジョボの付き添いに行った。〔アティシャが〕サンブを指さして、「あちらの土地は、ホラ貝が右に巻いているようである。レクシェー、お前はそこにツクラカ (堂) を建てよ、講説をせよ、教えに対して広大な利益が生じるだろう」という予言のとおりサンブ・ネットクにツクラカ (堂) を建てた。

⁸¹ *gSal ba'i sgron me* : ff.76a6-77b3. さらに単独の伝記として、トルンパによる *Blo ldan shes rab kyi rnam thar* がある。Kramer (2007) 参照。

⁸² *Blo ldan shes rab kyi rnam thar* にはロデンシェーラプの著作が挙げられているが、その中にテンリム文献が見られないことから、ロデンシェーラプがテンリムを著したかどうかについては問題が残る。伏見 (2003) : p.422 参照。

⁸³ *gSal ba'i sgron me* : ff.77b3-78b1. アティシャやドムトンパ、ポトワ等に学んだ。弟子に、チャパやテンパ翻訳師ツルティム・ジュンネー *sTeng pa lo tsā ba tshul khriims 'byung gnas* (1107-1190) などがいる。

⁸⁴ *gSal ba'i sgron me* : f.78b4-5.

⁸⁵ *gSal ba'i sgron me* に記述はなく、詳細は不明。

⁸⁶ *gSal ba'i sgron me* : ff.78b6-79a3.

⁸⁷ *gSal ba'i sgron me* : f.78b1-2.

⁸⁸ 伏見 (2003) : p.421 によると、*bsTan rim rtsa tshig* という小篇が現存するが、トゥカンが伝えるところの「大小のテンリム」の小さいテンリムであるかどうかは不明である。

⁸⁹ タイトルは *bDe bar gshegs pa'i bstan pa rin po che la 'jug pa'i lam gyi rim pa rnam par bshad pa*. 詳細は Jackson (1996) : pp.230-231 を参照のこと。

の伝記には、各々、カダム派の善知識に師事した〔者〕のみが現れたので、ドム（ドムトンパ）もまた広大にして不断のご功績があるお方である。彼らによってペルデン・マルメゼーイエシェー（アティシャ）が法輪を廻した結果の一端が示されたのである⁹⁰。

とあるように、有雪の国（チベット）において、清浄な法、或いは一切の宗義が生じた全ては、ジョボチェンボがチベットに來られて、法輪を廻した結果であるとするべきである。

第3節 カダムの教えの概説

第三に、「カダムの教えの概説」には、1. 法の種類⁹¹、2. 〔カダム派の修行〕者の行い、の2つがあり、〔以下の通りである。〕

1 法の種類

1.1 カダム派の「典籍」gzhung

1.1.1 カダム派の特徴と『ラムダウン（菩提道灯論）』

第一は、

ドム（ドムトンパ）は、「一切の教えが正方形の仕方により運ばれることを知るのはわたしのラマである」と仰った⁹²。ネエンジョルパチェンボは、「教誡に通達するということは、手のひらほどの小冊子に確信を得ることをいうのではなく、全ての経典を教えとして理解することをいうのである」と仰った。ゴムパリンチェンラマ sGom pa rin chen bla ma (11c.)⁹³ が、「律は密教の助けであり、[9b] 密教は律の助けである。このことを理解できる者でわたしのラマの伝統の者でないものはない（全てわたしのラマの伝統である）。」⁹⁴

⁹⁰ *Deb ther sngon po* : ca. f.38a6-7. この部分には羽田野（1986a）：p.174 の和訳がある。

⁹¹ *chos kyi rnam grangs* は「法門」の意味。

⁹² *Lam rim chen mo* : f.11a5 と一致。bstan pa thams cad gru bzhi lam gyis khyer shes pa 「一切の教えが正方形の仕方により運ばれることを知る」の訳はツルティム・藤仲（2005b）：p.95 に従った。

⁹³ *gSal pa'i sgron me* : f.106b1-5. アティシャに師事し、ラディンにてドムトンパにも師事した。

⁹⁴ *Lam rim chen mo* : ff.12a5-12b1 と一致。全体は *gSal ba'i sgron me* : ff. 3a3-5 と一致。該当箇所にはツルティム・藤仲（2005b）：p.96 の和訳がある。

と仰った通り〔である。〕

一般に、勝者（仏陀）の経典において取捨せず一切を1人の人が正覚する条件と見なすのがカダム派の特徴であるので、カダムに含まれない法はないけれども、一般に知られているのは、「典籍」gzhungと「教誡」gdams ngagの二つ、或いは「口訣」man ngagを加えた3つに分けられる〔ものである〕。

「典籍」gzhungには、見解を主に説いたもの、行を主に説いたもの、〔見解と行の〕2つを合わせて説いたものの3つがある。

第一（見解を主に説いたもの）は、ジョボが著した『入二諦論』*bDen gnyis la 'jug pa* (P.5298, 5380/D.3902, 4467)⁹⁵と『中観の口訣』*dBu ma'i man ngag* (P.5324, 5326, 5381/D.3239, 4468)⁹⁶などである。第二（行を主に説いたもの）は、『行集灯』*sPyod bsdus sgron me* (P.5379/D.4466)と『発心と律の儀軌』*Sems bskyed dang sdom pa'i cho ga* (P.5403/D.4490)などであり、第三（見解と行2つを合わせて説いたもの）は『ラムドゥン』である。

これ（『ラムドゥン』）は勝者の教えである三蔵と四部タントラ及びそれらの註釈から、〔例えば〕「ナ」の文字一文字も省くことなく、1人の修行者の実践の次第に並べて説いた希有なる善説であって、ジェ・ラマ（ツォンカパ）の『ラムリムチェンモ』に、

ジョボが著した典籍は多くあるが、根のように完全なものは『ラムドゥン』であり、顕密両方の要点を集めて説いているので、〔説かれている〕内容が[10a]完全であり、心を調伏する次第を中心に行っているので実践し易い。2つの大いなる車軌の流（中観派と瑜伽行唯識派）に巧みな2人の師（ナーガールジュナ Nāgārjuna, ca.150-250とアサンガ Asaṅga, ca.310-390/395-470）の教えによって飾られているので、他学派より特に優れている⁹⁷。

と説く通りである。

1.1.2 カダム六宗典

「カダム六宗典」*bKa' gdams gzhung drug*として知られるものは、『菩薩地』〔*Byang*〕*sa* (*Bodhisattvabhūmi*, P.5538/D.4037)と『大乘莊嚴經論』〔*mDo sde*〕*rgyan* (*Sūtrālamkāra*, P.5526, 5527/D.4025, 4026)の2つと、『大乘集菩薩学論』*bSlab*〔*btus*〕(*Śikṣāsamuccaya*, P.5335, 5336/D.3939, 3940)と『入菩提行論』*sPyod*〔*'jug*〕(*Bodhisattvacaryāvatāra*, P.5272/

⁹⁵ 江島（1983）の和訳と研究がある。

⁹⁶ 望月（2002）のテキストと和訳がある。

⁹⁷ *Lam rim chen mo* : f.8b1-3. 和訳にツルティム・藤仲（2005b）：p.92がある。

D.3871) の2つ、『菩薩本生鬘論』 *sKyes* [rabs] (*Jātakamālā*, P.5650/D.4150) と『法集要頌經』 [*Ched du brjod pa'i*] *tshoms* (*Udānavarga*, P.992/D.326) の2つで6つであるが、そのうち、『大乘集菩薩學論』と『入菩提行論』の2つは見解と行が合わさっている。他のものは菩薩行を主として説いている典籍である。ジョボの『百小部集』と言われるものもカダムの典籍であり、『中論』 *rTsa shes* (*Mūlamadhyamakakārikā*, P.5224/D.3824) と『空性七十頌』 *sTong nyid bdun cu pa* (*Sūnyatāsaptati*, P.5227/D.3827)、『宝行王正論』 *Rin chen phreng ba* (*Ratnāvalī*, P.5658/D.4158) などともそれ(カダムの典籍)である。

1.2 カダム派の「教誡」 *gdams ngag*

1.2.1 見解を主に説いたもの⁹⁸

「教誡」 *gdams ngag* にも3つあり、見解を主に説いたものは〔以下の通りである。〕ジョボ自身の口訣は、チェンガーパから継承された四諦の教えとプチュンワから継承された縁起の教え、ネエンジョルパから継承された二諦の教えである。四諦と縁起の教えによって〔大乘と小乗に〕共通の人無我を、〔中観の〕二諦の教えによって非常に微細な法無我をご教授なさった。

ジョボの弟子で [10b] 二諦に極めて精通した者はネエンジョルパチェンボであり、彼はトルンパとチェンガーパにお説きになった。チェンガーパもまたトゥールンパとチャユルワの二人に秘法 *lkog chos* としてお説きになった。トゥールンパは秘法と講説法 *tshogs chos* (説法会で説く法) の両方でお説きになって、著作法 *brtsams chos* (著作で説く法) も多くお造りになった。〔トゥールンパの〕弟子のキュンカム *Khyung khams* (b.11c.)⁹⁹ もまた多くお説きになったので、〔二諦の教えが〕広まって盛んになった。サンゲーウォン *Sangs rgyas dbon* もまた、広釈と略釈の教科書を多く著した¹⁰⁰。チエーカーワが著した宗義の論書¹⁰¹ とハルン・ワンチュク *IHa lung dbang phyug* (*byang chub rin chen*, 1158-1232)¹⁰² により著されたその註釈 (MHTL 11177)¹⁰³ は、内外の宗義のさまざまな主張の仕方を示しており、ナーガールジュナの「無住の大中観」 *dbu ma chen mo rab tu mi gnas pa*¹⁰⁴ へ導いており、〔それが〕カダム派の見解〔を述べた〕部分である。

⁹⁸ この箇所 (G : ff.10a4-10b4) は全て *gSal ba'i sgron me* : ff.6b3-7a4 と一致。

⁹⁹ *gSal ba'i sgron me* : ff.170b5-171a4.

¹⁰⁰ 詳細不明。英訳 *Geshé Lhundub Sopa* (2009) にも註は見られない。

¹⁰¹ *Bya 'chad kha ba'i grub mtha' chen mo*. 『カダム文集』 vol.11-7. 既に *Kapstein* (2009) の研究がある。

¹⁰² *gSal ba'i sgron me* : ff. 246b5-247b1. シャーキャシュリーバドラなどに学んだ後、セ・チルプバ建立のチルプ寺の座主を 1190 年から 1232 年まで 43 年間務めた。

¹⁰³ タイトルは *Blo sbyong zin bris rgyas pa*。

¹⁰⁴ ツルティム (2003) : p.225 を参照のこと。

1.2.1.1 カダム派の見解

それ故、ジョボチェンボが帰謬論証派の立場に立つことは『ラムダウン』の本論と註、及び『中観の口訣』の本論と註などによって分かる¹⁰⁵。

ドム（ドムトンパ）もまたジョボに阿闍梨チャンドラキールティ Candrakīrti (ca.600-650) 流の理解を申しあげるとお喜びになって合掌なされた。「すばらしいことに、今、インドの東方ではこの見解のみを護持している」と仰ったという。

ゲシュー・ポトワなど、クムチェースムとして知られるもの [11a] たちのラムリムと説法にはチャンドラキールティ流と大部分一致する中観の見解がある。ゴク翻訳師父子（ゴク・ロデンシェーラプとその弟子）はバーヴィヴェーカ Bhāviveka (ca.490-570) とチャンドラキールティの典籍を典拠として引用することも多くあるようであるが、見解を護持する方法はシャーンタラクシタ Śāntarakṣita (ca.725-788) 父子（シャーンタラクシタとカマラシーラ）と一致するものが大部分である。セルリンパから継承されたいくつものロジヨン（修心）blo sbyong の見解の方法は唯識形象虚偽派の流と一致しているものも見られるようである。〔しかし〕そうであったとしても、大部分の後代のカダム派〔の者たち〕はこれらのインドの典籍の意味を混同せず説くことができる者は稀になった¹⁰⁶。

と、わたし（トゥカン）のラマである一切智者（チャンキャ・ロールパードルジェ ICang skya rol pa'i rdo rje, 1717-1786)¹⁰⁷ は仰っている。

1.2.2 行が主となる教誡

行が主となる「教誡」とは、大乘のロジヨンの諸々の教えである。〔すなわち〕「自分よりも他者を大切にする菩提心」bdag pas gzhan gces pa'i byang chub kyi sems で未だ生じていないものは生じさせ、生じたものは増大させることにより、地道（十地と五道）を進む方法であり、大乘の經典全般と、特に『華嚴經』及び〔その〕註釈であるナーゲールジュナの『宝行王正論』と『夢如意宝珠譚』rMi lam yid bzhin nor bu'i gtam (Svapnacintāmaṇīkathā, P.5469/D. 4555)、『有情知足頌』Sems can mgu ba'i tshigs bcad (Sattvārāghanagāthā, P. 5429/D. 4516)、シャーンティデーヴァ Śāntideva (ca.650-700) の『大乘集菩薩学論』と『入菩

¹⁰⁵ それぞれ *Byang chub lam gyi sgron ma'i dka' 'grel* (P. 5344/D.3948) と *dBu ma'i man ngag ces bya ba'i 'grel pa* (P.5327/D.3931) を指す。

¹⁰⁶ *ICan skya grub mtha'* : pp.201-202 からの引用。

¹⁰⁷ トウカンの師。チャンキャについては「インドの思想と仏教」川崎・吉水（2007）:pp.14-17、p.71 (n.22) を参照のこと。

提行論』の2つなどが教えの典拠である。それらの経典と論書の口訣を [11b] 真髓として集めたものは、ジョボのラマであるダルマラクシタ Dharmarakṣita が著した『ロジョン・ツォンチャ・コロ（修心武器の輪）』*Blo sbyong mtshon cha 'khor lo* (Toh. 7007)¹⁰⁸ と『孔雀により毒を制するもの』*rMa bya dug 'joms*¹⁰⁹、チャムペーネエンジョル Byams pa'i rnal 'byor (Maitrīyogi) の『瑜伽行金剛歌』*Gyer sgom rdo rje'i glu*¹¹⁰、セルリンパの『菩薩の次第』*Sems dpa'i rim pa* と『分別心を除くもの』*rTog ba 'bur 'joms*¹¹¹ など、教誡を文字にしたものである。

1.2.2.1 ロジョン（修心）blo sbyong の伝統

「トンドウンマ」*don bdun ma*（〔修行の〕内容を七義に収めたもの）として示している修心の口訣は、セルリンパがジョボにお説きになった。彼（ジョボ）はゲシェー・トンパに秘法としてお説きになった。彼（ドムトンパ）はクムチェースムに秘法としてお説きになった。クムチェースムの時代に、ラムリムは講説法として説かれたが、ロジョンは秘法としてのみ説かれたようである。ポトワもまたラン（ランリタンパ）とシャル（シャラワ）の2人などに秘法としてお与えになった。そこからランタン（ランリタンパ）が〔瞑想の〕所縁を8項目に著わされたものは『ロジョン・チクゲーマ（修心八句）』*Blo sbyong tshig brygad ma*¹¹²といわれ、それと同じものは講説法としても説かれたようである。

ランリタンパがシャン Zhang とニエン gNyan¹¹³、シャボガンパ Sha bo sgang ba (1067-1131)¹¹⁴ などにお説きになって、それらの教えを混ぜ合わせて文字にしたものを『ベウム・タポ』*Be'u bum khra bo* (MHTL 11111)¹¹⁵ といって、「シャボガンパのロジョン」*Sha bo sgang pa'i blo sbyong* といわれるものもそれと同じものではないかと思う。

1.2.2.2 『ロジョン・トンドウンマ（修心七義）』Blo sbyong don bdun ma¹¹⁶の教示の順序

シャン・シャラワはチャ・チェーカーワに秘法としてお説きになり、他の者にお説きになったという話はないようである。チェーカーワは主に自身だけが [12a1] 実践なされた。

¹⁰⁸ 英訳に Thupten Jinpa (2006) : pp.133-153 がある。

¹⁰⁹ 英訳に Thupten Jinpa (2006) : pp.155-170 がある。

¹¹⁰ 英訳に Thupten Jinpa (2006) : pp.171-175 がある。

¹¹¹ 英訳に Thupten Jinpa (2006) : pp.177-196 がある。

¹¹² ツルティム (2002) の解説があり、英訳に Thupten Jinpa (2006) : pp.275-276 がある。

¹¹³ *gSal ba'i sgron me* : f.229b6 に、ランリタンパの弟子として、ランタンシャン Glang thang zhang とゲシェー・ニエン dGe bshes gnyan という名が見られるので、この2人と推測する。

¹¹⁴ *gSal ba'i sgron me* : f.229b2-3. ランリタンパの弟子の1人。

¹¹⁵ *khra bo* は、「まだら模様」の意味。

¹¹⁶ 偈の訳として、Thupten Jinpa (2006) : pp.83-85 の英訳とゲシェー・ソナム・藤田 (2000) : pp.9-14 の和訳がある。

1人か2人に秘法としてもお説きになったけれども、大きな利益が生じるとお考えになって、デプ'Gre phuで講説法としてもお説きになった。

- (1) 前行として、所依の法を心〔に思い浮かべる〕
- (2) 根本として、菩提心を訓練する
- (3) 悪縁を菩提道に変える
- (4) 〔今生の〕一生の実践をまとめて示す
- (5) 心の訓練〔ができたかどうか〕の規準
- (6) ロジョンの三昧耶
- (7) ロジョンの学処

〔以上の〕7つの項目に分けて根本の偈を著したので『ロジョン・トンドウンマ（修心七義）』といわれるのである。

諸々の菩提道次第（ラムリム）〔についての著作〕とランタンパ（ランリタンパ）の『〔ロジョン・〕チクゲーマ』、シャポガンパのロジョン〔の著作〕などにも、「自と他を交換する菩提心」bdag gzhan brje ba'i byang chub kyi sems¹¹⁷の瞑想の方法が正しく説かれているけれども、『〔ロジョン〕トンドウンマ』には、先のそれら〔の著作〕（『チクゲーマ』、シャポガンパのロジョンなど）には現れない、「与えること gtongと引き受けること len（トンレン）」をルンrlung（息）に乗せるなどの所縁の深い変化（の瞑想の術）があり、教示の次第も他よりも詳しいので、これは特に優れている。

ナルタンパ・サンゲーゴムパ sNar thang pa sangs rgyas sgom pa（1179-1250）¹¹⁸による、チエーカーワのこれらの本偈を順に並べた『チエー〔カーワ〕流ロジョン・ツォクシェーマ』'Chad tshul blo sbyong tshogs bshad ma'¹¹⁹というものがある。尊者ツォンカパ・チェンボも『〔ロジョン・〕トンドウンマ』のこの教えを最高のものであるとご覧になった。〔ツォンカパが〕弟子たちに詳しくお説きになったものをチャンセム・ラ [12b] デインパ Byang sems rwa sgreng pa（shā kya bsod nams）¹²⁰が記録なされたものや、特に、ホルトン・ナムカーペルパ Hor ston nam mkha' dpal ba（1373-1447、ツォンカパの弟子）が『ロジョン・ニメーウーセル（修心陽光）』Blo sbyong nyi ma'i 'od zer¹²¹という極めて甚深なものを著さ

¹¹⁷ 典拠は『入菩提行論』第8章（sPyod 'jug : la. f.32b1）にある。『入菩提行論』第8章にはツルティム・櫻井（2009）のテキストと訳註研究がある。該当部分の和訳はツルティム・櫻井（2009）：p.121参照。

¹¹⁸ gSal ba'i sgron me : ff.251b5-252a1. ナルタン寺6代目座主。チャンチェンの建立者。本論Ⅱ：註52を合わせて参照のこと。

¹¹⁹ 英訳に Thupten Jinpa（2006）：pp.313-417がある。

¹²⁰ gSal ba'i sgron me : ff.377a6-b6. 初め、サンブに学び、後にツォンカパに師事した。

¹²¹ 「ゲルク派の章」立川・福田・石濱（1995）：pp.38-39もこれに言及している。ゲシェー・ソナム・藤田（2000）は、『ロジョン・トンドウンマ』について、このホルトン・ナムカーペルパの註釈を用いて解説したものである。

れたようである。

1.2.2.3 『メンガク・トゥンゲーマ (口訣八頌)』 Man ngag thun brgyad ma¹²² と菩提心の修習

ゲシェー・トンパ (ドムトンパ) の『メンガク・トゥンゲーマ (口訣八頌)』は、カムパルンパが強調して説いているので「カムパルンパのロジョン・トゥンゲーマ」と言われる。トゥンゲー thun brgyad (八分) とは、

- (1) 食べ物に依るロジョン
- (2) 呼吸に依る〔ロジョン〕
- (3) 身体をガンジス川の砂のように変化させる〔ロジョン〕
- (4) 肉と血に依る〔ロジョン〕
- (5) 施食に依る〔ロジョン〕
- (6) 四大 (土・水・火・風) に依る〔ロジョン〕
- (7) 身体を如意宝へと変化して修心する
- (8) 臨死の口訣

であり、〔瞑想の〕所縁を八分にまとめて説いたものである。

カラゴムチュンパ・ワンチュクロドー Kha rag sgom chung ba dbang phyug blo gros (b.11c.)¹²³ は、「カラコルスム」 Kha rag skor gsum という法をお説きになった。その教えは、アロ A ro からバゴム sBa sgom に伝わった〔ゾクチェンの〕心部 sems phyogs¹²⁴ の教えと¹²⁵、ジョボの教えをネエンジョルパとゴンパワ dGon pa ba (dbang phyug rgyal mtshan, 1016-1082)¹²⁶ にお聞きになったロジョンの教えの2つの河を1つにして、「菩提心の修習」とお名前を差し上げて『アンイク・ダウンチュパ』 Ang yig bdun cu ba¹²⁷ というラムリムの口訣を偈に編纂してお造りになった。

他にもまた、ゲシェー・トンパが継承した『縁起心頌』 rTen 'brel snying po (P.5467/D.4553) の教示もまた [13a] 大悲の瞑想法を特に説いたものであるので行の教誡であり、ジョボの典籍に基づいてシャン・シャラワが著した『発心と律の儀軌』 Sems bskyed dang

¹²² 和訳にゲシェー・ソナム・西村 (2003) がある。

¹²³ gSal ba'i sgron me : ff. 118a1-120a1.

¹²⁴ 「ニンマ派の章」平松 (1982) : 註2 (p.133) を参照のこと。

¹²⁵ gSal ba'i sgron me : f. 118a2-3 に、「[カラゴムチュンパは] ポトワの父の供養処であるバゴムにアロから伝わった教えを受けた」とある。ポトワの伝記中 (gSal ba'i sgron me : f.216a5-6) にもポトワの父のラマ bla mchod として名前が現れる。アロについて詳細は不明。

¹²⁶ gSal ba'i sgron me : ff.109b6-114a4. アティシャの弟子の1人。

¹²⁷ 全て ang 「どうぞ～してください」で終わる 70 偈。テキストは、Cha ris skal bzang thogs med (2002) : pp.162-171 に所収される。

sdom pa'i cho ga などともそれ（行の教誡）である。

1.2.3 見解と行を合わせて説いた教誡の王（『ラムダウン（菩提道灯論）』）

見解と行を合わせて説いた教誡の王は、「三士の道次第」 *skyes bu gsum gyi lam gyi rim pa* といわれるものであり、〔その〕典籍は『ラムダウン』である。先述した行（『行集灯』や『発心と律の儀軌』など）や見解（『入二諦論』や『中観の口訣』など）の典籍と、それら各々の口訣もラムリムの1つであるので道次第の中にその全てが含まれるのである。ラムリムは、ジョボジェに「広大行派の系統」 *rgya chen spyod brgyud* と「甚深観派の系統」 *zab mo lta brgyud* の2つ¹²⁸の口訣があり、1つの道に集めて実践する方法の全て〔を説いた〕教誡であるので、「見解と行を合わせた教え」と名付けられたのである。

1.2.3.1 ラムリム（道次第） *lam rim* の継承¹²⁹

そのようなラムリムの教えはジョボがドム〔トンパ〕に秘法としてお説きになって、

「わたしはお前以外に他に与えるところがない」と仰って、この口訣をゲシェー・トンパに与えた。〔アティシャは〕彼（ドムトンパ）を教えの主として加持したので、ドム（ドムトンパ）のご功績が盛んになった。このこともそれ（アティシャの加持）によるものである¹³⁰。

と説かれている〔如くである。〕

他にも〔ラムリムの教えを〕ナクツォにお与えになったのでその弟子のラクソルパ *Lag sor ba* から継承された道次第の [13b] 文献もある¹³¹。ゲシェー・サンパ（ゴク・レクペーシェーラブ）にお与えになったものは、「トゥクセーティンレーパ（心の弟子であり恩恵の有る者）、すなわちトルンパが著した、大小のテンリム（『テンリムチェンモ』と『テンリムチュンワ』）である。

¹²⁸ 「広大行派の系統」とは瑜伽行唯識派を指し、「甚深観派の系統」とは中観派を指す。詳しくは「インドの思想と仏教」川崎・吉水（2007）：註1（p.68）を参照のこと。

¹²⁹ ラムリムとテンリムの違いについては Jackson（1996）と伏見（2003）による研究がある。また、*gSal ba'i sgron me* : f.4a1-3 はその違いについて以下のようにいう。

ある勝れた人が、大衆に説いたものを「教え *bstan pa* の次第（テンリム）」、秘密の法として説いたものを「道次第（ラムリム）」とおっしゃった。何人かの善知識は、「教科書 *'khrid yig* として著したものはラムリム、その根拠の法 *rgyab chos* として著したものはテンリムという」とおっしゃったけれども、この教えの方法によって、よく説かれた一切の経典を口訣として指導するならば、口訣とその根拠の法、と別々にすることは不合理である、とわかるのである。

¹³⁰ *Geshé Lhundup Sopa*（2009）：n.388 は典拠不明とするが、この部分は *gSal ba'i sgron me* : f.8b5-6 と一致する。

¹³¹ ラクソルパはナクツォ翻訳師の弟子で、*gSal ba'i sgron me* : ff.336a4-337b5 に、ナクツォからラクソルパにアティシャの口訣が伝わり広がったことが記されている。

ジョボ父子（アティシャとドムトンパ）からゲシェー・ゴンパワ、そしてネウスルパなどに順に継承され、ドム・リンポチェ（ドムトンパ）からゲシェー・チェンガーパ、そしてチャユルワなどに継承されたものは「カダム・ダムガク派 bKa' gdams gdams ngag pa から継承されたもの」といわれ、ドム・リンポチェからゲシェー・ポトワ、そしてシャラワなどに継承されたものは「カダム・シュン派」bKa' gdams gzhung pa と名付けられた。2つ（シュン派とダムガク派）とも内容においては等しいが、典籍の講説の議論を詳しくする（シュン派）か、しないか（ダムガク派）という点において別々に数えるだけである¹³²。

「〔解脱〕道を導く方法において同じでないものは多いが根本は一つである」と説いており、ジェ・ラマ（ツォンカパ）は、『ベウブム・ゴンポ』 *Be'u bum sngon po* の

一切の口訣が集められた最初は
優れた善知識を捨てないことである¹³³

という言葉を典拠になさって、善知識に師事する方法から指導なされた¹³⁴。

カダム派〔の祖師〕たちが著したラムリムの典籍は多くあるようだけれども、有名なものは、『ベウブム・ゴンポ』と『ペチュー』 *dPe chos* の2つである。前者（『ベウブム・ゴンポ』）は、ゲシェー・ポトワの説法をトルワ・シェーラプギャムツォが編纂したものにハデイガンパ lHa 'bri sngang pa (12c.)¹³⁵ が註釈をなされたもので¹³⁶、ジェ（ツォンカパ）は、「善知識であるならば、『ベウブム・ゴンポ』を見るべきである」と賞賛なされて、『菩提道次第』（ラムリムチェンモ）に典拠としても多く引用したようである¹³⁷。〔後者の〕『ペチュー』には3つあり、初めにタブパ Grab pa（ポタンディンパ・シヨンヌ・ウー Pho brang sdings pa gzhon nu 'od, b.11c.）¹³⁸ が編纂したものが略本、ダクカルパ Brag dkar ba (1032-1111)¹³⁹ がそれを基になさって彼自身が善知識にお聞きになった喩えも多く加えて

¹³² 本論 I : 5-2 を参照のこと。

¹³³ *Be'u bum sngon po* : p.1. この部分にはツルティム・三宅 (2003) : p.192 の和訳がある。

¹³⁴ ツルティム・藤仲 (2005b) : p.108 を参照のこと。

¹³⁵ *gSal ba'i sgron me* : ff.227a6-227b3.

¹³⁶ 活字本（民族出版社、北京）と木版本（Toh. 6970）がある。

¹³⁷ 『ベウブム・ゴンポ』はツォンカパ以外のゲルク派祖師たちの著作でも多く引用され、*gSal ba'i sgron me* : ff.11a1-2 によれば、他に、チム・ナムカータク mChims nam mkha' grags (1210-1267/1285) の「ラムチョク」 *Lam mchog (Khrid yig lam mchog rin po che)* やリンチェン・ガンパ Rin chen sngang pa (1245-1302) のラムリム (MHTL 11129)、ラクソルパのテンリム、モンタワ Mon gwa pa tshul khriims bkra shis (b.13c.) のラムリム (MHTL 11119) にも引用されたという。

¹³⁸ *gSal ba'i sgron me* : ff.222b2-223a5. ポトワの弟子の1人。 *dPe chos rin chen spungs pa'i gsal byed* : pp.357-358 によれば、タブパとはポタンディンパの出身地の名前である。

¹³⁹ *gSal ba'i sgron me* : ff.223a5-223b4 に若干の記述がある。主に『ペチュー』の編纂者として知られるが、詳細は不明。

編纂したものが広本、チェゴムゾンパ lCe sgom rdzong pa (shes rab rdo rje, ca. 1140/50-1220)¹⁴⁰ が先の2つに基づいて理解しやすい中本を著して、それを『ペチュー・リンチェンブンワ』 *dPe chos rin chen spungs pa* (Toh.6964) という。

1.3 カダム派の「口訣」 man ngag

1.3.1 『カダム父法』 *bKa' gdams pha chos* と 『カダム子法』 *bKa' gdams bu chos*

先に「典籍」、「教誡」、または「口訣」の3つに分けた「口訣」については、一般に「教誡」と「口訣」は矛盾しないが、3つに分けた「口訣」とは、ジョボ父子の秘密の法である『カダムレクパム』¹⁴¹として知られるものである。その口訣とは、ジョボチェンボが「イエルパ・ハリニンボ Yer pa lha ri snying po の歌」として「ク・ゴク・ドム・スム」 *khu rngog 'brom gsum*¹⁴²にお与えになったものであり、父 *pha* であるトンパ・リンポチェ（ドムトンパ）がお伺いになったものを「父法」 *pha chos*、子 *bu* であるゴク・レクペーシェーラブとクトウン・ツォンドゥー・ユンドウン *Khu ston brtson 'grus g-yung drung* (1011-1075) の2人がお伺いになったものを「子法」 *bu chos* という¹⁴³。

クトウンは最初、トンパ・リンポチェ（ドムトンパ）に対して不敬の様子を示した [14b] が、このとき、クチェンボ（クトウン）が傲慢の山を崩し、トンパ・リンポチェの御足に〔頭を〕付けた（礼拝した）。〔これは〕『レクパム』（カダム子法）の「ク（クトウン）と清浄なヴィジョンに関する章」 *khu dang dag snang 'brel ba'i tshoms* に出ている¹⁴⁴。

1.3.2 秘法『カダムレクパム』 *bKa' gdams glegs bam* の伝統¹⁴⁵

この諸々の口訣は、ジョボが入滅の時、ゲシェー・トンパに「主に化身のクムチェース

¹⁴⁰ チェゴムゾンパ、またはチェゴムパ lCe sgom pa ともいう。チェゴムパの生没年は Sørensen (1999) に従った。単独の伝記は存在しないが、『ペチュー』の註釈である *dPe chos rin chen spungs pa'i gsal byed* : pp.358-359 と *dPe chos brda bkrol don* : p.518 に僅かな記述があり、それによると、チェゴムパはツァンのタナダ rTa nag mda' に生まれ、ダクカルパ（ポトワの弟子）の弟子のチャンチュブ・ナンワ Byang chub snang ba に学んだことがわかる。

¹⁴¹ 本論 I : 註 10 を参照のこと。『カダムレクパム』については、羽田野 (1986d) : p.280-283 をはじめ後世の偽作である可能性も指摘されており、ツルティム (1997) : p.47 も「筆者はツォンカパの三父子の著作の中で『カダムレクパム』に言及されたのをまだ見たことがない」とある。

¹⁴² ク（クトウン）、ゴク（レクペーシェーラブ）、ドム（ドムトンパ）の3人を指す。

¹⁴³ 同様に、*gSal ba'i sgron me* : f.14a3-5 は以下のようにいう。

では、「父法」と「子法」の違いは何であるかと考えるならば、ジョボがお説きになったものを「父法」、ドム（ドムトンパ）がお説きになったものを「子法」と示すのではない。〔なぜなら〕「子法」の22章はジョボ自身がお説きになったものであるからである。それ故、この「父法」の「父」はトンパ・リンポチェ（ドムトンパ）というゲシェー・トンパ自身をいって、「子」はゴクとクをいうので、父が伺ったものを「父法」、子が伺ったものを「子法」という、伺った者の点から名前を付けたようであり、両方のお説きになった人は主にジョボ自身である〔からである〕。

¹⁴⁴ *bKa' gdams bu chos* : pp.613-701.

ムに3つ、「典籍」〔と「教誡」〕、「口訣」を与えよ」という遺言があったその口訣であって¹⁴⁶、クムチェースムのプチュンワに完全なもの、他の2人、〔ポトワに〕大部分と、〔チェンガーパに〕わずかにあったものであり、親教師ナムリン Nam rin (ナムカー・リンチェン Nam mkha' rin chen, ca.1214-1286)¹⁴⁷ は、

完全なもの〔を有したの〕はシヨンヌギェルツェン (プチュンワ) である
大半を有したのはツルティムバル (チェンガーパ) である
わずかなものを明らかにしたのはリンチェンセル (ポトワ) である
現在では、わたし (ナムカー・リンチェン) だけになってしまった¹⁴⁸

と仰った。

プチュンワにどのように伝わったかについては、ゴク・レクシェー (レクパーシェーラプ) がガリパ・シェーラプギェルツェン mNga' ris pa shes rab rgyal mtshan¹⁴⁹ [に、そして] 彼 (ガリパ) がプチュンワ・シヨンヌギェツェンに与えたのである。そして、次第に、ドム・クマーラマティ 'Brom ku mā ra ma ti¹⁵⁰ まで至った。彼 (ドム・クマーラマティ) まで単独の伝統であったが、彼自身が封印を解いて2つに増やした。それから次第に、伝統が翻訳師トゥージェベルワ Thugs rje dpal ba (b. 14c.) から勝利者ゲンドゥンドゥップ dGe 'dun grub (ダライラマ1世, 1391-1474) [に至り、彼] がお聞きになったものからウー・[15a] ツァンの全てに広く盛んになったのである。

1.3.3 「五随念」 rjes dran lnga と「四尊三蔵」 lha chos bdun ldan

この (口訣の) 実践は、「五随念」 rje dran lnga であり、

依り処であるラマを念じよ
身体は神の自性とせよ
言葉は念呪を常にせよ
有情を残らず父母として思慮せよ
心の本質は空と伺察せよ

¹⁴⁵ 『カダムレクパム』は、ゲシェー・タブカワ dGe bshes stabs ka ba dar ma grags (1103-1174) 建立のタブカワ sTabs ka ba 寺とナルタン寺に伝承された。羽田野 (1986d) : pp.291-294 参照。

¹⁴⁶ gSal ba'i sgron me : ff.11a6-11b1 と一致。

¹⁴⁷ gSal ba'i sgron me : ff.283a2-286b3. ナムカー・リンチェンは『カダムレクパム』の第7代相承者となる。羽田野 (1986d) : pp.293-294 参照。

¹⁴⁸ gSal ba'i sgron me : f.270a1-2 と一致。

¹⁴⁹ 詳細不明。gSal ba'i sgron me に記述は見られない。

¹⁵⁰ gSal ba'i sgron me : ff.286b3-288a6. ナムカー・リンチェンの弟子で、『カダムレクパム』の第8代相承者。羽田野 (1986d) : p.293 参照。

その5つを權として
一切の善根を清浄に行え¹⁵¹

とある。

核となるものは、「16のティクレ（滴）」*thig le bcu drug* の実践であり、実践の「結果として得られる」特性は律から金剛乗までを一座において実践することができ、高い見解と精密な行が生じる、と説かれている¹⁵²。尊格とは4つであり、釈迦、観音菩薩、ターラー、不動明王である。法とは三蔵であり、それらを「四尊三蔵（尊格と法の7つを備えたもの）」*lha chos bdun ldan* という¹⁵³。

1.4 カダム派の密教の口訣

カダム派に密教の教えがないのかと考えるならば、述べたばかりである「16のティクレ」の口訣も顕教と密教が一体となったものであり、他にも釈迦の三昧耶戒、不動明王に関するもの、聖観音菩薩に依る断食修行などがカダム派において広く盛んになった。ジョボのたくさんの小さな口訣をチム *mChims* が1つに [15b] 集めたものである『ナルタンギャツァ』*sNar thang brgya rtsa* といわれるものと¹⁵⁴、ジョボがゲシェー・ラクソルパ *Lag sor ba* にお与えになった観音菩薩の教え、他にも四天の教示など、多くのカダム派の密教の伝統が今に至るまでである。

ジョボがチベットにお越しになる以前、密教を騙った粗悪な法が広く流行していたのを沈めるために、ジョボジェはドーハー *Dohā*¹⁵⁵ をお説きになることを望まれた。しかし、ドムが、「チベットでこれ〔を説くこと〕は適切ではない」と阻止したその有様など¹⁵⁶、カダム派の祖師たちは、密教一般と特に、無上〔瑜伽〕において非常に厳しくなさったけ

¹⁵¹ Geshé Lhundub Sopa (2009) : n.393 を参照のこと。

¹⁵² 「16のティクレ」については Ehrhard (2002) を参照のこと。

¹⁵³ 「四尊三蔵」とは、『カダムレクパム』に説かれるカダム派の教えの重要な構成要素である（該当部分は Thupten Jinpa (2008) : pp.80-109）。四尊とは、アティシャが奉じる六尊から、無上瑜伽母タントラの二尊、チャクラサンヴァラ *Cakrasamvara* とヘーヴァジュラ *Hevajra* を除いたものである。羽田野 (1986d) : pp.291-292 参照。

¹⁵⁴ 『ナルタンギャツァ』は現存しない。また「カダム派の章」ではチムとしか書かれていないが、チムの名で呼ばれるのは、チム・ナムカータクとチム・ジャンパーヤン *mCims 'Jam pa'i dbyangs* (b.13c.) の2人がいる。英訳の Geshé Lhundub Sopa (2009) : p.113 はジャンパーヤンとする。この2人を同一人物とする説 (*Dung dkar blo bzang 'phrin las* (2002) : p.858) もある。またチム・ナムカータクについては伏見 (2010) の研究がある。

¹⁵⁵ ドーハーとは、塚本他 (1989) : p.365 によれば、後期インド密教の神秘主義的な教義を俗語による歌謡形式を用いて説き示したもので、8-12世紀にかけてベンガル地方を中心に流行していたものをいう。「カギユ派の章」立川 (1987) : 註30 (p.103) も合わせて参照のこと。

¹⁵⁶ アティシャがドーハーを説こうとしてドムトンパに阻止された様子は、*gSal pa'i sgron me* のドムトンパの伝記に見られる。山口 (1982) : pp.70-71、井内 (2000) pp.132-133 参照。

れども、実際は、ジョボジェがドム・リンポチェに四部タントラの一切の口訣と、特に父タントラの『秘密集会タントラ』 *gSang ba 'dus pa* (*Guhyasamāja*, P.81/D.443)、母タントラの『勝樂タントラ』 *'Khor lo bde mchog* (*Cakrasaṃvara*, P.16/D.368)、一般の無上〔瑜伽〕の究極の口訣である「成就の真髓」 *Grub pa'i snying po* についての諸々の口訣を秘密の方法で完全にお与えになったので、ドムジェ（ドムトンパ）は完全な顕密の教えの主となった。その理由によって、密教を公になさらなかったこと以外はカダム派に密教の教えがない訳ではないのであり、各伝記を詳しく見ればわかることである¹⁵⁷。

そればかりでなく、教えの中心として [16a] 『ラムドゥン』の実践〔の中〕にも、密教の存在があるべきであり、それ（密教）がなければ、完全な教えの実践とはならないのであって、『ラムドゥン』自身の言葉にも、〔そのように〕実際にあるのと¹⁵⁸、『ラムリムチェンモ』にも『ラムドゥン』の特徴について、「顕密両方の要点を集めて説いているので語るべきことを完全に伴っている」と説いているので¹⁵⁹、知ること〔ができる〕と思われるからである。

2 カダム派の修行者の行い

第二に、相次いで現れたカダム〔派〕の修行者たちの行いの概略については、『〔カダム〕明灯〔史〕』が、

完全な者とは〔以下の如くである。〕ゲシェー・トンパからよく継承され、人の伝統が良く、堅固である。平等で、寛大なことから、他の学説や行いと調和しないことはないが、混じりあわない。いかなる有情にも染まることは少なく、一切に利益する心が大きい。下〔から〕登る〔ように〕学ぶので、見解が高くなる。苦しいときに苦しみ声を挙げず、楽しいときこそ怨離の心は激しい。一切のロジョンは実際に現れているものは少ないが、〔実際の〕範囲は大きい。貧しく暮らし、良い環境にあっても〔心が〕揺れ動かない。理解明折で、〔その〕深さは測り知れない。親しみや易いが、目は誰によっても [16b] 満たされない。尊敬されても軽い、重い。〔華美な〕詞の言葉は少ないが、法の言葉に依っている。問答と説法は少なく、意味が確定している。論争と批判は少なく、意味を伝えるのに巧みである。全ての学説を混同せずに矛盾なく示し、口訣の拠り所を三蔵として、口訣を四威儀であると考える。法や人を非難することなく、悪友に従うこともない。学問と口訣の

¹⁵⁷ アティシャが説いた無上瑜伽タントラについては羽田野（1986e）を参照のこと。他に、アティシャの密教に対する態度については山口（1982）：pp.74-80にも詳しい。

¹⁵⁸ *Lam sgron* : 61-67 偈. 和訳にツルティム・藤仲（2007）：pp.403-404がある。

¹⁵⁹ 本論Ⅱ：第3節 1.1.1を参照のこと。

多くの種類を繰り返さず、一切の所知について完全に学ぶ。土地と寺に対して偏見をせず、信仰を持つことを好む。ラマ（師）は仏と考え、友（同門の弟子）は清浄な現れであると見なす。禁止や約束は多いが、欲は少ない。常に吟味して後で見解を持つ。謙虚にして一切の教えの主となる。世間の悪い行いを捨て、三蔵を完全に学んだ偉大なる人物、上述の全ての者たち〔がそう〕である。それらの行いを持つ者を「ジョボ・カダム派」*Jo bo bka' gdams pa*ともいう。「四尊三蔵」ともいう。「大聖人の教えの伝統」*drang srong chen po'i bka' brgyud*ともいって、そのような行いの後に従って心より [17a] 敬意を表わすべきである¹⁶⁰。

と説いたこれらに対して細かく考えるならば、それぞれについても大きな意味がそれぞれあるのである。

ポトワ父子（ポトワとシャラワ）のご功績をまとめたものである伝記『美しき蓮華より生じたもの』*rNam thar mdzes pa'i padma las 'byung ba*¹⁶¹もまた、カダム派の共通する功績であり、非常にすばらしいものであるが、ここでは多くなるので書かず、『〔カダム〕明灯〔史〕』などから知って信心を修習し、請願の拠り所とすべきである。

結頌

自利に作意する戲論がない地で
慚愧のベナレスの服をまとい
不放逸の雌鹿の皮の上で
堅固な正念と正知の〔心で〕半跏を組み
頭頂には三宝の鬘を結び
身体には四尊の白い梵繩を持ち
口から三蔵の呪文を発する
心の浄瓶は三学の甘露で満たす
世俗の菩提心のかまどで
勝義の菩提心の火を燃やし
自身を慈しむ執着という護摩木と
有身見の溶かしバターを燃やすという供物の布施に努め
内も外も清浄な蓮華の花弁のようであるカダムの聖人たちの行い

¹⁶⁰ *gSal pa'i sgron me* : ff.414a5-414b6 と一致。

¹⁶¹ ポトワの単独の伝記は、『デブン寺所蔵古籍目録』no. 017302 と no.017366 の *sTag lung zhabs drung ngag dbang nam rgyal* (1571-1626) 著 *dGe ba'i bshes gnyen pu to ba rin chen gsal gyi rnam thar sems pa chen po'i nges bstan* が確認できるが、トゥカンが挙げるポトワの伝記との関係は不明。

聞くことによって心を奪われるこれを述べる
わたしの舌 [17b] も幸運であると思う
一切の宗義に対して寛容で
執着と怒り、議論からよく離れ
頂上の飾りとして持たれるもの
その生じたこと（歴史）の簡略を述べた

『一切宗義の起源と綱要を示す善説水晶鏡』より、「カダム派の宗義が生じた有様」を述べ終わった。

Ⅲ チベット語原典対照校訂テキスト

『一切宗義』 「カダム派の章」

Comparative Edition of *Grub mtha' shel gyi me long* of
Thu'u bkwan blo bzang chos kyi nyi ma

bKa' gdams pa

凡例及び注意事項（本巻における略号他）

[G] = (従前の一部の巻にて使用の略号では) TGS-G

東大所蔵本（ゴンルン寺版）； *Grub mtha' thams cad kyi khungs dang 'dod tshul ston pa legs bshad shel gyi me long*, dGong klung ed., Tokyo Univ., No.107. フォリオ番号は [0a1]～[17b3]。

[Z] = (従前の一部の巻にて使用の略号では) TGS-Z または T

シヨル Zhol 版、ガワン・ゲレク刊行本； *Thu'u bkwan grub mtha', Zhol ed. In Collected Works of Thu'u bkwan blo bzang chos kyi nyi ma (CWT)*, edited and reprinted by Ngawang Gelek Demo, Geden Sungrab minyam Series 2 (Delhi, 1969), (IASWR. No. R-1224). フォリオ番号は [92.1]～[119.4]。

[D] = (従前の一部の巻にて使用の略号では) TGS-D

ウルガ・デルゲ版； *Thu'u bkwan grub mtha', sDe dge ed.* (甘肅民族出版社 1984). ページ番号は [82]～[107]。

[*105]～[*134]

テンパギエルツェン師（前東洋文庫研究協力員）が [D]（ウルガ・デルゲ版、甘肅民族出版社刊行本）にもとづいて、付した章節（科段）通し番号。但し、本書で採用した章節・科段番号と異なる。

[*105] བཀའ་གདམས་པའི་གྲུབ་མཐའ་བྱུང་ཚུལ་མདོ་ཙམ་ཞིག་བཤད་པ།

[G0a1] [Z91.1] ལྟུང་། །གྲུབ་མཐའ་ཐམས་ཅད་ཀྱི་ལུངས་དང་འདོད་ཚུལ་སྟོན་པ་ལེགས་བཤད་ཤེལ་གྱི་མེ་ལོང་ལས།
བཀའ་གདམས་པའི་གྲུབ་མཐའ་བྱུང་ཚུལ་བཞུགས་སོ། ། [1a1] [92.1]º

སེམས་མཚོག་ཡིད་བཞེན་རྟོག་སྤྱིང་པོ་ཅན། །
དཔག་ཡས་རྒྱལ་སྤྱོད་པའི་རྒྱ་མཚོ་ཆེ། །
མཁས་གྲུབ་གདེངས་ [1a2] ཅན་སྟོང་གིས་ཅེན་པ་ལ། །
བཀའ་གདམས་པར་ [92.2] གྲགས་གྲུབ་མཐའི་བྱུང་བ་གྲེང་། །

གཉིས་པ་འབཀའ་གདམས་པའི་གྲུབ་མཐའ་བྱུང་ཚུལ་ [1a3] མདོ་ཙམ་བཤད་པ་ལ་གསུམ། ཇོ་བོ་ཆེན་པོའི་བཀའ་དྲིན་ལས་
བཀའ་གདམས་ཀྱི་ལྷགས་སོལ་བྱུང་ [92.3] ཚུལ། དེ་ལ་བརྟེན་ནས་བསྟན་པ་དང་བསྟན་ [1a4] འཛིན་གཞན་བྱུང་ཚུལ། བཀའ་གདམས་
ཀྱི་བསྟན་པའི་སྤྱི་བབ་བཤད་པའོ། །

[*106] ཇོ་བོའི་བཀའ་དྲིན་ལས་བཀའ་གདམས་ཀྱི་ལྷགས་སོལ་བྱུང་ཚུལ།º

དང་པོ་ནི།º དེ་ཡང་སྐྱ་མ་གོང་མ་ནས་བཀའ་གདམས་ [2a1] པ་ཞེས་པའི་ [92.4] ལྷ་བཤད་ལ་མི་འདྲ་བ་འགའ་གསུངས་
ཀྱང་། ཇི་རིན་པོ་ཆེས་སྤྱན་རླུང་ཆེན་འཕེལ་ལ་བཀའ་གདམས་ཞེས་བྱ་བའི་དོན་དེ་ཅི་ཡིན་ [2a2] ཞེས་གསུངས་པས། སྤྱན་རླུང་ རྒྱལ་
བའི་བཀའ་ལས་ [93.1] ཡི་གེ་ལ་གཅིག་ཀྱང་བཞག་ཏུ་མེད་པར་འགྲུབ་པས་ [D82] ངག་ཏུ་གོ་བ་ལ་ཟེར་བ་ཡིན་ཞུས་པས། [2a3] དེ་
ཡིན་དེ་ཡིན་ཞེས་མཉམ་པ་འཆོལ་བ་མཇུག་ཚེས་གྲར་ལེབས་ནས་དགོ། [93.2] བའི་བཤེས་གཉེན་རིན་ཆེན་འཕེལ་གྱིས་ཁོ་བོ་ལ་དམ་པའི་
ཆོས་ [2a4] ཀྱི་སྤྱོད་ཆེན་པོ་ལྟེར་བྱུང་། ཁོང་དེ་སྐད་ཟེར་ཏེ། དེ་གི་ཏུ་ཡིན་པ་འདུག་ཅེས་གསུངས། དེས་ན་སངས་རྒྱུས་ཀྱི་བཀའ་ [2b1]
ལྷོ་སྟོང་གསུམ་ [93.3] ཀྱི་དོན་ཐམས་ཅད་མ་ལུས་པ། ཨ་ཏི་ཤའི་གདམས་པ་སྤྱོད་བྱ་གསུམ་གྱི་ལམ་རིམ་ཏུ་བསྟན་ནས་ཉམས་སྲུ་ལེན་པས་ན་
བཀའ་གདམས་པ་ཞེས་བྱ་སྟེ། འབྲོམ་གྱི་ཞལ་ནས།

ངོ་མཚར་བཀའ་ [2b2] [93.4] ནི་སྤྱོད་གསུམ་ཡིན་ཏེ། །
གདམས་པ་སྤྱོད་བྱ་གསུམ་གྱིས་མཛོས་པ་ཡི། །
བཀའ་གདམས་རིན་ཆེན་གསེར་གྱི་སྤེང་བ་ལ། །
འགོ་བ་གང་གིས་བགྲངས་ཀྱང་དོན་ཡོད་འགྲུར། །

ཞེས་སོགས་ [94.1] གསུངས་པ་ [2b3] ལྟར་རོ། །

1 [ZGD omit] བཀའ་...པ།
2 [D omit] ལྟུང་། །གྲུབ་མཐའ་...བཞུགས་སོ།།
3 [D insert] ༢ བཀའ་གདམས་པ།
4 [D omit] གཉིས་པ་
5 [D insert] ཞིག་
6 [ZG omit] དང་
7 [D insert] ༡
8 [ZG omit] ཇོ་...ཚུལ།
9 [D omit] དང་པོ་ནི།
10 [G] བར་
11 [ZG omit] པ་, [ZG insert] ལྷངས་
12 [ZG] གར་

བཀའ་གངས་ཀྱི་ལྷགས་སོལ་ཁྱད་པར་ཅན་དེ་ཇི་ལྟར་བྱང་བའི་རྒྱལ་ནི། ཇོ་བོ་རྗེ་དཔལ་ལྷན་ཨ་ཏི་ག་ནས་དབུ་བརྟེས། ལྷན་པ་
རིན་པོ་ཚེས་སོལ་ཕྱེ། ལྷ་མཚེད་གསུམ་གྱིས་དར་ལིང་རྒྱས་ [2b4] པར་ [94.2] མཛད། སྐང་ཤར་གཉིས་དང་བྱུལ་པ་སོགས་ཀྱིས་དེ་ལས་
ཀྱང་རྒྱས་པར་མཛད་པའོ། །

[*107] ཇོ་བོ་རྗེ་འི་རྣམ་ཐར་མདོ་ཙམ།¹³

ཇོ་བོ་རྗེ་འི་རྣམ་¹⁴པར་ཐར་པ་¹⁵རྒྱས་པར་གཞན་ནས་འབྱུང་བ་ལྟར་ལ། ཆེ་བའི་ཡོན་ཏན་མདོ་ཙམ་ [2b5] ལྷི། ཚོས་འབྱུང་གསལ་
[94.3] བའི་སློབ་མེ་ལས།

ཤར་ཕྱོགས་ཟ་ཏོར་རྒྱལ་པོའི་སྲས་སུ་བལྟམས། །
ཕྱི་ནང་རིག་པའི་གནས་རྣམས་ཀྱན་ལ་མཁས། །
བསྐྱབ་གསུམ་རྣམ་དག་གནས་བརྟན་འདུལ་ [2b6] བ་འཛིན། །
རྩ་བའི་སྡེ་བཞི་གྲེས་པ་བཙོ་བརྒྱད་ [94.4] ཀྱི། །
ལྷགས་རྣམས་སོ་སོར་མ་འདྲེས་བྱགས་རྒྱད་པས། །
ཀྱན་གྱིས་བཀྱར་ཅིང་ཁྱེད་གསུང་ཚད་མར་ [83] ལེན། །
རྣམ་གཞན་ངང་རྒྱལ་ལ་སོགས་མ་ག་ [3a1] ལྷི་ལ། །
གཙུག་ལག་གནས་ཆེན་ཀྱན་གྱི་བདག་པོ་མཛད། །
ཡི་དམ་ [94.5] དཔག་ཏུ་མེད་པའི་ཞལ་གཟིགས་ཤིང་། །
སྡེ་རྗེད་རྒྱད་སྡེ་འི་ཚོས་ལ་མི་མཁྱེན་མེད། །
གསེར་གླིང་ཞལ་གྱི་བུམ་ [3a2] བཟང་ལས་འོངས་པའི། །
བྱང་རྒྱ་སེམས་ཀྱི་བདུད་རྩི་རྫོགས་པར་གསོལ། །
སྐྱབ་དང་སྐྱུན་འབྲེན་ [94.6] རིགས་པའི་ང་རོ་ཡིས། །
ལོ་ལ་བ་ངན་པའི་སྐང་ཆེན་སྲོམ་མཛད་ཅིང་། །
སྐལ་བར་¹⁷ལྡན་རྣམས་ [3a3] རང་རང་བསམ་པ་དང་། །
མཐུན་པར་དམ་པའི་ཚོས་ཀྱིས་ཚོས་པར་མཛད། །
བསྐལ་པ་¹⁸བཟང་པོའི་¹⁹བྱང་རྒྱ་སེམས་དཔལ་ [95.1] ཞེས། །
ཇོ་མོ་ས་ལུང་བལྟན་ཇོ་བོ་རྣམ་པོ་པས་²⁰། །
བལྟན་པའི་བདག་པོ་ [3a4] ཉིད་ཏུ་མངའ་གསོལ་བ། །
དེ་ནི་དཔལ་ལྷན་མར་མེ་མཛད་དཔལ་ལོ། །

ཞེས་པ་ལྟར་རོ། །

¹³ [ZGD omit] ཇོ་...ཙམ།

¹⁴ [G] རྣམས་

¹⁵ [G] བ་

¹⁶ [D] ལྷི་

¹⁷ [G] པར་

¹⁸ [D] བ་

¹⁹ [G] པོའི་

²⁰ [GD] བས

ཇོ་བོ་རྗེ་དེ་ཕྱིད་བོད་དུ་བྱོན་ [95.2] ཚུལ་ལྟེ། དེ་ཡང་གངས་ཅན་གྱི་ཚུངས་སུ་བསྟན་པ་ལ་²²འཕེལ་འགྲིབ་མང་དུ་ [3a5] བྱང་
²³སྒྲུང་སྟེ། མཁན་སྟོབ་ཚོས་གསུམ་གྱིས་བསྟན་པའི་སྲོལ་བཙུགས་པ་ཏུ་ཤང་གིས་བསྟན་པར་བྱས། དེ་ཀླུ་ལ་ཤྱི་ལས་ཚར་བཅད་ [95.3]
ནས་ལྟ་སྟོན་ནས་པར་དག་པ་དར་རྒྱས་སུ་ཡོད་ [3a6] པ་རྒྱལ་ངན་སྒྲུང་དར་མས་བསྟུབས་ནས་ལོ་བདུན་ཅུ་ཙམ་གྱི་རིང་ལ་བོད་སྟུན་གྲིང་དུ་
ལྷུར། དེ་ནས་སྤྲོ་ཆེན་དགོངས་པ་རབ་གསལ་གྱིས་མདོ་ཁམས་སྤང་ནས་བསྟན་ [95.4] པའི་མེ་རོ་བསྟུངས།²⁴ ལོ་ཆེན་ [3b1] རིན་བཟང་
གིས་མངའ་རིས་སྟོན་ནས་གསོས་པས་དབུས་གཙང་གི་ཚུངས་སུ་དགེ་འདུན་གྱི་སྤེལ་ཕེལ་བར་གྱུར་མོད་ཀྱང་། འགའ་ཞིག་འདུལ་བ་ལ་མོས་
སྒོས་སྟགས་ཁྲུང་དུ་གསོད། [95.5] འགའ་ཞིག་ [3b2] སྟགས་ལ་མོས་སྒོས་འདུལ་བ་ཁྲུང་དུ་གསོད་པས་བསྟན་པ་ཕྱོགས་རེ་བར་མོང་།
ཕལ་མོ་ཆེ་ [84] གུབ་མཐའི་ཁ་འཛིན་གྱི་བཤད་པ་ཙམ་ལས་ཐུབ་བསྟན་ཡོངས་སུ་རྟོགས་པ་ཉམས་ལེན་དུ་འབྱུང་²⁵ཤེས་པ་ [3b3] [95.6]
ལྟ་ཞིག་ ཕྱོགས་མཐོང་གི་གོ་བ་ཆགས་པའང་དཀོན་པར་གྱུར།

ལྟག་པར་སྒྲུང་དར་གྱིས་བསྟན་པ་བསྟུབས་པའི་བར་དེར། སྟགས་པ་འགའ་ཞིག་གིས་རྒྱུད་ཚིག་སྟོལ་ཡོད་པ་རྣམས་ཡི་གེར་ [3b4]
བྲིས་²⁶པར་བར་སྟབས་ [96.1] གྱི་ཚིག་བརྗེད་ནས་མ་ཐོན་པ་རྣམས་ལ་སྟོབ་བཟོའི་བསྟན་བཅུག་བརྗེད་²⁷ཆད་²⁸གང་བྱུང་སྟུར། ཡང་ལ་ལས་
རྒྱུད་གྱི་མིང་བཏགས་པའི་རྟོག་བཟོའི་ཡི་གེ་གྲོང་ཚིག་འབའ་ཞིག་གིས་ [3b5] གང་²⁹འདོད་དུ་བྲིས། སྟགས་པ་³⁰འགའ་ཞིག་གིས་རང་གི་རྒྱུད་
མ་ལ་དེ་རིང་ [96.2] ཆང་ཞིས་པ་བཟོས་དང་ངས་རྒྱུད་པོ་ཏི་ལོང་བ་³¹ཞིག་ཚོས་པ་ཡིན་ཞེས་ཟེར་བའང་བྱུང་། རྒྱ་གར་ནས་ཨ་ཙཱ་དམར་
པོ་ཞེས་བྱ་བ་³²དང་། [3b6] པརྟི་³³ཏ་³⁴ཤམ་ཐབས་ཐོན་པོ་ཅན་བྱ་བ་ལ་སྟགས་པ་འགའ་ཞིག་བྱུང་ནས་བུད་མེད་སྟོན་པ་ལ་སྟོར་བ་དང་།
[96.3] དགའ་ལ་སྟགས་པའི་སེམས་ཅན་གསོད་པ་ལ་སྟོལ་བ་ཞེས་སྟོར་སྟོལ་³⁵དུ་གྲགས་པའི་ཚོས་ [4a1] ལོག་དང་། གཞན་ཡང་སྟགས་ལ་
སྟང་³⁶བཏགས་པའི་རྗེས་སྟོན་མང་པོ་ཞིག་དར་བར་བྱས། དེ་དག་གི་དབང་གིས་ལྟ་སྟོན་ནས་དགའ་འཛིན་པ་ཉུང་ [96.4] ཞིང་ཚོས་ལོག་སྟོན་
པ་མང་དུ་གྱུར་པ་³⁷ལ། [4a2] ལྟ་སྟོན་མ་ལོ་ཤེས་འོད་དང་། མོ་བྲང་ཞི་བ་³⁸འོད་དང་། ལོ་ཆེན་རིན་བཟང་སྟགས་ཀྱིས་ཚོས་ལོག་སྟུན་འབྱོན་གྱི་
ཡི་གེ་བྲིས་ནས་བཀྲམ་³⁹པས་ཀྱང་ཕན་པ་⁴⁰ མ་བྱུང་། དུས་དེར་མངའ་རིས་ཀྱི་རྒྱལ་པོ་ [96.5] ལྟ་སྟོན་མ་ [4a3] ལེ་ཤེས་འོད་ཀྱིས། བོད་ཀྱི་

21 [ZGD omit] ཇོ...ཚུལ།
22 [D omit] ལ།
23 [D omit] བྱང་
24 [ZG] བསྟུང་
25 [D] ལྷུར་
26 [G] བྲིས་
27 [G] བརྗེད་
28 [D] ཆད་
29 [G] གང་
30 [G omit] པ་
31 [D] ལོངས་པ་
32 [G] པ་
33 [G] པརྟི་
34 [Z] པརྟི་ཏ་ [instead of] པརྟི་ཏ་
35 [G] སྟོལ་
36 [ZG] བསྟང་
37 [G] པ་
38 [G] ཞིབ་
39 [ZG] བཀྲམས་
40 [G] པ་

བསྐྱོན་པ་གནས་ཚུལ་དེ་ལྟར་གྱུར་པ་ལྟགས་ཀྱིས་མ་བཟོད་པས་⁴¹ རྒྱ་གར་ནས་པར་⁴² ཏཱ་ལའི་བོ་བསྐྱོན་པ་ལ་ཚད་མར་གྱུར་པ་⁴³ ཞེས་གསུངས་
 དྲངས་ནས་དག་ཐེར་མཛད་པ་ལས་ཕན་ [4a4] ཐབས་གཞན་མེད་པར་དགོངས་ [96.6] [85] རས། རྒྱ་བཙུན་འགྲུལ་མེད་གོ་ལ་གསེར་
 མང་པོ་བསྐྱར་ནས་ཨ་ཏི་ཤ་གདན་འདྲེན་པར་⁴⁴བཏང་ཡང་སྤྱོད་མ་འདྲོངས། ད་དུང་གསེར་མང་པོ་བཙུན་ལྷན་འདྲེན་ [4a5] པར་
⁴⁵མངགས་དགོངས་ནས་གསེར་ཚོལ་དུ་ཕྱེབས་པ་གར་ལོག་གི་རྒྱལ་པོས་ [97.1] བཟུང་ནས་མ་བཏང་། ཡེ་ཤེས་འོད་ཀྱི་དཔོན་པོ་བྱང་ཆུབ་
 འོད་ཀྱིས་གསེར་མང་པོ་བཙུན་ལུ་པོ་སྤྱོད་བར་ཕྱིན་⁴⁶ཀྱང་གཏོང་མ་ [4a6] ཉན། དེ་ནས་ཡེ་ཤེས་འོད་གར་ལོག་གིས་བཏོངས། ཁོང་གི་
 ཞལ་ཏ་བཞིན་བྱང་ཆུབ་ [97.2] འོད་ཀྱིས་ནག་ཚོལ་རྩོམ་ཚུལ་ལྟམས་རྒྱལ་བ་གསེར་མང་པོ་དང་བཙུན་པར་⁴⁷སྤྱོད་འདྲེན་པར་རྒྱ་གར་དུ་
 མངགས། [4b1] རག་ཚོ་དང་རྒྱ་བཙུན་མེད་གཉིས་འཛོམས་⁴⁸ནས་ཨ་ཏི་ཤ་ལ་བོད་ཀྱི་བསྐྱོན་པའི་⁴⁹གནས་ཚུལ་དང་། ཡེ་ཤེས་འོད་ཀྱིས་
 དཀའ་ [97.3] སྤྱད་བྱས་ཚུལ་རྣམས་ཞིབ་དུ་ལུས་ཏེ་བོད་དུ་འབྱོན་པར་གསོལ་བ་⁵⁰བཏབ། [4b2] ལྷོ་མོ་ནས་ཇོ་པོ་ལ་བོད་དུ་འབྱོན་⁵¹པའི་
 ལུང་བསྐྱོན་མང་པོ་ཡོད་ཀྱང་། དེ་རྒྱབ་ཡང་བསྐྱར་⁵²ཀྱིས་རྗེ་བཙུན་མ་སྤོམ་མ་ལ་གསོལ་བ་བཏབ་ནས་བརྟག་པ་མཛད་པར་ [97.4] མཇལ་
 འགྲོམ་ཞེས་ཡོད་པ་ལ་དྲིས་གསུངས་ [4b3] པ་⁵³བཞིན་དྲིས་པར། བོད་དུ་འབྱོན་ན་བསྐྱོན་པ་ལ་ཕན་ཐོགས་ཤིང་ཁྱད་པར་དུ་ལུ་པ་⁵⁴སྤྱོད་
 གཅིག་⁵⁵བརྟེན་ནས་ཕན་ཐོགས་པའི་ལུང་བསྐྱོན་བྱུང་སྟེ་བོད་དུ་འབྱོན་པའི་ཞལ་བཞེས་མཛད་དོ། [97.5]

བསྐྱོན་པ་ལ་ [4b4] འཕེལ་འགྲིབ་དང་བསྐྱོན་བསྐྱེད་⁵⁶ལྟགས་ཚུལ་དང་། དེའི་དོན་དུ་ལྷ་སྤྲོ་མ་ལུ་དཔོན་ལོ་རྩོམ་བ་རྣམས་ཀྱིས་དཀའ་
 སྤྱད་ཆེན་པོ་བྱས་ཚུལ་གྱི་ཞིབ་ཆ་ཤེས་ན་དེ་དག་གི་བཀའ་དྲིན་དྲན་པ་དང་། རྣམ་པར་དག་པའི་ཚོས་ [4b5] རྟེན་དཀའ་བར་ [97.6] ཤེས་
 པ་དང་། རྒྱ་ཚོམ་དུ་མི་འཇུག་པར་རྣམ་དབྱེ་ཤེས་ནས་འཇུག་པ་སོགས་ཀྱི་དགོས་པ་ཆེ་བས་ཞིབ་དུ་འབྲི་བར་འོས་ [86] ཀྱང་། ཡི་གེ་ལྷོ་བས་
 འཛིགས་ནས་འདིར་ཕྱོགས་ཚམ་ལས་མ་སྤོམ་པས་ [4b6] གཞན་དུ་ཤེས་པར་བྱའོ། །

[*109] བོད་དུ་ཕྱེབས་ནས་བསྐྱོན་པ་ལ་བྱ་བ་མཛད་ཚུལ།⁵⁷

བོད་དུ་ཕྱེབས་ [98.1] རས་བསྐྱོན་པ་ལ་བྱ་བ་མཛད་ཚུལ་ནི། ལམ་རིམ་ཆེན་མོར་ཇོ་པོ་ལའི་ཆེ་བ་གསུངས་པའི་སྐབས་སུ། མངའ་
 རིས་སྟོད་དུ་ཕྱག་ཕེབས་པ་ན། མངས་རྒྱས་ཀྱི་བསྐྱོན་པའི་དག་ [5a1] ཐེར་མཛད་པར་གསོལ་བ་བཏབ་པ་ལ་བརྟེན་ནས་མདོ་ཐགས་ཀྱི་
 [98.2] གཞན་ཐམས་ཅད་བལྟས་ནས་ཉམས་སུ་ལེན་པའི་རིམ་པར་དྲིལ་བ་གཞུང་བྱང་ཆུབ་ལམ་གྱི་སྟོན་མ་མཛད་པ་ལ་སོགས་པའི་སྐོ་རྣམས་
 [5a2] བསྐྱོན་པ་རྒྱས་པར་མཛད་དེ། དེ་ཡང་མངའ་རིས་སུ་ལོ་གསུམ། ལྷེ་ཐང་དུ་ལོ་དགུ། དབུས་གཙང་གཞན་ [98.3] དུ་ལོ་ལྔའི་བར་དུ་

41 [ZG] པར་
 42 [G] པར་
 43 [G] བ་
 44 [G] བར་
 45 [ZG] བ་
 46 [ZG] ཕྱིན་
 47 [ZG] པར་
 48 [ZG] འཛོམས་
 49 [D] བ་
 50 [G] བ་
 51 [D] ཕྱིན་
 52 [ZG] རྒྱར་
 53 [G] བ་
 54 [GD] བ་
 55 [D] ཅིག་
 56 [D] བསྐྱེད་
 57 [ZGD omit] བོད་...ཚུལ།

སྐལ་བ་དང་ལྷན་པ་རྣམས་ལ་མདོ་སྟགས་ཀྱི་གཞུང་གདམས་ངག་མ་ལུས་པ་བསྟན་ནས་ [5a3] བསྟན་པའི་སྲོལ་རྒྱབ་པ་⁵⁸རྣམས་གསར་དུ་
བརྩམས། སྲོལ་རྒྱུང་ཟད་ཡོད་པ་རྣམས་འཕེལ་བར་⁵⁹མཛད། ལོག་པར་རྟོག་པའི་དྲི་མས་སྟགས་ [98.4] པ་རྣམས་ལེགས་པར་བསལ་ཏེ་
བསྟན་པ་རིན་པོ་ཆེ་དྲི་མ་དང་བྲལ་བར་ [5a4] མཛད་དོ། ། ཞེས་⁶⁰གསུངས་པ་ལྟར་ཏེ་གསུང་འདི་ལ་ཞིབ་དུ་བསམས་ན་གྲིན་དུ་གནད་ཆེ་
བའི་⁶¹གོ་རྒྱུ་མང་པོ་ཞིག་ཡོད་པར་སྣང་ངོ། །

བོད་དུ་ལོ་བཅུ་བདུན་བཞུགས་ [98.5] རྟམ། དགུང་ལོ་བདུན་ཅུ་ཙ་གསུམ་ [5a5] པ་རྒྱལ་ཏེ་ལོ་དབུ་གྲུ་བའི་ཆོས་བཙོ་
བརྒྱུད་ལ་སྟེ་ཐང་དུ་ལྷ་ངན་ལས་འདས་པའི་ཚུལ་མཛད་ནས་དགའ་ལྷན་དུ་རྩེ་བཅུན་བྱམས་པའི་བྱང་དུ་བྱང་རྒྱབ་སེམས་དཔལ་འཚམ་མཁའ་དྲི་
མ་མེད་པ་ཞེས་ [98.6] བྱ་བར་གྱུར་ [5a6] ཏོ། །

[*110] བཀའ་གདམས་པའི་སྲོལ་དར་རྒྱལ།⁶²

ཇོ་བོ་ཆེན་པོ་ལ་རྒྱ་བོད་གཉིས་ཆར་དུ་སློབ་མ་མཁམ་གྱི་བྱེད་པ་བརྟེས་ [87] པ་མང་དུ་བྱོན་ནའང་། གདམས་ངག་བུམ་⁶³པ་གང་
བྱིད་ཚུལ་གྱིས་གནང་ཞིང་བསྟན་པའི་བདག་པོར་བྱིན་གྱིས་བརྟུབས་པ་ནི། འཕགས་ [5b1] པ་ [99.1] ལྷན་རས་གཟིགས་ཀྱི་རྣམ་འཛུལ།
ཨ་ཏི་གར་ཉིད་ལ་སློབ་མས་ལུང་བསྟན་ཅིང་། སངས་རྒྱལ་པལ་པོ་⁶⁴ཆེ་དང་། སྤྱིང་རྩེ་བརྟུ་⁶⁵དཀར་པོའི་⁶⁶མཛད་ལས་དགོ་བསྟེན་ཆོས་འཕེལ་
ཞེས་ལུང་བསྟན་པ། འབྲོམ་རིན་ [99.2] པོ་ [5b2] ཆེ་རྒྱལ་བའི་⁶⁷འབྲུང་གནས་ཡིན་ལ། རྟོན་པ་རིན་པོ་ཆེས་བཀའ་གདམས་ཀྱི་སྲོལ་བྱེ་བ་
དང་། ལྷ་མཆེད་གསུམ་སོགས་ཀྱིས་དར་ཞིང་རྒྱས་པར་མཛད་ཚུལ་རྣམས་འདིར་ཞིབ་དུ་བཙེད་ན་ཏེ་ཅང་མང་བར་འགྱུར་ [5b3] བས་བཀའ་
གདམས་ [99.3] ཆོས་འབྲུང་སོགས་ལས་ཤེས་པར་བྱ་ཞིང་། མདོ་ཙམ་ནི་ཆོས་འབྲུང་གསལ་བའི་སྟོན་མེ་ལས།

དེ་ནས་⁶⁸ལོ་ངོ་བཅུ་ཡི་བར་དག་དུ། །
དགོ་བཤེས་སྟོན་པས་ཚོགས་ཀྱི་དཔོན་མཛད་དེ། །
ཇོ་བོའི་ [5b4] གདན་ས་དཔལ་⁶⁹ཀྱི་རྩ་རྒྱུང་བཏབ། ། [99.4]
ཡོངས་སུ་དག་པའི་སློབ་འཁོར་སྟོན་པར་མཛད། །
དེ་ནས་ལོ་གངས་ཉི་ཤུ་ལྷག་ཙམ་ན། །
ལྷ་མཆེད་གསུམ་ཀྱི་འཕྲིན་ལས་ཀློང་དོལ་⁷⁰ཏེ། །
དབུ་བྱང་དུ་བཀའ་གདམས་ [5b5] ཉི་མ་ཤར། །
གངས་ཅན་མ་ལུས་འདོད་ཀྱིས་གང་ [99.5] བར་མཛད། །
དང་སྲོང་ཆེན་པོ་པོ་⁷¹ཏོ་བ་ལ་ནི། །

58 [G] བ་
59 [G] པར་
60 [ZG insert] གང་
61 [ZG] བས་
62 [ZGD omit] བཀའ་...རྒྱལ།
63 [D] ལྷན་
64 [G] པོ་
65 [D] བད་མ་
66 [G] མོའི་
67 [G] པའི་
68 [Z] ལས་
69 [G] དབལ་
70 [G] བརྩོལ་
71 [G] བོ་པོ་

བཀའ་གདམས་ཀྱི་ཚོས་ལུགས་འཛིན་པའི་དགོན་ལྗེ་དུ་མས་དབུས་གཙང་གི་ལྗོངས་ཐམས་ཅད་ལྟབ་པར་གྱུར་པ་ལས། དེང་ལྟོ་སངས་ལྷན་པར་ལོད་པ་ནི། [100.6] བྱང་རྩ་སྐྱོང་དང་། གཙང་གི། [6b2] ལྷར་ཐང་བྱང་རྩ་ཆེན་པོའི་དབེན་གནས་དང་བཅས་པ་རྣམས་སོ། །

འདི་རྣམས་བཀའ་གདམས་སྐྱེགས་བམ་ལས་ཀྱི་ཆེར་ལུང་བསྟན་ཅིང་། [89] རྩ་སྐྱོང་ནི་བཀའ་གདམས་ཀྱི་ཆུ་འགོ་དག་པའི་ཞིང་ལས་པ། [6b3] [101.1] འབྲོམ་རྗེ་རྒྱལ་བའི་འབྲུང་གནས་ཀྱི་ཡེ་ཤེས་ཀྱི་རྣམ་འཕུལ་ལས་བྱུང་བ་ཡིན་ལ། ལྷར་ཐང་ནི་གར་བའི་སློབ་མ་གཏུ་ཕྱོག་སློབ་གྲིལ་གྲགས་པས་བཏབ་ནས་མཁན་བརྒྱུད་གསེར་རིའི་སྤེང་བ་ལྟ་བུ་ཟམ། [6b4] མ་ [101.2] ཆད་པར་བྱོན་ནོ། །

གདན་ས་གཞན་རྣམས་ནི་དུས་ཀྱི་དབང་གིས་པལ་ཆེར་སྐྱོངས་མཁུ་ལེང་མང་པོ་ཞིག་ད་ལྟ་བུར་མས་འཛིན་པར་སྐྱོང་སྟེ། བཀའ་གདམས་པ་⁸⁶རྣམས་བྱུང་མེད་ལ་ཤིན་ཏུ་འཛོམ་པས་⁸⁷[6b5] མཁའ་འགྲོའི་རྣམ་འཕུལ་གྱི། [101.3] བྱུང་མེད་ཅིག་⁸⁸དགོན་པར་⁸⁹འོངས་པ་དུག་འཇུག་གིས་བྱིར་བཏོན་པ་ལ་ད་ལྟ་ལྟེད་རྣམས་དེད་ཀྱི་རིགས་ལ་འཛོམ་སྟེ། ལྷར་དགོན་གྲུབ་རྣམས་བྱུང་མེད་ཀྱིས་འཛིན་ནོ་ཞེས། [6b6] དམོད་པོར་⁹²བས། དེའི་རྗེན་འབྲེལ་གྱི་དབང་གིས་ཡིན་ནོ་ཞེས། [101.4] དམ་པ་འགའ་ཞིག་གིས་⁹³གསུངས་སོ།⁹⁴ །

⁸⁵[*112] རོ་བོ་རྗེ་ལ་⁹⁶བརྟེན་ནས་བསྟན་པ་བསྟན་འཛིན་གཞན་བྱུང་ཚུལ།⁹⁷

གཉིས་པ་ནི།⁹⁸ བཀའ་བརྒྱུད་པ་དང་། ས་སྐྱ་བ་⁹⁹དང་། དགོ་ལྷན་པར་གྲགས་པ་འདི་རྣམས་ཀྱང་རོ་བོ་རྗེའི། [7a1] འཕྲིན་ལས་ལ་བརྟེན་ནས་བྱུང་བ་ལ་སྟག་ཡིན་ཏེ།

[*113] བཀའ་བརྒྱུད་བྱུང་ཚུལ།¹⁰⁰

བཀའ་བརྒྱུད་ཀྱི་མེས་པོ་ལྟོ་བྲག། [101.5] མར་པ་¹⁰¹ལོ་ལྟོ་རྩ་གར་དུ་ཡན་ཕྱི་མ་འབྱོན་¹⁰²དུས་རོ་བོ་རྗེ་དང་མཇལ་ནས་གདམས་པ་གསལ་ཅིང་། ལྱང་པར་དུ་ [7a2] མཉམ་མེད་དུགས་པོ་ལྟ་རྗེས། དང་པོ་རོ་བོའི་དངོས་སློབ་རྣལ་འབྱུང་པ་¹⁰³ཆེན་པོའི་སློབ་མ་རྒྱ་ཡོན་བདག་ལས་བཀའ་གདམས་ [101.6] གསལ། དེ་རྗེས་རྗེ་བཙུན་མི་¹⁰⁴ལ། [90] ལས་ཕུག་ཆེན་གསལ་ནས་བཀའ་ཕུག་ཆུ་བོ། [7a3] གཉིས་འདྲེས་

⁸⁶ [G] དེད
⁸⁷ [G] ལྷོང་
⁸⁸ [G] བ་
⁸⁹ [G] བས་, [D] ལྟེ། [instead of] བས་
⁹⁰ [ZG] ཞིག་
⁹¹ [G] བར་
⁹² [G] པོར་
⁹³ [ZG omit] གིས་
⁹⁴ [G] གསུང་ངོ་
⁹⁵ [D insert] ་
⁹⁶ [D] རོ་བོ་ཆེན་པོར་ [instead of] རོ་བོ་རྗེ་ལ་
⁹⁷ [ZG omit] རོ་...ཚུལ།
⁹⁸ [D omit] གཉིས་པ་ནི།
⁹⁹ [ZG] བ་
¹⁰⁰ [ZGD omit] བཀའ་...ཚུལ།
¹⁰¹ [D] བ་
¹⁰² [D] ཕྱོན་
¹⁰³ [D] བ་
¹⁰⁴ [ZG] མིད་

།ཀྱི་གདམས་པ་ལམ་རིམ་ཐར་རྒྱན་མཛད། དེའི་སློབ་མ་འགྲོ་མགོན་པག་མོ་གྲུ་པས་¹⁰⁵དགོ་བཤེས་དོལ་བ་¹⁰⁶ལས་བཀའ་གདམས་གསལ་
 [102.1] ཅིང་བཟུན་རིམ་གྱི་བཟུན་བཅོས་ཀྱང་མཛད། དེ་ [7a4] བཞིན་དུ་འབྲི་གྲང་འཇིག་རྟེན་མགོན་པོས་སྤང་ལྷང་པ་¹⁰⁷དང་། ལྷག་
 ལྷང་ཐང་པ་¹⁰⁸ཆེན་པོས་འཆད་ཀ་བ་དང་། ཀམ་¹⁰⁹དུས་གསུམ་མཁུན་པས་¹¹⁰ག་ར་བའི་སློབ་མ་རྣམས་འབྱུང་པ་¹¹¹ཤེས་རབ་རྩོམ་ལས་
 [102.2] བཀའ་ [7a5] གདམས་གསལ་ནས། སྤོང་ཕྱོགས་ཀྱི་ཉམས་ལེན་ཐམས་ཅད་བཀའ་གདམས་ལྷགས་བཞིན་མཛད་པས་¹¹² ། དེས་ན་
 བཀའ་བརྒྱན་པའི་ཚོས་ཀྱི་སྤྱིང་པོ་¹¹³ཡུག་ཆེན་དང་ཚོས་དུག་གི་¹¹⁴གདམས་པ་ཐོག་པ་ [7a6] ཆེན་པོའི་ཚོས་སུ་བྱེད་པ་ཆང་ [102.3] གི་
 སབ་ཅི་ལྷ་བུའི་བྱང་རྒྱབ་ཀྱི་སེམས་ཀྱི་མཁའ་འགྲུ་རྣམས་བཀའ་གདམས་ཀྱི་ཚོས་བརྒྱན་ལས་བྱུང་བ་ཁོ་ནའོ། །

[*114] རོ་བོ་ཇི་ལ་བརྟེན་ནས་ས་སྤྱ་བྱང་ཚུལ།¹¹⁵

འཇམ་དབྱངས་ས་པའ་ཀྱིས་ཀྱང་སྤེལ་བྱུང་པའི་¹¹⁶ [7b1] སློབ་མ་སྤྱི་བོ་ལྷས་པ་ལས་བཀའ་གདམས་གསལ་ཅིང་། ཁོང་གི་གསུང་
 རབ་ [102.4] རྣམས་སུ་ཡང་ཐོག་ཆེན་གྱུན་མོང་བའི་ལམ་གྱི་ཉམས་ལེན་ཐམས་ཅད་བཀའ་གདམས་ལྷགས་ཁོན་མཛད་པས། [7b2] ཇིས་
¹¹⁷འབྱང་གི་ས་སྤྱ་བ་¹¹⁸རྣམས་ཀྱང་སློབ་དེ་བཞིན་བྱེད་དོ། །

[*115] རོ་བོ་ཇི་ལ་བརྟེན་ནས་དགོ་ལྷགས་བྱང་ཚུལ།¹¹⁹

རྒྱལ་བ་ཅོང་ཁ་པ་ཆེན་པོའི་དངོས་གནས་ལ་རོ་བོ་ཇི་དང་ [102.5] ལྷགས་རྒྱུད་གཅིག་པར་ཚང་མའི་ལྷང་གིས་གྲུབ་ཅིང་། ལྷན་
 མོང་གི་སྤང་དོར་ [7b3] ཡང་མཁུན་ཆེན་ནས་མཁུན་རྒྱལ་མཚན་དང་ཚོས་སྤྱབས་བཟང་པོ་གཉིས་ལས་བཀའ་གདམས་ཀྱི་ལམ་རིམ་གསལ་
 རས། དུས་ཀྱི་རིམ་པས་རོ་བོའི་གདམས་ [102.6] པ་ལ་མ་རྟོགས་ལོག་རྟོག་ཐོ་ཚོམ་ [7b4] ཀྱི་དྲི་མ་ལྷགས་པ་¹²⁰རྣམས་བསལ་ཏེ་སྤོང་མེད་
 [91] ལྷགས་བཤད་ཀྱི་བཟུན་བཅོས་ལམ་རིམ་ཆེ་རྒྱུང་སོགས་མཛད་པ་དང་། རི་བོ་དགོ་ལྷན་པའི་ལྷགས་སློབ་ཉིད་ཀྱང་། རོ་བོ་བཀའ་
 གདམས་པའི་རྣམ་ [7b5] [103.1] ཐར་གཞིར་བཞག་ལ་དབུ་མའི་ལྷ་བ་དང་གསང་སྤགས་ཀྱི་བསྟོན་པ་བཏབ་པ་ལྷ་བུ་ཡིན་པས་བཀའ་
 གདམས་ལས་མ་འདས་ལ། ཚོས་འབྱུང་རྣམས་སུ་དགོ་ལྷན་རིང་ལྷགས་ལ་བཀའ་གདམས་ [7b6] [103.2] གསར་པའི་¹²¹མིང་གི་ཐ་སྤྱད་
 ཀྱང་མཛད་དོ། །

105 [G] བས་
 106 [Z] བ་
 107 [G] བ་
 108 [GD] བ་
 109 [D insert] བ་
 110 [D] བའི་
 111 [GD] བ་
 112 [G] བས་
 113 [G] བོ་
 114 [D omit] གི་
 115 [ZGD omit] རོ་...ཚུལ།
 116 [D] བའི་
 117 [Z] ཇིས་
 118 [Z] བ་
 119 [ZGD omit] རོ་...ཚུལ།
 120 [G] བ་
 121 [D] བའི་

དེ་ཡང་¹²²བཀའ་གདམས་སྒྲིགས་བཅ་ལས་ལུང་བསྟན་པ་སྟེ། ས་ཚོས་ལེའུ་ཉེར་དྲུག་པའི་མ་འོངས་ལུང་བསྟན་ལས།

ཐ་མར་བསྟན་པའི་མེ་རོ་དག །

གྲགས་ [8a1] པའི་མཚན་གྱིས་གསོ་བར་ [103.3] བྱེད། །

དུ་མའི་ཕན་བདེ་སྐྱབ་པར་¹²³བྱེད། །

དེ་ཡང་གནས་མཚོག་དམ་པ་ཡིན། །

ཞེས་གསུངས་པས། ལོ་རྒྱ་བ་ན་རེ། ཡན་ལག་གི་མིང་འདི་མ་མོ་ལ་བཏགས་¹²⁴ན་ [8a2] ལུན་སུམ་ཚོགས་པར་འཕྱར་བ་ཡིན། ལུས་ལས་
ཡན་ལག་རྒྱས་བྱ་བའི་ལྷགས་ཡིན། [103.4] ཞེས་གསུངས་པའི་ཚོགས་བཅད་ཀྱིས་ཇི་སྐྱེ་མ་དང་གདན་ས་དགའ་ལྡན་ལུང་བསྟན་ཅིང་། ལོ་
རྒྱ་བའི་གསུང་དེ་ [8a3] བཀའ་གདམས་པ་ལུས་ལྟ་བུ་ལས། བཀའ་གདམས་གསར་པ་¹²⁵དགའ་ལྡན་པ་ཡན་ལག་ལྟ་བུ་དེ་དར་རྒྱས་ཆེ་ཞེས་
པའི་དོན་དུ་སྒྲུང་ [103.5] བས་སོ། །

གཞན་ཡང་ཟུམ་སྤུ་བས་ཇོ་བོའི་ལོ་རྒྱུས་ཆེན་མོ་ཡི་གེར་བཏབ་ [8a4] ཅིང་། སྟོན་ལུང་བ་¹²⁶ལས་བཀའ་གདམས་གསན་པས།

ཁོང་གི་བརྒྱད་པ་འདུལ་འཛིན་མང་དུ་བྱོན་པ་ཐམས་ཅད་ཀྱང་བཀའ་གདམས་པ་གསྟག་གོ།

[*116] ཇོ་བོ་ལ་བརྟེན་ནས་མཚན་ཉིད་ཀྱི་གཞུང་དར་རྒྱལ།¹²⁷

དེར་མ་ཟད་ [103.6] མཚན་ཉིད་ཀྱི་གཞུང་ཆེན་མོའི་ [8a5] བཤད་རྒྱན་རྣམས་ཀྱང་ཇོ་ [92] བོ་ཇི་དེ་བཀའ་དྲིན་ལས་བྱུང་བ་
སྟེ། དེའི་རྒྱལ་ཇི་ལྟར་ཞེ་ན། བོད་འདིར་དབུ་ཚད་བྱམས་ཚོས་ཡོངས་སུ་རྫོགས་པའི་བདག་པོར་ལྱུར་པ་ནི་རྟོག་ལོ་ཆེན་པོ་སྟོབ་མ་ [8a6] ཡང་
སྟོབ་ [104.1] དང་བཅས་པ་ཡིན་ཅིང་། རྟོག་ལོ་རྒྱ་བ་ལེགས་པའི་ཤེས་རབ་ནི་ཇོ་བོ་ཆེན་པོའི་དངོས་སྟོབ་ཅམ་དུ་མ་ཟད་ཡེར་པ་¹²⁸ལྟ་རིར་
གསང་ཚོས་བཀའ་གདམས་སྒྲིགས་བཅ་གནང་བའི་ཐུགས་ཀྱི་ [8b1] ལྷན་པོ་གཅིག་¹²⁹ཡིན་ལ། དེ་ཉིད་ལ་ཇོ་བོ་ཉིད་ཀྱིས་གསང་སྤུ་
[104.2] འདེབས་པར་ལུང་བསྟན་པ་བཞིན་བཏབ། དེའི་སྟོབ་མ་དང་དཔོན་པོ་གཉིས་ཀ་ཡིན་པ་སྟོ་ལྡན་ཤེས་རབ་ཀྱིས་ཇོ་བོའི་ཚོས་རྣམས་ལུ་
བོ་¹³⁰ [8b2] ལ་¹³¹གསན་ནས་བསྟན་རིམ་¹³²ཀྱང་མཛད། དེའི་སྟོབ་མ་གསུང་རབ་ཀྱང་ལ་མཁམས་པ་གོ་ལུང་པ་¹³³སྟོ་བོས་འབྱུང་ [104.3]
གནས། མར་ཕྱིན་ལ་མཁམས་པ་འབྲེ་ཆེན་པོ་ཤེས་རབ་འབར། ཚད་མ་ལ་མཁམས་པ་ [8b3] གངས་པ་¹³⁴ཤེའུ། དབུ་མ་ལ་མཁམས་པ་ལྷུང་རིན་
ཆེན་གྲགས། དངོས་ཀྱི་གདན་ས་པ་¹³⁵ཆོས་ཚོས་སྟོང་སྟོང་སྟོང་གི་གསུང་། གོ་ལུང་པ་¹³⁶གཞིན་ཅུའི་དུས་ཇོ་བོ་ཇི་དང་འབྲོམ་ [104.4] ལས་བཀའ་
གདམས་ཀྱི་ཚོས་གསན། [8b4] ཇོ་བོའི་གཞུང་རྒྱུང་རྣམས་གཙོ་བོར་ལྱུར་པའི་¹³⁷ཚོས་རྒྱུང་བརྒྱ་རྩ་ལ་དོན་ཁོག་འཛིང་བའི་རྟེན་¹³⁸དང་།

122 [D] དེའང་
123 [ZG] བར་
124 [G] གཏགས་
125 [GD] བ་
126 [ZD] བ་
127 [ZGD omit] ཇོ་...རྒྱལ།
128 [GD] བ་
129 [ZG insert] བུ་
130 [G] བོ་
131 [D] ལས་
132 [D] རིམས་
133 [G] བ་
134 [G] གདས་བ་
135 [D omit] བ་
136 [G] བ་
137 [G] བའི་
138 [D] རྟེན་

བཟུན་རིམ་ཆེ་ཆུང་གཉེས་མཛད། བཟུན་རིམ་ཆེན་མོ་ནི་ལམ་སྐྱོན་གྱི་དགོངས་འགྲེལ་བླ་མེད་ཡིན། [104.5] [8b5] སམ་¹³⁹རྒྱལ་བ་ཚོང་ལ་
 སམ་ཀྱང་འདིའི་སྒྲིགས་བམ་གཟིགས་དུས་སུ་མཛོད་པ་སྣ་ཚོགས་ཀྱིས་བསུ་བ་མཛད་ཅིང་། ལམ་རིམ་ཆེན་མོ་ཡང་ཕལ་ཆེར་འདི་དང་མཐུན་
 པར་¹⁴⁰མཛད། གོ་ལུང་པ་¹⁴¹། འབྲེ། གངས་པ། [8b6] རྩུང་། ཞང་རྣམས་ཀྱི་སློབ་པ། [104.6] བརྒྱུད་ལ་མཁས་པ་གནམ་གྱིས་ས་བཀའ་བ་
¹⁴²ལྷ་བུ་རིམ་པར་བྱོན་པ་རྣམས་ཀྱིས་བཤད་གྲུ་མང་དུ་བཅུགས་པའི་འཆད་ཉན་གྱི་རྒྱན་ད་ལྟའི་བར་དུ་ [93] གནས་པ་འདོད། །

མདོར་ན། [9a1] འགོས་ལོ་གཞོན་རུ་དཔལ་གྱིས་དེབ་ཚོན་ལས། དུས་ [105.1] ལྷིས་¹⁴³བོད་དུ་བྱོན་པའི་དགེ་བའི་བཤེས་གཉེན་
 རྣམས་དང་། རྣལ་འབྱོར་པ་¹⁴⁴གྲུབ་པའི་¹⁴⁵སློབ་པ་ཚན་རྣམས་ཀྱི་རྣམ་པར་ཐར་པ་¹⁴⁶ཕལ་ཆེ་བ་ན། [9a2] བཀའ་གདམས་པའི་དགེ་བའི་
 བཤེས་གཉེན་རེ་ལ་གདུགས་པ་ [105.2] ཁོ་ན་¹⁴⁷སྣང་བས། འབྲོམ་ཡང་རྒྱ་ཆེ་ཞིང་རྒྱན་ཆགས་པའི་འཕྲིན་ལས་ཚན་ཞིག་སྟེ། དེ་དག་གིས་ནི་
 དཔལ་མར་མེ་མཛད་ཡོ་ཤེས་ཀྱིས་ཚོས་ [9a3] ཀྱི་འཁོར་ལོ་བསྐྱར་བའི་འབྲས་བུ་ལྷོགས་ཙམ་ཞིག་བཟུན་པ་ཡིན་ནོ། ཞེས་གསུངས་པ་ལྟར།
 [105.3] གངས་ཚན་གྱི་ཚོངས་སུ་རྣམ་¹⁴⁸པར་དག་པའི་ཚོས་ལྷགས་སམ་གྲུབ་མཐའ་ཇི་སྟེད་བྱུང་བ་ཐམས་ [9a4] ཅད་ཇོ་བོ་ཆེན་པོ་བོད་དུ་
 བྱོན་ནས་ཚོས་ཀྱི་འཁོར་ལོ་བསྐྱར་བའི་འབྲས་བུ་ཡིན་པར་ཤེས་པར་བྱའོ། །

¹⁴⁹[*117] བཀའ་གདམས་ཀྱི་བཟུན་པའི་སྤྱི་བབ་བཤད་པ།¹⁵⁰

གསུམ་པ་¹⁵¹བཀའ་གདམས་ཀྱི་བཟུན་ [105.4] པའི་སྤྱི་བབ་བཤད་པ་ལ། ཚོས་ཀྱི་རྣམ་གངས་དང་། གང་ཟག་ [9a5] གི་མཛོད་
 སློབ་གཉེས་ལས།

¹⁵²[*118] ཚོས་ཀྱི་རྣམ་གངས།¹⁵³

དང་པོ་ནི།¹⁵⁴ འབྲོམ་གྱི་ཞལ་ནས། བཟུན་པ་ཐམས་ཅད་གྲུ་བཞི་ལམ་གྱིས་འཁྱེར་ཤེས་པ་དའི་སླ་མ་ཞེས་པ་དང་། རྣལ་འབྱོར་པ་
¹⁵⁵ཆེན་ [105.5] པོས། གདམས་ངག་ལ་ནང་བྱུན་རྒྱུད་པ་ནི། [9a6] བེའུ་བུམ་ལག་མཐིལ་ཙམ་ཞིག་ལ་ངེས་པ་རྟེད་པ་ལ་མི་ཟེར་གྱི།
 གསུང་རབ་ཐམས་ཅད་གདམས་ངག་དུ་གོ་བ་ལ་ཟེར་བ་ཡིན། ཞེས་གསུངས་པ་དང་། སྐོམ་པ་རིན་ཆེན་སྐོམ་པ། [105.6] འདུལ་བ་སྐྱགས་
 ཀྱི་གོགས། [94] [9b1] སྐྱགས་འདུལ་བའི་གོགས་སུ་འཁྱེར་ཤེས་པ་དའི་སླ་མའི་བཀའ་བརྒྱུད་མིན་པ་མེད། ཅེས་གསུངས་པ་ལྟར།

¹³⁹ [G] བས་
¹⁴⁰ [G] བ་, [Z] བ་
¹⁴¹ [G] བ་
¹⁴² [G] བ་
¹⁴³ [G] ལྷིས་
¹⁴⁴ [GD] བ་
¹⁴⁵ [ZG] བའི་
¹⁴⁶ [GD] བ་
¹⁴⁷ [G] ཁོ་ན་
¹⁴⁸ [G] རྣམས་
¹⁴⁹ [D insert] ༩
¹⁵⁰ [ZG omit] བཀའ་...པ།
¹⁵¹ [D omit] གསུམ་པ་
¹⁵² [D insert] ༩
¹⁵³ [ZG omit] ཚོས་...གངས།
¹⁵⁴ [D omit] དང་པོ་ནི།
¹⁵⁵ [GD] བ་

[*119] བཀའ་གདམས་པའི་ཁྱད་ཚོས།¹⁵⁶

སྤྱིར་རྒྱལ་བའི་¹⁵⁷གསུང་རབ་ལ་སློང་ལེན་མི་བྱེད་པར་ཐམས་ཅད་གང་ཟག་གཅིག་ [106.1] འཚང་རྒྱ་བའི་ཚ་ [9b2] རྟེན་དུ་
འབྱེད་བ་བཀའ་གདམས་པའི་ཁྱད་ཚོས་ཡིན་པས། བཀའ་གདམས་སྤྲོ་མ་འདུས་པའི་ཚོས་མེད་ནའང་། ཡོངས་སྤྱོད་གསལ་པ་ལ། གཞུང་དང་
གདམས་ངག་གཉིས་མས། ཡང་ན་མན་ངག་དང་ [9b3] གསུམ་དུ་དབྱེདོ། ། [106.2] གཞུང་ལ་ལྟ་བུ་གཙོ་བོར་སྟོན་པ་དང་། སྤྱོད་པ་གཙོ་
བོར་སྟོན་པ་དང་། གཉིས་ཀ་རྒྱུང་འབྲེལ་དུ་སྟོན་པ་དང་¹⁵⁸གསུམ་མོ། །

དང་བོ་ནི། ཇོ་བོས་མཛད་པའི་བདེན་གཉིས་ལ་འཇུག་པ་¹⁵⁹དང་། དུ་ [9b4] མའི་མན་ངག་སོགས་དང་། གཉིས་པ་¹⁶⁰ནི།
[106.3] སྤྱོད་བསྐྱེས་སྟོན་མེ་དང་། སེམས་བསྐྱེད་དང་སྟོམ་པའི་ཚོ་གསོགས་དང་། གསུམ་པ་ནི། བྱང་རྒྱལ་ལམ་གྱི་སྟོན་མའོ། །

[*120] ལམ་སྟོན་ནི་ལྷགས་གཞན་ལས་ཁྱད་དུ་འཕགས་ཚུལ།¹⁶¹

འདི་ནི་རྒྱལ་བའི་བཀའ་སྡེ་སྟོན་ [9b5] གསུམ་དང་རྒྱུད་སྡེ་བཞི་དགོངས་འགྲེལ་དང་བཅས་པ་ལས་ཡི་གེ་ན་གཅིག་ཀྱང་ [106.4]
དོར་དུ་མེད་པར་གང་ཟག་གཅིག་གི་ཉམས་ལེན་གྱི་རིམ་པར་དྲིལ་ནས་སྟོན་པའི་¹⁶²ལེགས་བཤད་མད་དུ་བྱུང་བ་སྟེ། ཇི་སྲིད་མའི་ [9b6] བྱང་
རྒྱལ་ལམ་རིམ་ལས། ཇོ་བོས་མཛད་པའི་གཞུང་མང་དུ་ཡོད་ཀྱང་ ཅ་བ་ལྟ་བུ་ཡོངས་སྤྱོད་ཚོགས་པ་ནི་ལམ་ [106.5] སྟོན་ཡིན་ཏེ། མདོ་ལྷགས་
གཉིས་ཀའི་གནད་བསྐྱེས་ནས་སྟོན་པས་བཤེད་བྱ་ཡོངས་སྤྱོད་ [10a1] ཇོགས་པ་དང་། སེམས་འདུལ་བའི་རིམ་པ་གཙོ་བོར་བྱས་པས་ལག་དུ་
སྤང་བདེ་བ་དང་། ཤིང་རྩ་ཆེན་པོ་གཉིས་ཀྱི་ལྷགས་ལ་མཁས་པའི་སྤྱོད་ [106.6] མ་གཉིས་ཀྱི་ [95] གདམས་པས་བརྒྱན་པས་ལྷགས་གཞན་
[10a2] ལས་ཁྱད་པར་དུ་འཕགས་པའོ། །ཞེས་གསུངས་པ་ལྟར་རོ། །

[*121] བཀའ་གདམས་གཞུང་དུག་¹⁶³

བཀའ་གདམས་གཞུང་དུག་དུ་གསལ་པ་ནི། མ་རྒྱན་གཉིས། བསྐྱབ་སྤྱོད་གཉིས། སྤྱེས་ཚོས་¹⁶⁴གཉིས་ཏེ། [107.1] དུག་ཡིན་ལ།
དེ་ལས་ [10a3] བསྐྱབ་སྤྱོད་གཉིས་ལྟ་སྟོན་རྒྱུང་འབྲེལ། གཞན་རྣམས་བྱང་རྒྱལ་སེམས་དཔའི་སྤྱོད་པ་གཙོ་བོར་སྟོན་པའི་གཞུང་ཡིན་ནོ། །
ཇོ་བོའི་ཚོས་རྒྱུང་བརྒྱ་རྩར་གསལ་པའང་¹⁶⁵བཀའ་ [107.2] གདམས་ཀྱི་གཞུང་ཡིན་ [10a4] ལ། ཅ་ཤེས་དང་། སྟོང་ཉིད་
བདུན་རྩ་བ་¹⁶⁶དང་། རིན་ཆེན་ཐོང་བ་རྣམས་ཀྱང་ཡིན་ནོ། །

[*122] གདམས་ངག་གསུམ་ལས་དང་བོ་ལྟ་བུ་གཙོ་བོར་སྟོན་པ།¹⁶⁷

156 [ZGD omit] བཀའ་...ཚོས།
157 [G] པའི་
158 [ZG omit] དང་
159 [G] བ་
160 [G] བ་
161 [ZGD omit] ལམ་...རྒྱལ།
162 [G] བའི་
163 [ZGD omit] བཀའ་...དུག།
164 [G] ཚོས།
165 [G] བའང་
166 [D] བ་
167 [ZGD omit] གདམས་...པ།

གདམས་ངག་ལ་ཡང་¹⁶⁸གསུམ་ལས། ལྷ་བ་གཙོ་བོར་སྟོན་པ་ནི། རོ་བོ་ཉིད་ཀྱི་མན་ངག་སྟུན་པ་¹⁶⁹ལས་¹⁷⁰ [10a5] བརྒྱད་པའི་
 [107.3] བདེན་བཞིའི་ཁྲི་¹⁷¹དང་། སྤ་རྒྱུད་བཞུད་པའི་རྟེན་འབྲེལ་གྱི་ཁྲི་¹⁷²། རྣལ་འབྱེད་པ་¹⁷³ནས་བརྒྱད་པའི་བདེན་པ་¹⁷⁴གཉིས་
 ཀྱི་ཁྲི་¹⁷⁵རྣམས་ཡིན་ཏེ། བདེན་བཞི་དང་རྟེན་འབྲེལ་གྱི་ [10a6] ཁྲི་¹⁷⁶གཉིས་ནི་ཐུན་མོང་བའི་གང་ཟག་གི་ [107.4] བདག་མེད་དང་།
 བདེན་གཉིས་ཀྱི་ཁྲི་¹⁷⁷གཉིས་ནི་ཤིན་ཏུ་སྤ་བའི་ཚོས་ཀྱི་བདག་མེད་ལ་འབྲིད་པར་མཛད་པ་ཡིན་ནོ། །

རོ་བོའི་སྟོབ་མ་བདེན་ [10b1] གཉིས་ལ་ཤིན་ཏུ་མཁས་པ་ནི་རྣལ་འབྱེད་པ་¹⁷⁸ཚེན་པོ་ཡིན་ལ། དེས་གོ་ལུང་པ་¹⁷⁹དང་ [107.5]
 སྟུན་པ་¹⁸⁰ལ་གསུངས། སྟུན་པ་ཀྱང་སྟོད་ལུང་བ་¹⁸¹དང་བྱ་ལུལ་བ་¹⁸²གཉིས་ལ་ཤོག་ཚོས་སུ་གསུངས། [10b2] སྟོད་ལུང་བས་¹⁸³ཤོག་
 ཚོས་དང་། ཚོགས་ཚོས་གཉིས་ཀར་གསུངས་ཤིང་བརྩམས་ཚོས་ཀྱང་མང་དུ་མཛད། སྟོབ་མ་ལྷུང་ [107.6] ཁམས་ཀྱིས་ཀྱང་མང་དུ་གསུངས་
 པས་དར་ཞིང་རྒྱས། མངས་ [96] རྒྱས་ [10b3] དཔོན་གྱིས་ཀྱང་ཡིག་ཆ་རྒྱས་བསྟུས་དུ་མ་མཛད། འཆད་ལ་བས་¹⁸⁴མཛད་པའི་གྲུབ་མཐའི་
 བསྟན་བཅོས་དང་། དེའི་འབྲེལ་པ་¹⁸⁵ལྷ་ལྷུང་དབང་ལྷུག་གིས་ [108.1] མཛད་པར་ཕྱི་ནང་གི་གྲུབ་མཐའི་འདོད་ [10b4] ཚུལ་རྣམས་
 བཀོད་ནས། ལྷ་སྐབ་ཀྱི་དབུ་མ་ཚེན་མོར་བ་དུ་མི་གནས་པར་འབྲིད་པར་མཛད་དེ་བཀའ་གདམས་པའི་ལྷ་བའི་ལེ་ལག་གོ།

[*123] ལྷ་བའི་བཞེད་ཚུལ།¹⁸⁶

དེ་ལྷ་ན་¹⁸⁷རོ་བོ་ཚེན་པོ་ནི་དབུ་མ་ཐལ་འབྱུར་བའི་ལྷ་ [10b5] བ་འཛིན་པ་¹⁸⁸ [108.2] ལམ་སྟོན་ཙ་འབྲེལ་དང་། དབུ་མའི་
 མན་ངག་ཙ་འབྲེལ་སོགས་ཀྱིས་ཤེས་ཤིང་། འབྲོམ་གྱིས་ཀྱང་རོ་བོ་ལ་སྟོབ་དཔོན་ལྷ་གྲགས་ལུགས་ཀྱི་རྟོགས་པ་སྤུལ་བས་གྲགས་དབྱེས་
 [10b6] རས་ཕྱག་ཐལ་མོ་སྐྱར། རོ་མཚར་ཆེད་ལྷ་རྒྱ་གར་ཤར་ཕྱོགས་ན་ [108.3] ལྷ་བ་འདི་ཁོ་ན་འཛིན་ཞེས་གསུངས་པར་བཤད། དགེ་
 བའི་¹⁸⁹བཤེས་གཉེན་པོ་ཏོ་བ་སོགས་སྐྱ་མཚེད་གསུམ་དུ་གྲགས་པ་ [11a1] རྣམས་ཀྱི་ལམ་རིམ་དང་གསུང་སྟོན་སུ་དབུ་མའི་ལྷ་བ་ལྷ་གྲགས་

168 [D] ལའང་
 169 [G] བ་
 170 [ZG] ལ་
 171 [ZG] འཁྲིད་
 172 [ZG] འཁྲིད་
 173 [GD] བ་
 174 [G] བ་
 175 [ZG] འཁྲིད་
 176 [ZG] འཁྲིད་
 177 [ZG] འཁྲིད་
 178 [GD] བ་
 179 [G] བ་
 180 [Z] བ་
 181 [ZD] བ་
 182 [Z] བ་
 183 [ZD] པས་
 184 [G] པས་
 185 [GD] བ་
 186 [ZGD omit] ལྷ་...ཚུལ།
 187 [D] དེ་ནས་ [instead of] དེ་ལྷ་ན་
 188 [G] བ་
 189 [G] པའི་

ལུགས་དང་མཐུན་ཤས་ཆེ་བ་འབྱུང་ཞིང་། རྟོག་ལོ་ [108.4] ཡབ་སྲས་ནི་ལེགས་ལྡན་དང་སྐྱབ་པའི་གཞུང་ཁུངས་སུ་དྲངས་པ་ [11a2] མང་
དུ་སྐང་ནའང་ལྟ་བུ་སྤོང་ཚུལ་ཞི་¹⁹⁰འཚོ་ཡབ་སྲས་དང་མཐུན་པ་ཤས་¹⁹¹ཆེདོ། །

གསེར་གླིང་པ་¹⁹²ནས་བརྒྱུད་པའི་སྤོང་ཚུང་འགའ་ཞིག་གི་ལྟ་བུ་པའི་འགྲོས་¹⁹³ནི་སེམས་ཚམ་རྣམ་ [108.5] རླུ་¹⁹⁴པའི་ལུགས་
[11a3] དང་མཐུན་པའང་སྤང་ངོ་། །

དེ་ལྟ་ནའང་བཀའ་གདམས་པ་ཕྱི་མ་ཕལ་མོ་ཆེས་ལྷག་ཞུ་གཞུང་དེ་དག་གི་དོན་མ་འདྲེས་པར་འཆད་ཤེས་པ་དཀོན་པར་བྱུང་འདུག་ཅེས་
བདག་གི་སྤྲོ་མ་ཐམས་ཅད་མཁྱེན་པས་ [11a4] གསུངས་སོ། ། [108.6]

[*124] སྤོང་པ་གཙོ་བོར་གྱུར་པའི་གདམས་ངག་¹⁹⁵

སྤོང་པ་གཙོ་བོར་གྱུར་པའི་¹⁹⁶གདམས་ངག་ནི་ཐེག་ཆེན་སྤོང་ལི་ [97] གདམས་པ་རྣམས་ཏེ། བདག་པས་གཞན་གཅེས་པའི་བྱང་
ཚུབ་ཀྱི་སེམས་མ་སྐྱེས་པ་བསྐྱེད་པ་དང་སྐྱེས་ཟིན་ [11a5] ཞོང་འཕེལ་དུ་བྱས་པའི་སྐོ་ནས་ས་ལམ་བཤོད་པའི་ཚུལ་ [109.1] ཡིན་ལ། ཐེག་
ཆེན་གྱི་མདོ་ལྗེ་སྤྱི་དང་ཁྱད་པར་དུ་མདོ་ལྗེ་ཕལ་པོ་ཆེ་དང་། དགོངས་འགྲེལ་གྱི་གཞུང་སྐྱ་སྐྱབ་ཀྱི་¹⁹⁷རིན་ཆེན་ཕྱེང་བ་དང་། [11a6] མི་ལམ་
ཡིད་བཞིན་ལོར་བུའི་གཏམ་དང་། སེམས་ཅན་མགུ་བའི་ཆོགས་ [109.2] བཅད་དང་། ཞི་བ་ལྟའི་བསྐྱབ་སྤོང་གཉིས་རྣམས་གདམས་པའི་
ཁུངས་ཡིན་ཅིང་། མདོ་བསྐྱེད་བཅོས་དེ་དག་གི་མན་ངག་ [11b1] སྤྱང་པོར་དྲིལ་བ། རོ་བོའི་སྤྲོ་མ་རྣམས་འཇོད་པའི་སྤོང་ཚུང་མཚོན་
ཆ་འཁོར་ལོ་དང་། མ་བྱ་དུག་འཛོམས། [109.3] བུམས་པའི་རྣལ་འབྱོར་གྱི་ཀྱང་སྐོམ་དོ་རྗེའི་གྲུ། གསེར་གླིང་པའི་¹⁹⁸སེམས་དཔའི་ [11b2]
རིས་པ་དང་། རྟོག་པ་¹⁹⁹འབྱུར་འཛོམས་ལ་སོགས་པ་གདམས་ངག་ཡི་གེར་བཀོད་པ་རྣམས་སོ། །

[*125] སྤོང་ལི་རྒྱུད་པ།²⁰⁰

དོན་བདུན་མར་ཉེ་བར་བཀོད་པའི་སྤོང་ལི་མན་ངག་ནི། [109.4] གསེར་གླིང་པས་²⁰¹རོ་བོའི་ལ་གསུངས། དེས་དགོ་བཤེས་
[11b3] རྟོན་པ་ལ་ལྟོག་ཚེས་སུ་མཇོད། དེས་སྐྱ་མཆེད་གསུམ་ལ་ལྟོག་ཚེས་སུ་མཇོད། སྐྱ་མཆེད་གསུམ་གྱི་རིང་ལ་ལམ་རིས་ཚོགས་ཚེས་སུ་
མཇོད་ཀྱང་། སྤོང་ལི་ལྟོག་ཚེས་ཉིད་དུ་མཇོད་པར་ [109.5] མངོན་ལ། པོ་²⁰³ [11b4] ཏོ་བས་ཀྱང་སྤང་ཤར་གཉིས་ལ་སོགས་པ་ལ་ལྟོག་
ཚེས་སུ་གནད་བ་²⁰⁴ལས། སྤང་ཐང་བས་དམིགས་པའི་ས་བཅད་བརྒྱུད་དུ་མཇོད་པ་ལ་སྤོང་ལི་ཆོགས་²⁰⁵བརྒྱུད་མར་གྲགས་ཤིང་། དེ་ཉིད་
ཆོགས་ཚེས་སུ་མཇོད་ [11b5] པར་ཡང་ [109.6] མངོན་ནོ། །

190 [GD insert] བ
191 [G] ཤེས་
192 [GD] བ
193 [G] བགྲོས་
194 [GD] བརླུ་
195 [ZGD omit] སྤོང་...ངག
196 [G] བའི་
197 [G] ལྱི་
198 [GD] བའི་
199 [G] བ
200 [ZGD omit] སྤོང་...པ།
201 [GD] བས་
202 [D] རོ་
203 [G] པོ་
204 [G] བ
205 [ZG] ཆོག་

གྲང་འཇམ་པས་²⁰⁶ཞང་དང་གཉེན་²⁰⁷། འཇོ་སྐང་པ་²⁰⁸རྣམས་ལ་གསུངས་ [98] ཤིང་། དེ་དག་གི་གདམས་པ་འདྲེས་མར་ཡི་གེར་
བཀོད་པ་ལ་ནི་བེུ་བུ་མ་ལ་འོ་ཞེས་ཟེར་དེ། འཇོ་སྐང་པའི་²⁰⁹སྒོ་ [11b6] སྒྲིང་ཞེས་གྲགས་པ་ཡང་དེ་ [110.1] ཉིད་ཡིན་ནམ་སྟེ་མོ། །

[*126] སྒོ་སྒྲིང་དོན་བདུན་མར་འཁྲིད་རིམ།²¹⁰

ཞང་གར་བས་²¹¹ནི་བྱ་འཆད་ཀ་བ་ལ་སྐྱོག་ཚེས་སུ་མཛད་དེ། གཞན་ལ་གསུངས་པའི་གཏམ་ནི་མི་སྣང་དོ། །འཆད་ཀ་བས་²¹²ནི་
གཙོ་བོར་རང་ཉིད་ཁོ་ནས་ཐུགས་ [12a1] ཉམས་སུ་བཞེས་ཤིང་། དེ་རེ་གཉིས་གཉིས་ལ་ [110.2] སྐྱོག་ཚེས་སུ་ཡང་མཛད་པ་ལས། བན་
ཆེར་ཐོགས་པར་གཟུགས་ནས་འགྲོ་ཡུར་ཚོགས་ཚེས་སུ་ཡང་གསུངས། རྩོན་འགྲོ་རྟེན་གྱི་ཚེས་སེམས་པ། [12a2] དངོས་གཞི་བྱང་རྒྱུ་གྱི་
སེམས་སྒྲིང་བ། རྒྱུ་རྒྱུ་བྱང་རྒྱུ་གྱི་ལམ་དུ་བསྐྱར་བ། ཚོག་ཅིག་གི་ [110.3] ཉམས་ལེན་དེལ་ནས་བསྟན་པ། སྒོ་འབྱོངས་པའི་ཚད། སྒོ་
སྒྲིང་གི་དམ་ཚིག་ སྒོ་སྒྲིང་གི་བསྐྱབ་བྱ་སྟེ་དོན་ [12a3] བདུན་དུ་ས་བཅད། ཚ་བའི་ཚིག་ཡི་གེར་བཀོད་པས་སྒོ་སྒྲིང་དོན་བདུན་མར་གྲགས་
པ་ཡིན་ལོ། །

བྱང་རྒྱུ་ལམ་གྱི་རིམ་པ་རྣམས་ [110.4] དང་། གྲང་ཐང་བའི་ཚིགས་²¹³བརྒྱད་མ། འཇོ་སྐང་པའི་²¹⁴སྒོ་སྒྲིང་རྣམས་ [12a4]
སུའང་བདག་གཞན་བཞེ་བའི་བྱང་རྒྱུ་གྱི་སེམས་བསྐྱོམ་རྒྱལ་ལེགས་པར་བསྟན་ཀྱང་། དོན་བདུན་མར་ཐུ་མ་དེ་དག་དུ་མི་འབྲུང་བའི་གཏོང་
ལེན་རྒྱུ་ལ་བསྐྱོན་པ་ [110.5] སོགས་དམིགས་པའི་འཕྲུལ་ [12a5] ཟབ་མོ་དང་། འཁྲིད་རིམ་²¹⁵ཀྱང་གཞན་ལས་རྒྱས་པས་འདི་ཉིད་ལྷང་
པར་དུ་འཕགས་པའོ། །

སྟར་ཐང་བ་²¹⁶སངས་རྒྱས་སྐྱོམ་²¹⁷པས་ཀྱང་འཆད་ཀ་བའི་ཚ་ཚིག་འདི་དག་ལ་གོ་རིམ་བསྐྱིགས་པའི་འཆད་ [12a6] རྒྱལ་
[110.6] སྒོ་སྒྲིང་ཚོགས་བཤད་མ་ཞེས་བྱ་བ་ཡོད་ལ། རྗེ་སྤྲུམ་ཚོང་ལ་པ་ཆེན་པོས་²¹⁸ཀྱང་དོན་བདུན་མའི་གདམས་པ་འདི་མཚོག་ [99] དུ་
གཟུགས་ནས་སྒོ་བ་མ་རྣམས་ལ་རྒྱས་པར་གསུངས་པ་བྱང་སེམས་རུ་ [12b1] སྒྲིང་བས་ཟེན་བྲིས་སུ་མཛད་པ་དང་། ལྷང་ [111.1] པར་དུ་
དོར་སྟོན་ནམ་མཁའ་དཔལ་བས་²¹⁹སྒོ་སྒྲིང་ཉི་མའི་འོད་ཟེར་ཞེས་བྱ་བ་མཚོག་དུ་ཟབ་པ་ཞིག་མཛད་སྟངས་དོ། །

[*127] མན་ངག་ཐུན་བརྒྱད་མ་དང་བྱང་རྒྱུ་སེམས་སྒྲིང་།²²⁰

206 [GD] བས་

207 [D] གཉེན་

208 [GD] བ་

209 [D] བའི་

210 [ZGD omit] སྒོ་...རིམ།

211 [Z] འཇར་བ་བས་, [G] འཇར་བ་བས་

212 [G] བས་

213 [ZG] ཚོག་

214 [GD] བའི་

215 [D] རིམས་

216 [Z] པ་

217 [ZG] བསྐྱོམ་

218 [G] བས་

219 [G] བས་

220 [ZGD omit] མན་...སྒྲིང་།

དགོ་བཤེས་སྟོན་པའི་མན་ངག་གུན་ [12b2] བརྒྱད་མ་ནི་ཁམས་²²¹པ་ལུང་པས་རྩལ་དུ་བཏོན་ཏེ་འཚད་པས་ [111.2] ཁམས་²²²པ་ལུང་པའི་²²³སྟོང་སྟོང་གུན་བརྒྱད་མ་ཞེས་གྲགས་སོ། །

གུན་བརྒྱད་ནི་ཟས་ལ་བརྟེན་པའི་སྟོང་སྟོང་དང་། དེ་བཞིན་དུ་དབུགས་ལ་བརྟེན་པ་ [12b3] དང་། ལུས་གཞུང་གི་སྟོང་སྟོང་ལ་
དང་། གཞུག་ལ་བརྟེན་པ་དང་། གཏོར་མ་ལ་བརྟེན་པ་དང་། [111.3] འབྲུང་བ་ལ་བརྟེན་པ་དང་། ལུས་ཡིད་བཞིན་གྱི་ཏོར་བུར་སྦྱལ་ཏེ་སྟོང་
སྟོང་བ་དང་། འཆི་ལ་²²⁴ [12b4] མའི་མན་ངག་སྟེ་དམིགས་གུན་བརྒྱད་དུ་དྲིལ་ནས་སྟོན་པའོ། །

ལ་རག་སྒྲོམ་རྒྱུ་བ་དབང་ལུག་སྟོང་གིས་ཀྱིས་ལ་རག་སྒྲོམ་གསུམ་གྱི་བའི་ཚེས་གསུངས། [111.4] གདམས་པ་དེ་ནི་ཨ་རོ་ནས་སྐྱ་
སྒྲོམ་ལ་བརྒྱད་ [12b5] པའི་སེམས་སྟོགས་ཀྱི་གདམས་པ་དང་། ཇོ་བོའི་གདམས་པ་རྣམ་འབྱོར་པ་²²⁵དང་། དགོན་པ་བ་ལ་²²⁶གསན་པའི་སྟོང་
སྟོང་གི་གདམས་པའི་རྒྱ་བོ་གཉིས་གཅིག་དུ་འདྲེས་པ་སྟེ། བྱང་རྒྱལ་སེམས་ [111.5] སྟོང་ [12b6] ཞེས་མཚན་གསོལ་ཏེ། ཨང་ཡིག་བདུན་
ཅུ་པ་²²⁷ཞེས་པའི་ལམ་རིམ་གྱི་མན་ངག་ཚིགས་བཅད་དུ་བསྐྱེབས་པ་མཛད་དོ། །

གཞན་ཡང་དགོ་བཤེས་སྟོན་པ་ནས་བརྒྱད་པའི་རྟེན་འབྲེལ་སྟོང་པའི་འཕྲིད་ཀྱང་ [13a1] སྟོང་ཇེ་ཆེན་པོ་བསྒྲོམ་²²⁸ [111.6]
རྒྱལ་ཁྱད་པར་དུ་སྟོན་པས་སྟོང་པའི་གདམས་ངག་ཡིན་ལ། ཇོ་བོའི་གཞུང་ལ་བརྟེན་ནས་ཞང་ག་ར་བས་མཛད་ [100] པའི་སེམས་བསྐྱེད་དང་
སྒྲོམ་པའི་ཚོགས་གསལ་ཀྱང་ [13a2] དེ་ཡིན་ནོ། །

[*128] གདམས་ངག་གསུམ་ལས་གསུམ་པ་ལྟ་སྟོང་བྱང་འབྲེལ་དུ་སྟོན་པའི་གདམས་པའི་རྒྱལ་པོ།²²⁹

ལྟ་སྟོང་བྱང་འབྲེལ་དུ་སྟོན་པའི་གདམས་པའི་རྒྱལ་ [112.1] པོ་ནི། རྗེས་བུ་གསུམ་གྱི་ལམ་གྱི་རིམ་པ་ཞེས་གྲགས་པ་སྟེ། གཞུང་ནི་
བྱང་རྒྱལ་ལམ་སྟོན་ཡིན་ལ། ལྟ་བུ་བཤད་པའི་སྟོང་པ་དང་ [13a3] ལྟ་བའི་གཞུང་དང་མན་ངག་སོ་སོ་བ་དེ་དག་ཀྱང་ལམ་རིམ་གྱི་ལ་ཀྱལ་
ཡིན་པས། ལམ་རིམ་གྱི་ཁོངས་²³⁰སུ་དེ་ [112.2] ཐམས་ཅད་འདུ་བ་ཡིན་ལ། ལམ་རིམ་ནི་ཇོ་བོ་ཇེ་ལ་རྒྱ་ཆེན་སྟོང་²³¹བརྒྱད་²³²དང་། ཟབ་མོ་
ལྟ་བརྒྱད་²³³ [13a4] ཀྱི་མན་ངག་གཉིས་མངའ་བ་ལམ་གྱི་ལུས་གཅིག་དུ་དྲིལ་ནས་ཉམས་སུ་ལེན་རྒྱལ་ཆ་ཚང་བའི་གདམས་པ་ཡིན་པས་ལྟ་
སྟོང་བྱང་འབྲེལ་གྱི་ [112.3] གདམས་པ་ཞེས་བཏགས་པའོ། །

[*129] ལམ་རིམ་གྱི་བརྒྱད་པ།²³⁴

221 [ZG] ཁམས་
222 [ZG] ཁམས་
223 [G] བའི་
224 [D] བ་
225 [D] བ་
226 [D] ལས་
227 [GD] བ་
228 [Z] བསྒྲོམས་
229 [ZGD omit] གདམས་...པོ།
230 [D] ལུངས་
231 [D] སྟོང་
232 [GD] རྒྱད་
233 [GD] རྒྱད་
234 [ZGD omit] ལམ་...པ།

དེ་ལྟ་བུའི་ལམ་རིམ་གྱི་ [13a5] གདམས་པ་ནི་ཇོ་བོས་འབྲོམ་ལ་ལྷོག་ཏུ་འབྲིང་པར་མཛད་དེ། ངས་ཁྱོད་མིན་པ་²³⁵གཞན་ལ་
གཏོད་མ་མ་རྙེད་²³⁶ཅེས་གསུངས་ནས། མན་ངག་འདི་དགོ་བཤེས་སྟོན་པ་ལ་གཏད་དེ་ཁོང་ [112.4] བསྟན་པའི་བདག་ [13a6] བོར་བྱིན་
གྱིས་བསྐྱབས་པས། འབྲོམ་འཕྲིན་ལས་གྱི་ཁྱབ་གདལ་ཆེ་བ་ཡང་དེས་ཡིན་ཞེས་གསུངས། གཞན་ཡང་ནག་ཚོ་ལ་གནང་བས། དེའི་སློབ་མ་ལག་
སོར་བ་ལས་བརྒྱད་པའི་ལམ་རིམ་གྱི་ཡིག་ [13b1] ཆའང་ [112.5] ཡོད་ལ། དགོ་བཤེས་གསང་སྤྱོད་ལ་གནང་བ་ལྷགས་སྤུས་ཕྱིན་
²³⁷ལས་པའམ་²³⁸གོ་ལུང་པས་²³⁹མཛད་པའི་བསྟན་རིམ་ཆེ་ཆུང་ཡིན་ནོ། །

ཇོ་བོ་ལབ་སྤུས་ནས་དགོ་བཤེས་དགོན་པ་བ། དེ་ནས་སྟེ་ཏུ་ [13b2] ཟུར་པ་²⁴⁰སོགས་ལ་རིམ་གྱིས་བརྒྱད་པ་ [112.6] དང་།
འབྲོམ་རིན་པོ་ཆེ་ནས་དགོ་བཤེས་སྟུན་སྲ་བ། དེ་ནས་བྱ་ལྟལ་བ་སོགས་ལ་བརྒྱད་པ་ལ་བཀའ་གདམས་གདམས་²⁴¹ངག་པ་ [101] ནས་
བརྒྱད་པ་ཞེས་གྲགས་ཤིང་། [13b3] འབྲོམ་རིན་པོ་ཆེ་ནས་དགོ་བཤེས་པོ་²⁴²ཏྟོ་བ་དང་། དེ་ནས་ [113.1] ཤར་བ་སོགས་ལ་བརྒྱད་པ་ལ་
བཀའ་གདམས་གཞུང་པ་²⁴³ཞེས་པའི་བླ་སྤྱོད་མཛད་དོ། །

གཉིས་ཀའང་དོན་ལ་འདྲ་ཡང་གཞུང་བཤད་གྱི་སྟོན་ [13b4] པ་རྒྱ་ཆེ་བ་བྱེད་མི་བྱེད་གྱི་སྟོན་སོ་སོར་བཟང་བ་ཙམ་མོ། །
[113.2]

ལམ་གྱི་སྟེ་འབྲིང་ཚུལ་ལ་མི་མཐུན་པ་མང་ཡང་གནད་གཅིག་པར་གསུངས་ལ། ཇི་སྲིད་མས་²⁴⁴བེའུ་བུམ་སྟོན་པོ་ལས།

མན་ངག་ [13b5] ཐམས་ཅད་བསྐྱས་པའི་མགོ་ནི། །

བཤེས་གཉེན་དམ་པ་མི་གཏོང་²⁴⁵བ་ཡིན། །

ཞེས་པ་ཁུངས་སུ་མཛད་ [113.3] ནས་བཤེས་གཉེན་བསྟེན་ཚུལ་ནས་འབྲིང་པར་མཛད་དོ། །

བཀའ་གདམས་པ་རྣམས་ཀྱིས་མཛད་ [13b6] པའི་ལམ་རིམ་གྱི་གཞུང་མང་དུ་སྤང་ཡང་གྲགས་ཆེ་བ་ནི་བེའུ་བུམ་སྟོན་པོ་དང་།
དཔེ་ཚོས་གཉིས་ཏེ། སྲ་མ་ནི་དགོ་བཤེས་པོ་²⁴⁶ཏྟོ་བའི་ [113.4] གསུང་སྟོན་དོལ་པ་²⁴⁷ཤེས་རབ་རྒྱ་མཚོས་བསྐྱིགས་པ་ལ་ལྟ་ [14a1] འབྲི་
སྤང་པས་²⁴⁸འབྲེལ་པ་²⁴⁹མཛད་པ་ཡིན་ལ། ཇི་ལྟར་ཞུས། དགོ་བཤེས་ཡིན་ན་བེའུ་བུམ་སྟོན་པོ་ལ་ལྟ་དགོས་ཞེས་བཞགས་པ་མཛད་ཅིང་།
ལམ་རིམ་དུ་ཁུངས་ཀྱང་མང་དུ་ [113.5] དངས་ [14a2] སྤང་དོ། །དཔེ་ཚོས་ལ་ནི་གསུམ་བྱུང་སྟེ། ཐོག་མར་གལ་པས་བསྐྱིགས་པ་ནི་
བསྐྱས་པ་དང་། བྲག་དཀར་བས་དེ་གཞིར་མཛད་ནས་ཁོང་རང་ཉིད་ཀྱིས་དགོ་བཤེས་ལ་གསན་པའི་དཔེ་ཡང་ [14a3] མང་དུ་བསྟན་ཏེ་
བསྐྱིགས་པ་ནི་རྒྱས་ [113.6] པ་དང་། ལྷེ་སྟོན་ཇོང་པས་²⁵⁰སྲ་མ་གཉིས་ལས་གོ་བདེ་བའི་འབྲིང་པོ་²⁵¹ཞེག་མཛད་དེ། དེ་ལ་ནི་དཔེ་ཚོས་རིན་
ཆེན་སྤངས་པ་ཞེས་བྱའོ། །

235 [ZG omit] པ་
236 [D] བརྙེད་
237 [G] ཐིན་, [D] འཕྲིན་
238 [G] བའམ་
239 [G] བས་, [D] པའི་
240 [GD] བ་
241 [D] མན་
242 [G] བོ་
243 [GD] བ་
244 [D] མའི་
245 [ZG] བཏང་
246 [G] བོ་
247 [GD] བ་
248 [GD] བས་
249 [D] བ་
250 [GD] བས་
251 [D] བོ་

[*130] བཀའ་གདམས་པ་ཚོས་བུ་ཚོས་ཀྱི་ལྷ་དང་པར།²⁵²

གོང་དུ་གཞུང་དང་། [14a4] གདམས་ངག་དང་། ཡང་ན་མན་ངག་སྟེ་གསུམ་དུ་ [102] རྱེད་ཅེས་པའི་ [114.1] མན་ངག་ནི།
སྦྱར་²⁵³གདམས་ངག་དང་མན་ངག་མི་འགལ་ཡང་གསུམ་དུ་བྱེད་པའི་མན་ངག་ནི། ཇོ་བོ་ཡལ་སྲས་ཀྱི་གསང་། [14a5] ཚོས་བཀའ་གདམས་
སྟེ་གས་བམ་དུ་གྲགས་པ་སྟེ། མན་ངག་དེ་ནི་ཇོ་བོ་ཚེན་པོས་²⁵⁴ཡེར་པ་²⁵⁵ལྷ་རི་སྦྱང་པའི་²⁵⁶མགུལ་དུ་ལུ་ [114.2] ཇོ་བོ་འབྲོམ་གསུམ་ལ་
གནང་བ་སྟེ། པ་སྟོན་པ་རིན་པོ་ཆེས་ལུས་པ་ [14a6] ལ་པ་ཚོས་དང་། བུ་ཇོ་བོ་ལེགས་པའི་ཤེས་རབ་དང་ལུ་སྟོན་བཙུན་འགྲུས་གཡུང་དུང་
གཉིས་ཀྱིས་ལུས་པ་ལ་བུ་ཚོས་སུ་གྲགས།

ལུ་སྟོན་དང་པོ་སྟོན་པ་རིན་པོ་ཆེ་ལ་མི་མོས་ [114.3] པའི་རྒྱལ་བསྟན་ [14b1] ལྷ་དང་། འདི་དུས་ལུ་ཚེན་པོས་ང་རྒྱལ་གྱི་རི་བསྟེན་
ཏེ་²⁵⁷སྟོན་པ་རིན་པོ་ཆེའི་ཞབས་ལ་གཏུགས་པ་སྟེ། སྟེ་གས་བམ་གྱི་ལུ་དང་དག་སྤང་འབྲེལ་བའི་ཚོམས་²⁵⁸ན་གསལ་ལོ། །

[*131] གསང་ཚོས་བཀའ་གདམས་སྟེ་གས་བམ་གྱི་བརྒྱུད་པ།²⁵⁹

འདིའི་མན་ངག་ [14b2] རྣམས་ཇོ་བོ་སྤྲུང་ན་ལས་འདའ་ [114.4] ལར་དགོ་བཤེས་སྟོན་པ་ལ། གཙོ་བོར་སྦྱལ་བའི་སྦྱ་མཚེད་
གསུམ་པོ་ལ། གཞུང་དང་མན་ངག་གསུམ་བྱེན་ལ། ཞེས་ཞལ་ཚེམས་བྱོན་པའི་མན་ངག་དེ་ [14b3] ཡིན་ཅིང་། སྦྱ་མཚེད་གསུམ་ལས་ཕུ་རྒྱུང་
བ་ལ་ཡོངས་སུ་ཇོ་གས་པ་དང་། [114.5] གཞན་གཉིས་ལ་པལ་ཆེ་བ་དང་། ཕྱོགས་ཙམ་མངའ་བ་ཡིན་ཏེ། སློབ་དཔོན་ནམ་རིན་²⁶⁰ཀྱིས།

ཡོངས་སུ་ཇོ་གས་པ་ [14b4] གཞོན་ཏུ་རྒྱལ་མཚན་ཡིན། །
པལ་ཆེར་འཛིན་པ་རྒྱལ་ཞེས་ལབར་དུ་གདའ། །
ཕྱོགས་ཙམ་གསལ་བ་རིན་ཆེན་གསལ་ [114.6] བ་ཡིན། །
དེང་སང་དུས་ན་ཁོ་བོ་ཉིད་དུ་ཟད། །

ཅེས་གསུངས།

ཕུ་རྒྱུང་ [14b5] བ་ལ་ཇི་ལྟར་བྱོན་པ་ནི། ཇོ་བོ་ལེགས་ཤེས་ཀྱིས་མངའ་རིས་བ་²⁶¹ཤེས་རབ་རྒྱལ་མཚན་དང་། དེས་ཕུ་རྒྱུང་བ་
གཞོན་ཏུ་རྒྱལ་མཚན་ལ་གཏད་ [103] པའོ། །

དེ་ནས་རིམ་གྱིས་ [115.1] འབྲོམ་ཀུ་སྤྲ་མ་ཏིའི་བར་དུ་བྱོན། [14b6] དེ་ཡན་ཆེག་²⁶²བརྒྱུད་ཡིན་པ་ལ་དེ་ཉིད་ཀྱིས་བཀའ་རྒྱ་
བཀོལ་ཏེ་རེ་གཉིས་ལ་སྟེ་ལ། དེ་ནས་རིམ་གྱིས་བརྒྱུད་པ་ལོ་ཚེན་ཕྱགས་ཇི་དཔལ་བ་ལས་རྒྱལ་བ་དགོ་འདུན་གྲུབ་ཀྱིས་ [115.2] གསན་པ་
ནས་དབུས་ [15a1] གཙང་ཐམས་ཅད་དུ་རྒྱ་ཆེར་འཕེལ་ལོ། །

[*132] ཇིས་དུན་ལྔ་དང་ལྷ་ཚོས་བདུན།²⁶³

252 [ZGD omit] བཀའ་...པར།
253 [ZG] སྦྱར་
254 [G] པས་
255 [GD] བ་
256 [G] བའི་
257 [D] ཏོ།
258 [Z] ཚོགས་
259 [ZGD omit] གསང་...པ།
260 [D] རིས་
261 [ZD] བ་
262 [ZG] ཆེག་
263 [ZGD omit] ཇིས་...བདུན།

འདིའི་ཉམས་ལེན་ནི་རྗེས་དྲན་ལྟེ་སྟེ།
 སྐབས་གནས་སྐབས་དྲན་པར་མཛོད་²⁶⁴ །
 ལུས་ནི་ལྟ་ཡི་རང་བཞིན་ཏེ། །
 ངག་ནི་བརྒྱས་བཅོད་རྒྱན་པར་མཛོད། །[15a2]
 འགྲོ་བ་མ་ལུས་པ་མར་ [115.3] མོམས། །
 སེམས་ཀྱི་གནས་ལུགས་སྟོང་པར་²⁶⁵དེའོ་²⁶⁶ །
 ལྟ་བུ་²⁶⁷དེ་ཡི་སྐྱེ་བར་ནས། །
 དགོ་ཚུ་ཐམས་ཅད་དག་པར་²⁶⁸མཛོད། །

ཅེས་པའོ། །

སྟོང་པོར་གྱུར་པ་²⁶⁹ནི་ཐོག་ལེ་བརྟུ་ [15a3] རྟུག་གི་ཉམས་ལེན་ཡིན་ལ། ཉམས་སྐྱེ་སྐྱེ་བའི་ཡོན་ཏན་ནི། འདུལ་བ་ནས་
 [115.4] རྗེས་ཐོག་པའི་²⁷⁰བར་སྐྱར་ཐོག་གཅིག་ཏུ་ཉམས་སྐྱེ་ལེན་པ་ལ་མཁས་པ་²⁷¹། ལྟ་བ་མཐོ་ལ་སྟོང་པ་ཞིབ་པ་ཞིག་འབྱུང་ [15a4]
 གསུངས་²⁷²། ལྟ་ནི་བཞི་སྟེ། ལུབ་པ། སྐྱེ་རས་གཟིགས། སྐྱོལ་མ། མི་གཡོ་བའོ། །
 ཚོས་ནི་སྟོང་གསུམ་སྟེ། དེ་ནམས་ [115.5] ལ་ལྟ་ཚོས་བདུན་ལྟ་ཞེས་བུའོ། །

[*133] བཀའ་གདམས་པའི་སྐབས་ཀྱི་མན་ངག་²⁷³

བཀའ་གདམས་པ་ལ་སྐབས་ཀྱི་ [15a5] གདམས་པ་མེད་དམ་སྐྱམ་ན། བཤད་མ་ཐག་པའི་²⁷⁴ཐོག་ལེ་བརྟུ་རྟུག་གི་མན་ངག་ཀྱང་
 མདོ་སྐབས་བྱང་འབྲེལ་ཡིན་ལ། གཞན་ཡང་ལུབ་པ་²⁷⁵དམ་ཚིག་གསུམ་བཀོད་ [115.6] དང་། མི་གཡོ་བའི་སྐོར་དང་། [15a6] འཕགས་
 པ་སྐྱེ་རས་གཟིགས་ལ་བརྟེན་པའི་སྟོང་བར་གནས་པ་སོགས་བཀའ་གདམས་པ་²⁷⁶ལ་དར་རྒྱས་ཆེ་ཞིང་། རྗེས་ཐོག་མན་ངག་ཐོར་བུ་པ་²⁷⁷
 [104] མང་པོ་²⁷⁸ཞིག་མཚིམས་²⁷⁹ཀྱིས་ཕྱོགས་གཅིག་ཏུ་ [116.1] བསྐྱེས་ [15b1] པ་སྐྱར་ཐང་བརྟུ་²⁸⁰རྩེ་གཟགས་པ་དང་། རྗེས་ཐོག་
 དགོ་བཤེས་ལག་སོར་བ་ལ་གནང་བའི་སྐྱེ་རས་གཟིགས་ཀྱི་གདམས་པ་དང་། གཞན་ཡང་ལྟ་བཞིན་ལྷིང་སོགས་བཀའ་གདམས་པའི་སྐབས་ཀྱི་
 མན་ [15b2] ངག་མང་པོའི་རྒྱན་དེང་སང་གི་བར་དུ་ [116.2] བཞུགས་སོ། །

264 [G] མཛོད་
 265 [G] བར་
 266 [D] དཔྱད་
 267 [G] ལོ་
 268 [G] བར་
 269 [G] བ་
 270 [G] བའི་
 271 [G] བ་
 272 [D] གསུང་
 273 [ZGD omit] བཀའ་...ངག་
 274 [G] བའི་
 275 [G] བ་
 276 [ZG] མོགས་ [instead of] བ་
 277 [D] བ་
 278 [G] ལོ་
 279 [ZG] འཚིམས་
 280 [D] བརྟུ་
 281 [Z] རྗེ་

རྩོམ་བོད་དུ་མ་བྱོན་གོང་དུ་ཐུགས་ལ་བསྐྱད་པའི་རྩིང་ཚོས་ཆེར་དར་བར་²⁸²ཉམས་སྐྱད་པའི་²⁸³ཆེད་དུ་རྩོམ་བོད་དུ་གསུངས་
 པར་བཞེད་པ་²⁸⁴ཡང་འབྲོམ་ [15b3] གྱིས་བོད་དུ་འདི་མི་འཚམ་²⁸⁵ཞེས་བཀའ་པའི་²⁸⁶ཚུལ་སོགས་བཀའ་གདམས་གོང་མ་ [116.3]
 རྣམས་གསང་ཐུགས་སྤྱི་དང་ཁྱད་པར་སྒྲ་མེད་ལ་ཤིན་དུ་དམ་དོག་²⁸⁷ཆེ་བ་མཛད་ཅུང་། དངོས་ཚད་ལ། རྩོམ་རིན་པོ་
 ཆེ་ལ་རྒྱད་ཟེ་བཞིའི་མན་ངག་ཐམས་ཅད་དང་། ཁྱད་པར་དུ་པ་རྒྱད་གསང་བ་འདུས་པ། མ་རྒྱད་འཁོར་ལོ་བདེ་ [116.4] མཚོག་སྒྲ་མེད་
 སྤྱིའི་མན་ངག་མཐར་ཐུག་པ་གྲུབ་སྟེང་སྟོར་གྱི་མན་ [15b5] ངག་རྣམས་གསང་བའི་ཚུལ་གྱིས་ཡོངས་སུ་རྩོགས་པ་གཞང་བས་འབྲོམ་རྗེ་མདོ་
 ཐུགས་ཡོངས་རྩོགས་གྱི་བསྐྱར་པའི་བདག་པོར་གྱུར་པ་ཡིན་ལ། རྒྱ་མཚན་དེ་བས་ན་²⁸⁸གསང་ [116.5] ཐུགས་ཁྲོམ་བསྐྱགས་ [15b6] ལུ་
 མི་མཛད་པ་མ་གཏོགས་བཀའ་གདམས་པ་ལ་གསང་ཐུགས་ཀྱི་གདམས་པ་མེད་པ་ནི་མ་ཡིན་ཏེ། མོ་སོའི་རྣམ་ཐར་ལ་ཞིབ་དུ་བཞུས་པས་ཤེས་
 པར་སྣང་ངོ་། །

དེར་མ་ཟད་ཚོས་གྱི་གཙོ་བོར་²⁸⁹བྱང་ [16a1] ལྷབ་ལམ་ [116.6] སློན་གྱི་ཉམས་ལེན་ལ་ཡང་²⁹⁰གསང་ཐུགས་ཡོད་དགོས་ཏེ།
 དེ་མེད་ན་བསྐྱར་པ་ཡོངས་རྩོགས་ཀྱི་ཉམས་ [105] ལེན་དུ་མི་འགྱུར་བའི་ཕྱིར་དང་། ལམ་སློན་རང་གི་ཚིག་ལ་ཡང་²⁹¹ [16a2] དངོས་སུ་
 ཐོན་པའི་ཕྱིར་དང་། ལམ་རིམ་ཆེན་མོ་ལས་ཀྱང་ [117.1] ལམ་སློན་གྱི་ཁྱད་ཚོས་ལ། མདོ་ཐུགས་གཉིས་ཀའི་གནད་བསུས་ནས་སློན་པས་
 བཞེད་བྱ་ཡོངས་སུ་རྩོགས་པ་དང་། ཞེས་གསུངས་ [16a3] བས་ཤེས་པར་སྣང་བས་སོ། །

292[*134] བཀའ་གདམས་ཀྱི་སྐྱེས་བུ་དམ་པ་རིམ་བྱོན་གྱི་མཛད་སྟོད་སྤྱིའི་ཕྱོམ།²⁹³

གཉིས་པ་²⁹⁴བཀའ་གདམས་ཀྱི་སྐྱེས་བུ་དམ་པ་རིམ་ [117.2] པར་བྱོན་པ་རྣམས་ཀྱི་མཛད་སྟོད་²⁹⁵སྤྱིའི་ཕྱོམ་ནི། ཚོས་འབྲུང་གསལ་
 པའི་སློན་མེ་ལས། གང་ཟག་ཡུན་སུམ་ཚོགས་ [16a4] པ་ནི། དག་བཤེས་སློན་པ་ནས་ཉེ་²⁹⁶བར་བརྒྱད་དེ་མི་བརྒྱད་བཟང་ཞིང་བརྟན་ལ།
 སློམས་ཤིང་དུའལ་²⁹⁷ཆེ་བའི་ངང་ནས་གྲུབ་ [117.3] མཐའ་དང་རྣམ་ཐར་གཞན་དང་མི་མཐུན་པ་མེད་ལ་མ་འདྲེས་པ་དང་། [16a5]
 བེམས་ཅན་སུ་དང་ཡང་བསྐྱེ་བསྐྱེད་²⁹⁸རྒྱུ་ལ་ཐམས་ཅད་ལ་ཕན་སེམས་ཆེ་བ་དང་། མས་འཛོག་གིས་སློབ་ལ་ལྟ་བུ་མཐོ་བ་དང་། ལུག་ན་སྐད་
 ངན་མི་འདོན་ཞིང་སྤྱིད་ན་ [117.4] སྤྱོད་ཤས་ཆེ་བ་དང་། སྟོ [16a6] སྟོང་ཐམས་ཅད་མངོན་ཚན་རྒྱུ་ལ་དོན་གྱི་སྟོན་ཆེ་བ་དང་། ངན་
 དོན་གྱིས་འཚོ་བ་བཟང་རྒྱལ་སྟོད་ཀྱང་མི་གཡོང་བ་དང་། ལོ་གསལ་ལ་གཏིང་མི་རྟོགས་པ་²⁹⁹དང་། འགྲོགས་བདེ་ལ་མིག་སུས་ཀྱང་ [16b1]

282 [ZG] བ་
 283 [G] བའི་
 284 [G] བ་
 285 [D] འཚམས་
 286 [G] བའི་
 287 [ZG] དོགས་
 288 [G] བས་ན་
 289 [ZG] བོ་
 290 [D] ལའང་
 291 [D] ལའང་
 292 [D insert] །
 293 [ZG omit] བཀའ་...ཕྱོམ།
 294 [D omit] གཉིས་པ་
 295 [G] སྟོད་
 296 [D] ཉ་
 297 [ZG] དུའལ་
 298 [D] སྐྱེད་
 299 [G] བ་

མི་ཁེངས་པ་དང་། [117.5] བཀྲར་བར་ཡང་ཞིང་ལྷིང་³⁰⁰ཆེ་བ་དང་། ལྷན་ངག་ཤས་རྒྱུང་ལ་ཚོས་སྐད་ལ་བརྟེན་པ་དང་། བརྒྱལ་ལྷན་དང་
 ཟེར་སྐྱོས་ཉུང་ལ་དོན་གཏན་ལ་སེབས་པ་དང་། གཤགས་རལ་དང་བུར་བ [16b2] ཉུང་ལ་དོན་ན་བར་སྐྱེལ་³⁰¹མཁམས་པ་དང་། གཞུང་
 ལུགས་ [117.6] བསམས་ཅད་མ་འདྲེས་ལ་འགལ་བ་མེད་ [106] པར་སྟོན་པ་དང་། མན་ངག་གི་རྒྱབ་རྟེན་³⁰²ལྷོད་ལ་བྱེད་ཅིང་མན་ངག་
 ལ་སྤྱིད་³⁰³ལམ་རྣམས་བཞེས་སེམས་པ་དང་། [16b3] ཚོས་དང་གང་ཟག་ལ་ཉེས་པ་མི་བརྟོད་ཅིང་སྤྲིག་གོགས་ལ་མི་ཉན་པ་དང་། རིག་པ་
 [118.1] དང་མན་ངག་གི་རྣམས་གངས་མང་པོ་མི་སྐྱོས་³⁰⁴ཤིང་ཤེས་བྱ་བསམས་ཅད་ལ་བྱུང་ཆེ་བ་དང་། ལྷེ་དགོན་ལ་ཕྱོགས་རིས་མི་ [16b4]
 བྱེད་ཅིང་དད་ལྡན་ལ་དབྱེས་པ་དང་། ལྷ་མ་སངས་རྒྱལ་སྤེལ་ཤིང་གོགས་ལ་དག་སྣང་ཆེ་བ་དང་། ཚེ་རེག་དང་དམ་དོག་ཆེ་ [118.2] ཡང་
 འཛིན་ཆགས་རྒྱུང་བ་དང་། རྟག་ཏུ་དབྱེད་³⁰⁵བདར་བྱེད་ཅིང་ཕྱི་³⁰⁶རྗེས་སྤེལ་བཏུ་བ་དང་། [16b5] དམན་ས་བཟུང་ནས་བསྟན་པ་མཐའ་དག་
 གི་བདག་པོ་མཛད་པ་དང་། འཇིག་རྟེན་གྱི་བྱ་བ་ངན་པ་སྤངས་ནས་ལྷོད་ལ་རྗེས་པར་སྐྱོབ་པའི་སྐྱེས་བུ་ཆེན་པོ་ [118.3] ལྷར་རི་སྐྱེད་
 བསྟན་པ་རྣམས་སོ། །

རྣམས་པར་ཐར་པ་དེ་ [16b6] དག་དང་ལྡན་པ་ལ་ཇོ་པོ་བཀའ་གདམས་པ་ཞེས་ཀྱང་བྱ། ལྷ་ཚོས་བདུན་ལྡན་ཞེས་ཀྱང་བྱ། དྲང་སྤོང་
 ཆེན་པོའི་བཀའ་བརྒྱུད་ཅེས་ཀྱང་བྱ། དེ་ལྷ་བུའི་མཛད་སྤྱོད་ཀྱི་རྗེས་སྤེལ་འབྲང་ཞིང་ [118.4] ལྷིང་ཐག་པ་ནས་ལུས་ [17a1] པ་ལྷུར་ལེན་
 པར་བྱུལ། ། ཞེས་གསུངས་པ་འདི་དག་ལ་ཞིབ་ཏུ་བསམས་ན་རེ་རེ་ལ་ཡང་³⁰⁷གོ་རྒྱུ་ཆེན་པོ་རེ་ཡོད་པ་³⁰⁸འདུག་གོ། །

པོ་³⁰⁹ཏོ་བ་ལ་བསྐྱས་ཀྱི་མཛད་སྤྱོད་ཀྱི་སྐོམ་ཚིག་རྣམས་ཐར་མཛོས་པའི་པར་སྐྱོམ་ [17a2] འབྲུང་བ་ [118.5] ཡང་། བཀའ་
 གདམས་པ་ཐུན་མོང་གི་མཛད་སྤྱོད་ཡིན་པས། ཤིན་ཏུ་ངོ་མཚར་བ་མཆིས་ཀྱང་འདིར་མང་³¹⁰དོགས་ནས་མ་བཀོད་པས་ཚོས་འབྲུང་གསལ་སྟོན་
 རོགས་ལས་ཤེས་པར་བཞུགས་ [17a3] ཏེ་དད་པ་བསྐྱོམ་ཞིང་སྟོན་པའི་གནས་ [118.6] ལྷ་བྱུལ། །

རང་དོན་ཡིད་བྱེད་སྐྱོས་³¹¹པས་³¹²དབེན་གནས་སུ། །
 ངོ་ཚ་ཁེལ་ཡོད་ཀྱི་ཤིའི་ [107] གོས་ཀླུ་བས་ཏེ། །
 བག་ཡོད་ཀྱི་རྩ་སྤེལ་³¹³པགས་³¹⁴པའི་སྤྲེང་། །
 དྲན་དང་ཤེས་ [17a4] བཞེན་བརྟན་པོའི་དཀྱིལ་ཀྱང་³¹⁵བཅས། །
 གུལ་ན་རེན་ཆེན་རྣམ་ [119.1] གསུམ་ཐོར་ཅོག་བཅིངས། །
 ལུས་ལ་ལྷ་བཞེའི་ཚངས་སྐད་དཀར་པོ་འཆང་། །
 དག་ནས་ལྷོད་གསུམ་གྱི་གསང་ཚིག་འདོན། །

300 [D] ལྷིང་
 301 [Z] བསྐྱེལ་
 302 [ZD] བརྟེན་
 303 [D] ལྷོད་
 304 [ZG] བསྐྱོས་
 305 [ZG] བཅད་
 306 [D] ཕྱིར་
 307 [D] ལ་ཡང་
 308 [D] པར་
 309 [G] པོ་
 310 [ZG] མངས་
 311 [G] སྐྱོས་
 312 [D] པ་
 313 [ZG] ས་ལེའི་
 314 [GD] བགས་
 315 [G] ཀྱངས་

སེམས་ཀྱི་ [17a5] རིལ་བ་བསྐྱབ་གསུམ་བདུད་རྩིས་གདམས། །
 ཀུན་རྗེ་བ་བྱང་རྩུབ་སེམས་ [119.2] ཀྱི་ཐབ་ཁུང་དུ། །
 རོན་དམ་བྱང་སེམས་བྱིན་ཟ་འབར་བ་ལ། །
 རང་ཉིད་གཅེས་པར་འཛིན་པའི་ཡམ་གིང་དང་། །
 འཇིག་ལྷའི་མར་ [17a6] ལྷ་བསྐྱེག་³¹⁶པའི་མཚོད་རྒྱུན་བཙོན། །
 ཕྱི་གཙང་ནང་གཙང་པད་མའི་³¹⁷སྐབས་³¹⁸འདྲ་བ། །
 བཀའ་གདམས་བྱང་སྤོང་ [119.3] ཚོགས་ཀྱི་རྣམ་པར་ཐར། །
 ཐོས་པས་ཡིད་རབ་འཕྲོག་འདི་སྤོང་བ་ཡི། །
 བདག་གི་ལྷེ་ [17b1] ཡང་སྐལ་བ་བཟང་སྐྱམ་སེམས། །
 ལྷུབ་མཐའ་ཀུན་དང་མཉེས་གཤིན་པས། །
 ཆགས་སྤང་རྩོད་པ་ཡོངས་བྲལ་བར། །
 གཙུག་གི་རྒྱན་དུ་འཛིན་ [119.4] བྱེད་པ། །
 དེ་ཡི་བྱང་བ་མདོ་ཙམ་སྐྱེས། །

ལྷུབ་ [17b2] མཐའ་ཐམས་ཅད་ཀྱི་ཁུངས་དང་འདོད་རྩུལ་སྣོན་པ་ལེགས་བཤད་ཤེལ་གྱི་མེ་ལོང་ལས། བཀའ་གདམས་པའི་ལྷུབ་
 མཐའ་བྱང་རྩུལ་བཤད་བློ་ཉོ། །

པར་འདི་མདོ་སྤྲོད་ [17b3] དགོན་ལུང་ཚོས་གྲུ་ཆེའི། །
 ལུའུ་བཀུན་སྒྲ་བྱང་བཀྱ་ཤིས་འོད་འབར་ནས། །
 རྒྱུན་རྒྱར་བསྐྱེད་པའི་རབ་དཀར་དགེ་བའི་³¹⁹མཐུས། །
 རྒྱལ་བསྐྱེད་སྤྱིང་པོ་³²⁰ཕྱོགས་བརྒྱར་རྒྱས་ལྱུར་ཅིག། །³²¹

316 [ZG] བསྐྱེགས་
 317 [ZG] བསྐྱེད་
 318 [G] ལྷུབས་
 319 [G] པའི་
 320 [G] པོ་
 321 [G insert] པར་འདི་...ལྱུར་ཅིག། །

略号と文献一覧

チベット語文献

[]内は本文訳註において使用した略語を示し、()内の和訳は本文中で使用した名称を示す。

1) カンギュル bKa' 'gyur

sNying rje padma dkar po'i mdo (*Mahākaruṇāpuṇḍarīkanāmamahāyānasūtra*). P.779. mdo sna tshogs, cu. ff.63a1-149a5. 『西藏大蔵経』29、鈴木学術財団、東京、1965。(『大悲白蓮華経』)

2) テンギュル bsTan 'gyur

Dīpaṃkaraśrījñāna / Atiśa (982-1054)

[Lam sgron] *Byang chub lam gyi sgron ma*. P. 5378. dbu ma, gi ff.1a1-5b5. 『西藏大蔵経』103、鈴木学術財団、東京、1965。(『ラムドゥン (菩提道灯論)』)

Śāntideva (c. 650-700)

[sPyod 'jug] *Byang chub sems dpa'i spyod pa la 'jug pa*. P.5272. dbu ma, la ff.1a1-45a7. 『西藏大蔵経』99、鈴木学術財団、東京、1965。(『入菩提行論』)

3) チベット撰述文献

Khyi thang pa ye shes dpal

[Rin chen bzang po'i nram thar] *Byang chub sems dpa' Lo tstsha ba Rin chen bzang po'i 'khrungs rabs dka' spyad sgron ma nram thar shel gyi phreng ba lu gu rgyud*. In: rDo rje tshe brtan (ed.), *Collected Biographical material about Lo chen Rin chen bzang po and his Subsequent Reembodiments : A Reproduction of a Collection of Manuscripts from the Library of dKyiil Monastery in Spiti*. No.3. Delhi 1977.

Gu ge mkhan chen ngag dbang grags pa (15c.)

mNga' ris rgyal rabs. In: R. Vitali. *The Kingdom of Gu ge Pu hrang : According to mNga' ris rgyal rabs by Gu ge mkhan chen Ngag dbang grags pa*. Indraprastha Press. New Delhi 1966, pp.1-85。(『ガリ王統紀』)

'Gos lo tsā ba gzhon nu dpal (1392-1481)

[Deb ther sngon po] *The Blue Annals*. Śata-Piṭaka Series 212. International Academy of Indian Culture. New Delhi 1974. (『テプテルゴンポ』)

Glang ri thang pa rdo rje seng ge (1054-1123)

[Blo sbyong tshig brgyad ma] In: Cha ris skal bzang thogs med, Ngag dbang sbyin pa (eds.), *Blo sbyong nyer mkho phyogs bsgrigs*. Kan su'u mi rigs dpe skrun khang. Lanzhou 2003, pp.160-161. (『ロジョン・チクゲーマ (修心八句)』)

Gro lung pa blo gros 'byungs gnas (b.11c.)

[Blo ldan shes rab kyi rnam thar] *Jig rten mig gcig blo ldan shes rab kyi rnam thar*. In: Dram dul (ed.), *Biography of Blo ldan shes rab : The Unique Eye of the World by Gro lung pa blo gros 'byung gnas. The Xylograph Compared with a Bhutanese Manuscript*. Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde Heft 61. Wien 2004.

ICan skya rol ba'i rdo rje (1717-1786)

[ICan skya grub mtha'] *Grub mtha' thub bstan lhun bo'i mdzes rgyan*. Krung go'i bod kyi shes rig dpe skrun khang. Beijing 1989.

bCom ldan rig pa'i ral gri (1228-1305)

bsTan pa rgyas pa rgyan gyi nyi 'od. In: K.R.Schaeffer, L.W.van der Kuijp (eds.), *An Early Tibetan Survey of Buddhist Literature : The Bstan pa rgyan gyi nyi 'od of Bcom ldan ral gri*. Harvard University Press. Cambridge 2009.

mChims gnam mkha' grags (1210-1267/1285)

[rNam thar rgyas pa] *Jo bo rje dpal ldan mar me mdzad ye shes kyi rnam thar rgyas pa*. In: H. Eimer, *Materialien zu einer Biographie des Atīśa (Dīpaṃkaraśrījñāna) 2 Teil : Textmaterialien*. Asiatische Forschungen 67. Otto Harrassowitz. Wiesbaden 1979. (『ナムタルゲーワ』)

Thu'u bkwan blo bzang chos kyi nyi ma (1737-1802)

[G] *Grub mtha' thams cad kyi khungs dang 'dod tshul ston pa legs bshad shel gyi me long*. dGon klung ed., Tokyo Univ. no.107. (『一切宗義』)

Dīpaṃkaraśrījñāna / Atīśa (982-1054)

[bKa' gdams bu chos] *'Brom ston rgyal ba'i 'byung gnas kyi skyes rabs bka' gdams bu chos*. mTsho

sngon mi rigs dpe skrun khang. Zi ling 1994. (『カダム父法』)

Dol pa shes rab rgyal mtshan (1292-1361)

[Be'u bum sngon po] *Be'u bum sngon po'i rtsa ba*. In: mGon po dar rgyas (ed.), *bKa' gdams be'u bum sngon po'i rtsa 'grel*. Gangs can rig brgya'i sgo 'byed lde mig 16. Mi rigs dpe skrun khang. Beijing 1991, pp.1-46. (『ベウブム・ゴンポ』)

sDe srid sangs rgyas rgya mtsho (1653-1705)

[Bai dūrya ser po] *dPal mnyam med ri bo dga' ldan pa'i bstan pa zhwa ser cod pan 'chang ba'i ring lugs chos thams cad kyi rtsa ba gsal bar byed pa bai durya ser po'i me long*. Krong go bod kyi shes rig dpe skrun khang. Xining 1989. (『ヴァイドウリヤセルポ』)

Paṅ chen bsod nams grags pa (1478-1554)

bKa' gdams gsar rnying gi chos 'byung yid kyi mdzes rgyan. In: Gonpo Tseten (ed.), *Two Histories of the bKa' gdams pa Tradition from the Library of Burmik Athing*. Gantok 1977. pp.1-206.

dPa' bo gtsug lag phreng ba (1504-1566).

[mKhas pa'i dga' ston] *Dam pa'i chos kyi 'khor lo bsgyur ba rnams kyi byung ba gsal bar byed pa mkhas pa'i dga' ston*. Mi rigs dpe skrun khang. Beijing 2006. (『ケーペーガートン』)

Bu ston rin chen grub (1290-1364)

[Bu ston chos 'byung] *Chos kyi 'byung gnas gsung rab rin po che'i mdzod*. Krung go bod kyi shes rig dpe skrun khang. Beijing 1988. (『プトン仏教史』)

Tsong kha pa blo bzang grags pa (1357-1419)

[Lam rim chen mo] *mNyam med tsong kha pa chen pos mdzad pa'i byang chub lam rim chen mo*. rDa sa shes rigs par khang. Dharamsala. (『ラムリムチェンモ (菩提道次第大論)』)

Tshal pa kun dga' rdo rje (1309-1364)

[Deb ther dmar po] *Deb ther dmar po rnams kyi dang po hu lan deb ther*. Mi rigs dpe skrun khang. Beijing 1981.

Lo dgon pa bsod nams lha'i dbang po (1423-1496)

[bKa' gdams nying 'od] *bKa' gdams rin po che'i chos 'byung rnam thar nying mor byed pa'i 'od stong*. In: Gonpo Tseten (ed.), *Two Histories of the bKa' gdams pa Tradition from the Library of Burmik Athing*. Gantok 1977, pp.207-393.

[dPe chos rin chen spungs pa'i gsal byed] *dPe chos rin chen spungs pa'i gsal byed rin po che'i sgron me'am gtam rgyud rin chen phreng mdzes su grags pa*. In: mGon po dar rgyas (ed.), *dPe chos dang dpe chos rin chen spungs pa*. Gangs can rig brgya'i sgo 'byed lde mig 17. Mi rigs dpe skrun khang. Beijing 1991, pp.355-501.

Las chen kun dga' rgyal mtshan (1432-1506)

[gSal ba'i sgron me] *bKa' gdams kyi rnam par thar pa bka' gdams chos 'byung gsal ba'i sgron me*. Toh. 7038. (『カダム明灯史』)

Ye shes don grub bstan pa'i rgyal mtshan (1792-1885) (ed.)

Legs par bshad pa bka' gdams rin po che'i gsung gi gces btus nor bu'i bang mdzod. mTsho sngon mi rigs dpe skrun khang. Zi ling 1995.

Yongs 'dzin ye shes rgyal mtshan (1717-1793)

[Lam rim brgyud pa] *Lam rim bla ma brgyud pa'i rnam thar*. Bod ljongs mi dmang dpe skrun khang. Lhasa 1990.

A kya yongs 'dzin dbyangs can dga' ba'i blo gros (1740-1827)

[dPe chos brda bkrol don] *dPe chos rin chen spungs pa'i brda bkrol don gnyer yid kyi dga' ston*. In: mGon po dar rgyas (ed.), *dPe chos dang dpe chos rin chen spungs pa*. Gangs can rig brgya'i sgo 'byed lde mig 17. Mi rigs dpe skrun khang. Beijing 1991, pp.502-520.

A khu ching shes rab rgya mtsho (1803-1875)

[MHTL] *dPe rgyun dkon pa 'ga' zhid gi tho yig : Materials for a History of Tibetan Literature*. part 3. Śata-Piṭaka Series 30. International Academy of Indian Culture. New Delhi 1963, pp.503-601. Reprint Rinsen. Kyoto 1981. (『稀観書』)

A myes zhabs ngag dbang kun dga' bsod nams (1597-1662)

[bKa' gdams ngo mtshar rgya mtsho] *dGe ba'i bshes gnyen bka' gdams pa rnam kyi dam pa'i chos 'byung ba'i tshul legs par bshad pa ngo mtshar rgya mtsho*. mTsho sngon mi rigs dpe skrun khang. Xining 1995.

参考文献 (アルファベット順)

赤羽律

- 2010 「チベットに於ける『二諦分別論』に対する三編の注釈書」『日本西藏学会会報』
56、pp.77-85。

'Brong bu tshe ring rdo rje

- 2005 Dus rabs bod du nang bstan ji ltar dar tshul dang de'i khyad chos skor gleng ba. *Bod ljongs zhib 'jug* 4, pp.1-9.

Chattopadhyaya, A. with Chimpa Lama

- 1967 *Atīśa and Tibet*. Motilal Banarsidass. New Delhi.

Chos 'phel

- 2002 *lHo kha sa khul gyi gnas yig* (Gangs can bod kyi gnas bshad lam yig gsar ma 1). Mi rigs dpe skrun khang. Beijing.
- 2004 *lHa sa sa khul gyi gnas yig* (Gangs can bod kyi gnas bshad lam yig gsar ma 2). Mi rigs dpe skrun khang. Beijing.
- 2008 *gZhis rtse sa khul gyi gnas yig* (Gangs can bod kyi gnas bshad lam yig gsar ma 3). Mi rigs dpe skrun khang. Beijing.

rDo rje thar, bZod pa

- 2005 Tan tig shel gyi yang dgon gyi lo rgyus mdor bsdus. *mTsho sngon mi rigs slob grwa chen mo'i rig gzhung dus deb* 5, pp. 99-100.

Dreyfus, G., Drongbu Tsering

- 2010 Pa tshab and origin of Prāsaṅgika. In: Hugon, Vose (eds.) 2010, pp.387-417.

Dung dkar blo bzang 'phrin las

- 2002 *Dung dkar tshig mdzod chen mo*. Krung go bod rig pa dpe skrun khang. Beijing.

Ehrhard, F. K.

- 2002 The Transmission of the Thig-le bcu-drug and the bKa' gdams glegs bam. In: D.Germano, H. Eimer (eds.), *The many canons of Tibetan Buddhism : Proceedings of the Ninth Seminar of the International Association for Tibetan Studies. Leiden 2000*. Brill's Tibetan studies library 2 ; 10. Leiden / Boston / Köln, pp.29-56.

江島恵教

- 1983 「アティーシャの二真理説」 壬生台舜編『龍樹教学の研究』大蔵出版、東京、pp.359-391。

榎本文雄

- 1993 「罽賓－インド仏教の－中心地の所在－」『塚本啓祥教授還暦記念論文集 知の邂逅－仏教と科学』佼成出版社、東京、pp.259-269。
- 1994 A Note on Kashmir as Referred to in Chinese Literature: Ji-bin. In: Y. Ikari (ed.), *A Study of the Nīlamata : Aspects of Hinduism in Ancient Kashmir*. Institute for Research in Humanities. Kyoto University. Kyoto, pp.357-365.

福田洋一、石濱裕美子

- 1986 『西藏仏教宗義研究（第四卷）－トゥカン『一切宗義』モンゴルの章－』東洋文庫、東京。

Funayama Toru

- 1994 Remarks on Religious Predominance in Kashmir; Hindu or Buddhist? In: Y. Ikari (ed.), *A Study of the Nīlamata : Aspects of Hinduism in Ancient Kashmir*. Institute for Research in Humanities. Kyoto University. Kyoto, pp.367-375.

伏見英俊

- 2002 「蔵外文献木版印刷についての一考察」『日本西藏学会会報』48、pp.51-68。
- 2003 「bsTan rim 文献について」『印度学仏教学研究』52-1、pp.423-421。
- 2010 「mChims Nam-mkha'-grags と sNar-thang 寺の系統について」『東西学術研究所紀要』43、pp.21-33。

dGe 'dun chos 'phel

- 1990 *rGyal khams rig pas bskor ba'i gtam rgyud gser gyi thang ma*. In: Hor khang bsod nams dpal 'bar (ed.), *dGe 'dun chos 'phel gyi gsung rtsom*. Vol.1. Bod ljongs bod yig dpe rnying dpe skrun khang. Lhasa. (『世界知識行』)

ゲシェー・ソナム・ギェルツェン・ゴンタ、西村香

- 2003 『チベット仏教・菩薩行を生きる－精読・シャーンティデーヴァ『入菩提行論』－』大法輪閣、東京。

ゲシェー・ソナム・ギェルツェン・ゴンタ、藤田省吾

2000 『チベット密教 心の修行』法蔵館、京都。

Geshé Lhundub Sopa (tr.), Jackson, R. (ed.)

2009 *The Crystal Mirror of Philosophical Systems : A Tibetan Study of Asian Religious Thought* (The Library of Tibetan Classics 25). Wisdom Publications. Boston.

Grong khyer lha sa srid gros lo rgyus rig gnas dpyad yig rgyu cha rtsom 'bri u yon lhan khang

1997 *lHun grub rdzong* (Grong khyer lha sa'i lo rgyus rig gnas 4). Lhasa.

羽田野伯猷

1986a 「カーダム派史 資料篇」『チベット・インド学集成』第一卷(チベット篇Ⅰ)、法蔵館、京都、pp.46-191。

1986b 「カーダム派 (Bka'-gdams-pa) について—Vinayadhara との交渉—」『チベット・インド学集成』第一卷(チベット篇Ⅰ)、法蔵館、京都、pp.205-215。

1986c 「カムの仏教とそのカーダム派並びに衛蔵の仏教に与えた影響について」『チベット・インド学集成』第一卷(チベット篇Ⅰ)、法蔵館、京都、pp.216-238。

1986d 「チベットにおける仏教観の形成について—菩提道灯・サンブ仏教学・カーダム宝冊等をめぐって—」『チベット・インド学集成』第一卷(チベット篇Ⅰ)、法蔵館、京都、pp.277-303。

1986e 「密教者としてのアティーシャーとくに時輪の問題をめぐって—」『チベット・インド学集成』第三卷(インド篇Ⅰ)、法蔵館、京都、pp.182-218。

1987a 「チベットの仏教受容の条件と変容の原理の側面」『チベット・インド学集成』第二卷(チベット篇Ⅱ)、法蔵館、京都、pp.3-195。

1987b 「アティーシャーおほえ書き 一年代考—」『チベット・インド学集成』第三卷(インド篇Ⅱ)、法蔵館、京都、pp.244-274。

袴谷憲昭

1986 「チベットにおけるマイトレーヤの五法の軌跡」『チベットの仏教と社会』春秋社、東京、pp.235-268。

1989 「チベットにおけるインド仏教の継承」『チベット仏教』(岩波講座東洋思想 11) 岩波書店、東京、pp.119-151。

原田覺

2008 「レーチェン=クンガーゲルツェン著『カダム法源明灯』考」『印度学仏教学研究』56-2、pp.945-938。

2009 「レーチェン=クンガーゲルツェン著『カダム法源明灯』考(2)」『印度学仏教

学研究』57-2、pp.1061-1054。

平松敏雄

1982 『西蔵仏教宗義研究（第三卷）—トゥカン『一切宗義』ニンマ派の章—』東洋文庫、東京。

Hugon, P.

2004 *mTshur ston gzhon nu seng ge: Tshad ma shes rab sgron ma*. Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde 60. Arbeitskreis für Tibetische und Buddhistische Studien. Wien.

2008a *Trésors du Raisonnement: Sa skya Paṇḍita et ses prédécesseurs tibétains sur les modes de fonctionnement de la pensée et le fondement de l'inférence: Édition et traduction annotée du quatrième chapitre et d'une section du dixième chapitre du Tshad ma rigs pa'i gter*. 2 vols. Wien.

2008b Arguments by Parallels in the Epistemological Works of Phya pa Chos kyi seng ge. *Argumentation* 22, pp.93-114.

2010 The origin of the theory of definition and its place in Phya pa Chos kyi seri ge's philosophical system. In: Hugon, Vose (eds.) 2010, pp.319-368.

Hugon, P., Vose, K. (eds.)

2010 Tibetan scholasticism in the 11th and 12th centuries. Contributions to a panel at the XVth Congress of the International Association of Buddhist Studies, Atlanta, 23-23 June 2008. *Journal of International Association of Buddhist Studies* 32, number 1-2 (2009) 2010, pp.235-487.

稲葉正就、佐藤長（共訳）

1964 『フウラン・テプテル—チベット年代記—』法蔵館、京都。

石濱裕美子、福田洋一

2008 『聖ツォンカパ伝』大東出版社、東京。

井内真帆

2000 「カダム派の祖ドムトンについて」『橘史学』15、pp.123-138。

2003 「Gu ge-Pu hrang 王国の仏教復興運動における lHa lde の役割について—王位継承に関する一考察—」『日本西蔵学会会報』49、pp.47-61。

2004 「トゥケン『一切宗義』カダム派の章研究」『大谷大学大学院研究紀要』21、

- pp.283-310。
- 2006 「ペルツェク・チベット文古籍研究室編『デプン寺所蔵古籍目録』（新刊紹介）」『佛教学セミナー』83、pp.16-24。
- 2008 「後伝期初期のチベット仏教世界 —カダム派を中心として—」学位請求論文（大谷大学）。
- 2009 「デンマ —東チベット仏教復興の地—」『印度学仏教学研究』57-1、pp.465-457。
- 2010 「ロ寺 —初期カダム派寺院の変遷—」『大谷大学研究年報』62、pp.37-77。

Jackson, D.

- 1989 *The Early Abbots of 'Phan po Na lendra : The Vicissitudes of a Great Tibetan Monastery in the 15th Century*. Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde Heft 23. Wien.
- 1996 The bstan rim (Stages of the doctrine) and Similar Graded Expositions of the Bodhisattva's Path. In: J. Cabezón, R. Jackson (eds.), *Tibetan literature : Studies in Genre*. Snow Lion. New York, pp.229-243.

Jackson, R.

- 2006 Triumphalism and Ecumenism in Thu'u bkwan's Crystal Mirror. *Journal of the International Association of Tibetan Studies* 2, pp.1-23.

Jampa Samten Shastri

- 1983 *Catalogue of the Library of Tibetan Works and Archives (Manuscript Section) 1 : Historical Works*. Library of Tibetan Works and Archives. Dharamsala.

笥無関

- 1970 「Jñānaśrīmitra の "SĀKĀRASIDDHIŚĀSTRA" 第六章：試訳と註記 (I)」『北海道駒澤大學研究紀要』5、pp.1-20。

金倉圓照他（編）

- 1953 『西藏撰述佛典目録』東北大学文学部印度哲学印度文学研究室、仙台。

加納和雄

- 2006 *rNgog Blo-ldan-shes-rab's Summary of the Ratnagotravibhāga: The First Tibetan Commentary on a Critical Source for the Buddha-nature Doctrine*. Dissertation Thesis submitted to Hamburg University.
- 2007 「ゴク・ロデンシェーラプ著『書簡・甘露の滴』 —校訂テキストと内容概観—」『高

野山大学密教文化研究所紀要』20、pp.162-105。

- 2008 rNog blo ldan shes rab's Topical Outline of the Ratnagotravibhāga Discovered at Khara Khoro. In: O. Almogi (ed.), *Contributions to Tibetan Literature. Proceedings of the Eleventh Seminar of the International Association for Tibetan Studies, Kömigswinter 2006*. Halle, pp.127-194.
- 2009 「ゴク・ローデンシェーラプ著『書簡・甘露の滴』－訳注篇－」『高野山大学密教文化研究所紀要』22、pp.(121)-(178)。
- 2010a 「ゲンドゥンチュンペー著『世界知識行』第1章和訳－1930年代のチベットにおける梵文写本調査記録－(1)」『高野山大学密教文化研究所紀要』23、pp.146(63)-106(103)。
- 2010b 「チョムデンリクレル著『大乘究竟論莊嚴華』和訳および校訂テキスト(1)」『高野山大学論叢』45、pp.13-35。
- 2010c rNog Blo ldan shes rab's position on the Buddha-nature doctrine and its influence on the early gSan phu tradition. In: Hugon, Vose (eds.) 2010, pp.249-283.

加納和雄・中村法道

- 2009 「チョムデンリクレル著『弥勒法の歴史』－テキストと和訳－」*Acta Tibetica et Buddhica* 2、pp.117-139。

Kapstein, M. T.

- 2009 Preliminary remarks on the Grub mtha' chen mo of Bya 'Chad kha ba Ye shes rdo rje. In: E. Steinkellner (ed.), *Sanskrit Manuscripts in China : Proceedings of a Panel at the 2008 Beijing Seminar on Tibetan Studies October 13 to 17*. China Tibetology Publishing House. Beijing, pp.137-152.

Karmay, S. G.

- 1980 The ordinance of lHa la ma Ye shes 'od. In: M. Aris et S. Aung San (eds.), *Tibetan studies in honour of Hugh Richardson*. Aris and Phillips. Warminster, pp.150-160. (In: S.G. Karmay, *The Arrow and the Spinddle Studies in History: Myths Rituals and Beliefs in Tibet*. Mandala Book Point. Kathmandu 1998, pp.3-16).

川越英真

- 1981 「Rin chen bzang po 伝研究」『印度学仏教学研究』30-1、pp.31-36。
- 1982 「Rin chen bzang po の生涯とその活動」『文化』46-1・2、pp.44-73。
- 1984 「rNog blo ldan shes rab と彼をめぐる人々」『印度学仏教学研究』32-2、pp. 1010-1006。

- 1986 「Smṛtijñānakīrti をめぐる Khams の仏教活動について」『印度学仏教学研究』35-1、pp.323-319。
- 1988 「チベット仏教流伝後期における「dBus・gTsang の出家者」の問題」『東北福祉大学紀要』13、pp.189-203。
- 2000 「Nag tsho Lo tsā ba について」『東北福祉大学研究紀要』25、pp.293-316。
- 2001 「Nag tsho Lo tsā ba について (2)」『東北福祉大学研究紀要』26、pp.275-295。
- 2004 「チベット仏教の後伝期開始とウ・ツァンの出家者の和尚に関する問題」『東北福祉大学研究紀要』28、pp.143-168。

川崎信定、吉水千鶴子

- 2007 『西藏仏教宗義研究(第八卷) — トゥカン『一切宗義』序章「インドの思想と仏教」 —』東洋文庫、東京。

Klimburg-Salter

- 1997 *Tabo : A Lamp for the Kingdom*. Skira Editore. Milano (Thames and Hudson. London 1998).

Kramer, R.

- 2007 *The Great Tibetan Translator : Life and Works of rNgog Blo ldan she's rab (1059-1109)*. Collectanea Himalayica 1. Indus Verlag. Munich.

van der Kuijp, L.W. J.

- 1978 Phya-pa chos-kyi seng-ge's Impact on Tibetan Buddhist Epistemological Theory. *Journal of Indian Philosophy* 5, pp.355-369.
- 1983 *Contributions to the Development of Tibetan Buddhist Epistemology: From the eleventh to the thirteenth century*. Franz Steiner. Wiesbaden.
- 1993 Jayānanda. A Twelfth Century *Guoshi* from Kashmir Among the Tangut. *Central Asiatic Journal* 37 / 3-4, pp.188-197.

Liu, L. 劉立千

- 1984 『土觀宗派源流』西藏人民出版社、拉薩。

Martin, D.

- 1997 *Tibetan Histories : A Bibliography of Tibetan-Language Historical Works*. Serindia Publications. London.

松田和信

- 1996 「Nirvikalpapraveśa 再考 - 特に『法法性分別論』との関係について-」『印度学仏教学研究』45-1、pp. 369-363。

Miller, A. S.

- 2004 *Jeweled Dialogues : The Role of "The Book" in the Formation of the Kadam Tradition within Tibet*. Dissertation Thesis submitted to Virginia University.

御牧克己

- 2003 「チベット学における原典研究の意義 — 『宗義の水晶鏡』「ボン教」章の翻訳をめぐって—」『論集「原典」』（平成 10~14 年度文部科学省研究費補助金 特定領域研究 (A) 118「古典学の再構築」研究成果報告集 II A01「原典」調整班研究報告）、pp.123-141。

Miyazaki, I.

- 2008 *Atiśa (Dīpaṃkaraśrī jñāna): His Philosophy, Practice and its Sources. Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko* 65, pp.61-89.

三宅伸一郎

- 1998 「ランリタンパの伝説 — 伝説と伝記の間—」『大谷大学大学院研究紀要』15、pp.79-98。

望月海慧

- 2002 「Dīpaṃkaraśrījñāna の *Madhyamakopadeśa* について」『身延山大学仏教学部紀要』3、pp.9-20。
2006 「中観と唯識を融合する「大中観」とは何か—仏教思想史における相克と融和の一断面—」『大崎学報』162、pp.83-94。

森安孝夫

- 1987 「中央アジア史の中のチベット — 吐蕃の世界史的位罫づけについての展望—」長野泰彦、立川武蔵（編）『北村甫教授退官記念論文集 チベットの言語と文化』冬樹社、東京、pp.44-68。

中山照玲

- 1994 「インド仏教終焉のころ—チャ・ローツァワ・チュージュペル伝和訳（1）—」『成田山仏教研究所紀要』（鶴見照碩貫首猊下喜寿記念論集）17、pp.213-249。

Naudou, J.

1980 *Buddhists of Kasmīr*. Agam Kala Prakashan. New Delhi.

西岡祖秀

1978 『西藏仏教宗義研究（第二卷）—トゥカン『一切宗義』シチェ派の章—』東洋文庫、東京。

西沢史仁

2010 「チャパ・チューキセンゲの認識手段論—認識手段の定義をめぐって—」『日本西藏学会会報』56、pp.61-75。

大西啓司

2007 「グゲ・プラン Gu ge-Pu hrang 王国における仏教復興と黄金」『東洋史苑』69、pp.1-29。

小野田俊蔵

1989 「チベットの学問寺」『チベット仏教』（岩波講座東洋思想 11）岩波書店、東京、pp.351-373。

2010 「チベット仏教の現在」『須弥山の仏教世界』（新アジア仏教史 9 チベット）佼成出版社、東京、pp.237-261。

dPal brtsegs bod yig dpe rnying zhib 'jug khang

2004 *'Bras spungs dgon du bzhugs su gsol ba'i dpe rnying dkar chag*. Mi rigs dpe skrun khang. Beijing. (『デブン寺所蔵古籍目録])

2006 *bKa' gdams gsung 'bum phyogs sgrig thengs dang po'i dkar chag*. Si khron mi rigs dpe skrun khang. Chengdu. (『カダム文集』第1集目録)

2009 *bKa' gdams gsung 'bum phyogs sgrig thengs gsum pa'i dkar chag*. Si khron mi rigs dpe skrun khang. Chengdu. (『カダム文集』第3集目録)

Petech, L.

1990 *Central Tibet and the Mongols : The Yüan-Sa skya Period of Tibetan History*. (Serie Orientale Roma 65). Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente. Roma.

1999 Historical Introduction. In: L. Petech, C. Luczanits (eds.). *Inscriptions from the Tabo Main Temple: Texts and Translations*. Serie Orientale Roma 83. Istituto Italiano per l'Africa e l'Oriente. Roma, pp.1-8.

Pritsak, O.

1953-54 Die Karachaniden. *Der Islam* 31, pp.17-68.

Roesler, U., Roesler, H.U.

2004 *Kadampa Sites of Phempo : A Guide to Some Early Buddhist Monasteries in Central Tibet*. Vajra Publications. Kathmandu.

斎藤明

2003a 「セルリンパが伝承する『入菩提行論の要義』とその思想」『阿部慈園博士追悼論集 仏教の修行法』春秋社、東京、pp.406 (29)-372 (63)。

2003b 「セルリンパの秘説「11の主要義」とは何か」『日本西蔵学会会報』49、pp.3-12。

西蔵大蔵經研究会（編）

1962 『影印北京版西蔵大蔵經総目録附索引』鈴木学術財団、東京。

佐藤長

1978 『チベット歴史地理研究』岩波書店、東京。

Schaeffer, K.R., van der Kuijp, L.W. (eds.)

2009 *An Early Tibetan Survey of Buddhist Literature : The Bstan pa rgyan gyi nyi 'od of Bcom ldan ral gri*. Harvard University Press. Cambridge.

Scherrer-Schaub, C. A.

1999 Was Byang chub sems dba' a Posthumous Title of King Ye shes 'od? The Evidence of a Tabo Colophon. In: C.A.Scherrer-Schaub, E. Steinkellner (eds.), *Tabo Studies II*. Rome, pp.207-225.

Scherrer-Schaub, C.A., Steinkellner, E. (eds.)

1999 *Tabo Studies II*. Serie Orientale Roma 87. Istituto Italiano per l'Africa e l'Oriente. Rome.

Smith, E. G.

2001 *Among Tibetan Texts; History and Literature of the Himalayan Plateau*. Wisdom publications. Boston.

bSod nams chos dar

2003 'Phan po dang lhun grub rdzong zhes ming gi byung tshul brjod pa sngon byung gsal ba'i

gtam. *sPang rgyan me tog* 2003-4, pp.47-49.

Sørensen, P. K.

1999 The Prolific Ascetic lCe-sgom Shes-rab rdo-rje *alias* lCe-sgom zhid po : Allusive, but Elusive. *Journal of the Nepal Research Centre* 11, pp.175-200.

Steinkellner, E., Luczanits, C.

1999 The Renovation Inscription of the Tabo Gtug lag khang. In: L. Petech, C. Luczanits (eds.), *Inscriptions from the Tabo Main Temple: Texts and Translations*. Serie Orientale Roma 83. Istituto Italiano per l'Africa e l'Oriente. Roma, pp.9-28.

Stoddard, H.

2004 Rekindling the Flame, A Note on Royal Patronage in Tenth Century Tibet. In: C. Cüppers (ed.), *The Relationship Between Religion and State (chos srid zung 'brel) in Traditional Tibet : Proceedings of a Seminar Held in Lumbini, Nepal*. Lumbini International Research Institute. Lumbini, pp.49-104.

Stolz, Jonathan

2010 Phywa pa's argumentative analogy between factive assessment (*yid dpyod*) and conceptual thought (*rtog pa*) In: Hugon, Vose (eds.) 2010, pp.369-386.

Sweet, M. J.

1996 Mental Purification (Blo sbyong) : A Native Tibetan Genre of Religious Literature. In: J. Cabezon, R. Jackson (eds.), *Tibetan literature : Studies in Genre*. Snow Lion. New York, pp.244-260.

立川武蔵

1974 『西藏仏教宗義研究 (第一卷) —トウカン『一切宗義』サキヤ派の章—』東洋文庫、東京。

1987 『西藏仏教宗義研究 (第五卷) —トウカン『一切宗義』カギユ派の章—』東洋文庫、東京。

立川武蔵、福田洋一、石濱裕美子

1995 『西藏仏教宗義研究 (第七卷) —トウカン『一切宗義』ゲルク派の章—』東洋文庫、東京。

武内紹人

2009 「古チベット文献研究の現段階」『東洋史研究』67-4、pp.123-129。

Forthcoming Old Tibetan Buddhist Texts from the post-Tibetan Imperial Period (Mid-9 C. to Late 10 C.), C.A. Scherrer-Schaub, C. Ramble, (eds.), *Proceedings of the Tenth IATS in Oxford in 2003*. Leiden.

谷口富士夫

1993 『西藏仏教宗義研究(第六卷)―トゥカン『一切宗義』チヨナン派の章―』東洋文庫、東京。

Tauscher, H.

1999 *dBu ma śar gsum gyi ston thun* (Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde 43). Arbeitskreis für Tibetische und Buddhistische Studien. Wien.

Thupten Jinpa (tr.)

2006 *Mind Training: The Great Collection*. Wisdom Publications. Boston.

2008 *The Book of Kadam: The Core Texts*. Wisdom Publications. Boston.

塚本啓祥、松長有慶、磯田照文

1989 『梵語仏典の研究Ⅳ 密教経典篇』平楽寺書店、京都。

ツルティム・ケサン

1997 「輪廻図の描きかたについて」『日本西藏学会会報』41・42、pp.45-50。

2002 「ランリタンパによる修心の教え」『法談』47、pp.118-122。

2003 「『中観ウパデーシャ』のヴァスバンドゥ二人説とアティーシャの中観の見解」『印度学仏教学研究』50-1、pp.306-300。

ツルティム・ケサン、藤仲孝司(共訳)

2005a 『チベット仏教の原典『菩提道次第論』悟りへの階梯』星雲社、東京。

2005b 『ツォンカパ菩提道次第大論の研究』文栄堂書店、京都。

2007 『チベット仏教成就者たちの聖典『道次第・解脱莊嚴』解脱の宝飾り』星雲社、京都。

ツルティム・ケサン、三宅伸一郎(共訳)

2003 「ポトパの法話集『ベウブム・ゴンポ』より「どのように善知識を探し、どのように師事すべきか」和訳」『法談』48、pp.187-228。

2004 「ポトパの法話集『ベウブム・ゴンポ』より「善知識に対する信仰と尊敬をいか

に瞑想すべきか」和訳』『法談』49、pp.115-129。

ツルティム・ケサン、櫻井智浩

- 2009 『タルマリンチェン著『入菩提行論の釈論・仏子渡岸』第八章・第九章の和訳研究(中観哲学の研究VI)』(研究プロジェクト「人の生老病死と高地環境 — 「高地文明」における医学生理・生態・文化的適応—」2008年度研究報告書)人間文化研究機構・総合地球環境学研究所、京都。

Tucci, G.

- 1988 *Rin chen bzang po and the Renaissance of Buddhism in Tibet around the Millenium.* English version of Indo-Tibetica II. Aditaya Prakashan. New Delhi. (*Rin c'en bzang po e la rinascita del Buddhismo nel Tibet intorno al Mille.* Roma 1932).

宇井伯寿他(編)

- 1934 『西藏大蔵経総目録』東北帝国大学法文学部、東京。

Vitali, R.

- 1996 *The Kingdoms of Gu ge Pu hrang: According to mNga' ris rgyal rabs by Gu ge mkhan chen Ngag dbang grags pa.* Indraprastha Press. New Delhi.

Wu, Z. 武振華 (eds.)

- 1995 『西藏地名』中国蔵学出版社、北京。

山口瑞鳳

- 1982 「カダム派の典籍と教義」『東洋学術研究』21-1、pp.69-80。
1985 「チベット史文献」『敦煌胡語文献』(講座敦煌6)大東出版社、東京。

頼富本宏

- 1989 「チベットの密教」『チベット仏教』(岩波講座東洋思想11)岩波書店、pp.289-321。

吉水千鶴子

- 2006 A Tibetan Buddhist Text from the Twelfth Century Unknown to Later Tibetans. *Les Cahiers d'Extrême-Asie* 15 (2005). École française d'Extrême-Orient. Kyoto, pp.127-164.
2007 「インド・チベット中観思想史の再構築にむけて— 『中観明句論註釈』第1章の写本研究始動」『哲学・思想論集』32 (2006)、筑波大学哲学・思想専攻、pp.73-114。

- 2008 「チベット仏教研究に新時代を開くか（『噶当文集』ほか）」『東方』332、pp.20-23。
- 2009 Zhang Thang sag pa's reevaluation of Buddhapālita's statement of consequence (*prasaṅga*). 『哲学・思想論集』34 (2008)、筑波大学哲学・思想専攻、pp.81-99。
- 2010 Ṭaṅg Thāṅ sag pa on theses (*dam bca', pratijñā*) in Madhyamaka thought. In: Hugon, Vose (eds.) 2010, pp.443-467.

Zhang, Y. 張怡蓀 (eds.)

1993 *Bod rgya tshig mdzod chen mo*. Mi rigs dpe skrun khang. Beijing. (『藏漢大辭典』)

gZigs pa sprul sku blo bzang bzod pa, Phun tshogs

2006 *Rwa sgreng dgon pa'i nyams bzhes chos spyod kyi brjed byang chen mo*. Bod ljongs mi dmangs dpe skrun khang. Lhasa.

索引

数字は本文の頁を、斜体数字は脚注番号を示す。脚注番号について、序文の脚注には(序)、本文Ⅰの脚注には(Ⅰ)、本文Ⅱの脚注には(Ⅱ)の記号を付す。

人名

ア行

- アクチン・シェーラプギヤムツォ a khu ching
shes rab rgya mtsho 17
- アサンガ asaṅga 54
- アティシャ atīśa 2, 4, 6, 8, 14, 15, 18, 19,
20, 22, 23, 25, 26, 27, 28, 30, 34, 39, 40, 41,
42, 43, 44, 45, 47, 50, 51, 52, 53, 54, 55, 56,
57, 59, 60, 61, 62, 64, 65, 22 (序), 8, 38, 57,
65, 66, 67 (Ⅰ), 2, 7, 9, 16, 20, 29, 32, 33, 38,
40, 48, 58, 75, 77, 80, 83, 93, 126, 131, 143,
153, 156, 157 (Ⅱ)
- アメーシャブ・ガワンクンガーソナム a myes
zhabs ngag dbang kun dga' bsod nams 16,
22 (Ⅰ), 11 (Ⅱ)
- アロ a ro 59, 125 (Ⅱ)
- イーサンツェーパ yid bzang rtse pa 16
(Ⅰ) →ゴ翻訳師シヨンスペル
- イエシエー・ウー ye shes 'od →ハラマ・
イエシエー・ウー
- イエシエーツェモ ye shes rtse mo →ペン
チェン・イエシエーツェモ
- ウバロセル dbus pa blo gsal 16, 18 (Ⅰ)

カ行

- カナカヴァルマン kanakavarman 7, 8

- カマラシーラ kamalaśīla 5, 26, 42, 56
- カムパルンバ kham pa lung pa 46, 59
- カラゴムチュンパ・ワンチュクロドー kha
rag sgom chung ba dbang phyug blo gros
59, 125 (Ⅱ)
- ガリパ・シェーラプギエンツェン mnga' ris
pa shes rab rgyal mtshan 63
- カルマ [パ]・トウスムケンパ karma [pa]
dus gsum mkhyen pa 49, 66, 68 (Ⅱ)
- カワ・シャキャワンチュク ska ba shākya
dbang phyug 26, 38, 94 (Ⅰ)
- カンパシェウ gang pa she'u 52
- ガンポパ sgam po pa 57, 59 (Ⅱ) →ニ
ヤンメー・ダクポ・ハジェ
- ギャ・チンルワ rgya ching ru ba 94 (Ⅰ)
- ギャ・ツォンセン rgya brtson seng 44
→ギャ・ツォンドウセンゲ
- ギャ・ツォンドウセンゲ rgya brtson 'grus seng
ge 43, 44
- ギャ・ヨンダ rgya yon bdag 48, 59 (Ⅱ)
- キュンカム khyung khams 55
- キュン・リンチェンタク khyung rin chen
grags 52
- クオーサ・レンチクマ khu 'od bza' lan cig ma
23
- クシェン・ヤクシエルペン sku gshen yag
gzher 'phen 23
- クチェンポ khu chen po 62 →クトウ

ン

クトウン khu ston 27, 62, 57, 65 (I), 38, 44, 142 (II)

クトーサ・レンチクマ khu lto gza' lan cig ma 55 (I)

クンタンラマ・シャン・ツォンドウータクパ gung thang bla ma zhang brtson 'grus grags pa 95 (I)

ゲシエー・ゴンパワ dge bshes dgon pa ba 61 → ゴンパワ

ゲシエー・サンブパ dge bshes gsang phu ba 60 → ゴク・レクペーシェーラブ

ゲシエー・ソパ dge bshes lhun grub bzod pa 13

ゲシエー・タプカワ dge bshes stabs ka ba 145 (II)

ゲシエーチェンボ・シャラワ dge bshes chen po sha ra ba 47 → シャラワ

ゲシエー・トルワ dge bshes dol ba 47, 49 → トルワ・シェーラブギヤムツォ

ゲシエー・トンパ dge bshes ston pa 20, 26, 27, 28, 29, 30, 46, 57, 58, 59, 60, 62, 65, 143 (II) → ドムトンパ

ゲシエー・ニエン dge bshes gnyan 57, 113 (I)

ゲシエー・バンケーパ dge bshes sbang gad pa 49 (II)

ゲシエー・ポトワ 60, 61 → ポトワ

ゲシエー・ヤゲーパ dge bshes ya gad pa 47 → ゲシエー・トルワ

ゲシエー・ラクソルパ dge bshes lag sor ba 64 → ラクソルパ

ゲシエー・リンチェンペル dge bshes rin chen 'phel 47 → チェンガ・リンチェンペル

ゲワセル dge ba gsal 21 → ラチェン・

ゴンパラプセル

玄奘 6 (序)

ゲンドウン・チューペル dge 'dun chos 'phel 101 (I)

ゲンドウンドゥブ dge 'dun grub 63, 34 (I)

ケンパタレ gan pa da re 75 (II)

ゴク大翻訳師 rngog lo chen po 51 → ゴク・レクペーシェーラブ

ゴク翻訳師父子 rngog lo yab sras 56

ゴク・レクシェー rngog legs shes → ゴク・レクペーシェーラブ

ゴク〔翻訳師〕・レクペーシェーラブ rngog [lo tsā] legs pa'i shes rab 4, 7, 22, 27, 35, 51, 60, 62, 63, 57, 76, 93 (I), 38, 80, 142 (II)

ゴク・ロデンシェーラブ rngog blo ldan shes rab 4, 7, 51, 56, 2, 15 (序), 94 (I), 82 (II)

コデン köden 80 (I)

ゴ翻訳師シヨンスペル 'gos lo [lo tsā] gzhon nu dpal 15, 52, 16 (I)

ゴムパリンチェンラマ sgom pa rin chen bla ma 53

コルレ 'khor re 49 (I)

ゴンパワ dgon pa ba 18, 29, 30, 31, 34, 59, 61, 76 (I), 58, 69, 75 (II)

ゴンパラプセル dgongs pa rab gsal 22, 47 → ラチェン・ゴンパラプセル

サ 行

サペン sa pan 50 → サキャ・パンディタ

サキャ・パンディタ sa skya paṇḍita 50

サンゲーウォン sangs rgyas dbon 55

サンゲーゴムパ sangs rgyas sgom pa 52 (II) → ナルトンパ・サンゲーゴムパ

ジェ・ラマ rje bla ma 54, 61 → ツォン
 カパ
 ジェ・リンポチェ rje rin po che 39
 → ツォンカパ
 シクポ・シェーラプ zhis po shes rab 96
 (I)
 シャーキャシュリーバドラ śākyaśrībhadrā
 4, 102 (II)
 シャーンタラクシタ śāntarakṣita 2, 5, 26,
 56, 23 (II)
 シャーンティデーヴァ śāntideva 56
 シャーンティパ śāntipa 25
 シャボガンパ sha bo sgang ba 57, 58
 ジャムヤンシェーパ 'jam dbyangs bshad pa
 2 (I)
 ジャヤーナンダ jayānanda 8, 18 (序)
 シャラワ sha ra ba 30, 31, 33, 41, 47, 48, 49,
 57, 59, 61, 66, 66 (II)
 シャル shar 30-31, 41, 57 → シャラワ
 シャン・シャラワ zhang sha ra ba 57, 59
 → シャラワ
 シャン・タンカ・ペルチュン zhang 'phrang
 kha ber chung 27, 28, 29
 シャン・タンサクパ zhang thang sag pa 7,
 8, 2 (序), 82 (I)
 シャンツェポン zhang tshe spong 52
 シャン・ナナム・ドルジェワンチュク zhang
 sna nam rdo rje dbang phyug 24, 56 (I)
 ジュニャーナガルバ jñānagarbha 19 (序)
 ジュニャーナシュリーミトラ jñānaśrīmitra
 13 (序)
 ジョボジェ・ハチク jo bo rje lha gcig 25
 → アティシャ
 ジョボ [チェンボ/ジェ] jo bo [chen po /
 rje] 14, 15, 18, 19, 20, 26, 27, 30, 34, 39,
 41, 42, 44, 45, 46, 47, 48, 50, 51, 52, 53, 54,
 55, 56, 57, 59, 60, 62, 64, 2, 7, 80, 143 (II)

→ アティシャ
 ジョボ父子 jo bo yab sras 61, 62
 ジョボレク jo bo legs 29
 ションヌギエルチヨク gzhon nu rgyal mchog
 9 (I)
 ションヌギエルツェン gzhon nu rgyal mtshan
 18 → プチュンパ
 スウセルバル gzu gsal 'bar 21 → ラチ
 エン・ゴンパラプセル
 スプーティシュリーシャーンティ subhū-
 tiśrīśānti 14 (序)
 スムリティジュニャーナキールティ smṛtijñā-
 nakīrti 24, 25, 61 (I), 75 (II)
 スルプパ zur phu ba 51

セ・チルプパ se spyil bu pa 75, 102 (II)
 セツン se btsun 24, 25, 57 (I), 60 (I), 77
 (II)
 セルリン [パ] gser gling [pa] 42, 56, 57,
 20 (II)
 センゲーキャブ seng ge skyabs 52 (II)
 → ナルタンパ・サンゲゴンパ
 ソグドクパ・ロドーギエルツェン sog bzlog
 pa blo gros rgyal mtshan 28 (II)
 ソナム・ヘーワンポ bsod nams lha'i dbang po
 16, 22 (I)
 ソンゲ srong nge 49 (I) → ハラマ・
 イエシェー・ウー
 ソンツェン・ガンポ srong btsan sgam po
 20, 78 (I)

タ行

ダクカルバ brag dkar ba 61, 140 (II)
 タクスムシエル rta gsum bzher 55 (I)
 タクルンタンパチェンポ stag lung thang pa

- chen po 49, 68 (II)
- タブパ grab pa 61, 138 (II)
- ダライラマ 1 世 63 → ゲンドゥンド
ッパ
- ダライラマ 5 世 17, 19, 29 (I)
- ダライラマ 8 世 23 (I)
- ダルマキールティ dharmakīrti 6, 7
- ダルマパーラ dharmapāla 22
- ダルマラクシタ dharmarakṣita 57
- ダルモッタラ dharmottara 7
- タンカ・ペルチュン 'phrang kha ber chung
28 → シャン・タンカ・ペルチュン
- チエーカーワ 'chad kha ba 49, 55, 57, 58,
65 (II)
- チェゴム [ゾン] パ lce sgom [rdzong] pa
62, 140 (II) → チェゴムゾンパ
- チェンガ・リンチェンペル spyan snga rin
chen 'phel 39, 40
- チェンガーパ spyan snga pa 30, 31, 33, 46,
55, 61, 63, 19, 76 (I), 12, 15, 45, 47, 64, 75
(II)
- チオ・ヘーパ spyi bo lhas pa 50
- チム mchims 64, 154 (II)
- チム・ジャンペーヤン mchims 'jan pa'i
dbyangs 154 (II)
- チム・ナムカータク mchims nam mkha' grags
137, 154 (II)
- チャク翻訳師チュージェペル chag lo tsā ba
chos rje dpal 5 (序)
- チャ・チエーカーワ bya 'chad ka ba 57
→ チエーカーワ
- チャバ・チューキセンゲ phywa pa chos kyi
seng ge 8, 35, 2, 19, 20 (序), 93 (I),
64, 83 (II)
- チャムペーネエンジョル byams pa'i rnal 'byor
(Maitrīyogi) 57
- チャユルワ bya yul ba 30, 41, 47, 55, 61, 5,
47, 59 (II)
- チャンキャ・ロールドルジェ lchang skya rol
pa'i rdo rje 56, 2, 13 (I), 107 (II)
- チャンセム・ラディンパ byang sems rwa
sgreng pa 58
- チャンチュブ・ウー byang chub 'od 2, 22,
25, 44, 41 (I), 27 (II)
- チャンチュブ・ギェルツェン byang chub
rgyal mtshan 17
- チャンチュブ・ナンワ byang chub snang ba
140 (II)
- チャンドラキールティ candrakīrti 6, 7, 8,
56
- チューキャブサンポ chos skyabs bzang po
50, 51
- チューキドルジェ chos kyi rdo rje 5 (II)
- チョムデン・リクレル bcom ldan rig ral / rig
pa'i ral gri 2, 8, 10 (序), 41 (I)
- ツァン・ラブセル gtsang rab gsal 21
- ツェデ rtse lde 49 (I)
- ツェンカウオチエ btsan kha bo che 7
- ツェンソン btsan srong 49 (I)
- ツォンカパ tsong kha pa 35, 39, 50, 51, 52,
54, 58, 61, 8, 94 (I), 4, 5, 74, 120, 137, 141
(II)
- ツルティムバル tshul khriims 'bar 63 →
チェンガーパ
- ティーローパ ti lo pa 9 (序)
- ディグナーガ dignāga 7
- ディクン・ジクテンゴンポ 'bri gung 'jig rten
mgon po 49, 68 (II)
- ティソン・デツェン khri srong lde btsan 2,
23 (II)
- デシー・サンゲーギャムツォ sde srid sangs

rgyas rgya mtsho 34
 デチェンポ・シエーラプバル 'bre chen po shes
 rab 'bar 52
 デンバ・イエシエー dran pa ye shes 61
 (I) → スムリティジュニャーナキー
 ルティ
 テンパ翻訳師ツルティム・ジュンネー steng
 pa lo tsā ba tshul khriims 'byung gnas 83
 (II)
 トウ・メル・ツルティムジュンネー gru mer
 tshul khriims 'byung gnas 65 (I)
 トウージェペルワ lo tsā ba thugs rje dpal ba
 63
 トウールンパ stod lung pa 51, 55, 15, 75
 (II)
 トウカン thu'u bkwan 2, 8, 9, 13, 14, 15, 18,
 19, 23, 30, 33, 34, 56, 1, 2, 11, 13 (I), 88,
 107, 161 (II)
 トウスムケンパ → カルマ [パ]・トウス
 ムケンパ
 トウム・イエシエーギェルツェン grum ye
 shes rgyal mtshan 24
 トウムトン・ロドータクパ gtum ston blo gros
 grags pa 48, 51 (II)
 ドウルゴムチェンポ brul sgom chen po 5
 (II)
 トウンカル [・リンポチェ / ・ロプサンティ
 ンレー] dung dkar [rin po che / blo bzang
 'phrin las] 16
 ドゲン・パクモドゥパ 'gro mgon phag mo gru
 pa 49, 25 (I), 63, 68 (II)
 ドム 'brom 23, 40, 52, 53, 56, 60, 64, 142,
 143 (II) → ドムトンパ
 ドム・クマーラマティ 'brom ku mā ra ma ti
 63
 ドムトンパ 'brom ston pa 2, 4, 19, 20, 22,

23, 24, 25, 26, 27, 28, 29, 30, 33, 40, 41, 46,
 48, 52, 53, 56, 57, 59, 60, 61, 62, 65, 53, 54,
 55, 57, 60, 62 (I), 7, 10, 12, 44, 45, 48, 58,
 77, 83, 93, 142, 143, 156 (II)
 ドムジェ [・ギェルウエージュンネー] 'brom
 rje [rgyal ba'i 'byung gnas] 48, 64
 → ドムトンパ
 ドム・リンポチェ [・ギェルウエージュンネ
 ー] 'brom rin po che [rgyal ba'i 'byung gnas]
 45, 60, 64 → ドムトンパ
 トルワ・シエーラプギヤムツォ dol ba shes
 rab rgya mtsho 47, 49, 61
 トルンパ・ロドージュンネー gro lung pa blo
 gros 'byung gnas 52, 55, 60, 8 (I), 81 (II)
 トンパ ston pa 25, 28 → ドムトンパ
 トンパ・リンポチェ ston pa rin po che 41,
 62, 143 (II) → ドムトンパ

ナ行

ナーガールジュナ nāgārjuna 54, 55, 56
 ナーローパ nā ro pa 25, 42, 9 (序), 61 (I)
 ナクツォ翻訳師 nag tsho lo tsā ba 4, 22, 44,
 60, 34, 131 (II)
 ナムカー・ギェルツェン nam mkha' rgyal
 mtshan 50
 ナムカー・リンチェン nam mkha' rin chen
 63, 147, 150 (II)
 ナムリソンツェン nam ri srong btsan 78
 (I)
 ナムリン nam rin 62 → ナムカー・リ
 ンチェン
 ナルトンパ・サンゲーゴムパ snar thang pa
 sangs rgyas sgom pa 58, 52 (II)
 ニエン gnyan 57 → ゲシエー・ニエン
 ニャンメー・ダクポ・ハジェ mnyam med
 dwags po lha rje 48, 57, 59 (II)

ネウスルパ sne'u zur pa 49, 61
ネエンジョルパ〔チエンボ〕 rnal 'byor pa〔chen
po〕 48, 53, 55, 59, 58, 75 (Ⅱ)
ネエンジョルパ・シェーラブドルジェ rnal
'byor ba shes rab rdo rje 49, 66 (Ⅱ)

ハ行

バーヴィヴェーカ bhāviveka 56
バヴィヤラージャ bhavyarāja 7
パオツクラクテンワ dpa' bo gtsug lag phreng
ba 20
パクモドゥパ phag mo gru pa → ドグン・
パクモドゥパ
バゴム sba sgom 59, 125 (Ⅱ)
ハデ lha lde 24 (Ⅱ)
パツァブ〔翻訳師／・ニマタク〕 pa tshab〔lo
tsā ba / nyi ma grags〕 4, 7, 8, 33, 82, 101
(Ⅰ), 64 (Ⅱ)
ハディガンバ lha 'bri sgang pa 61
パドマサンバヴァ padmasambhava 66
(Ⅰ), 23 (Ⅱ)
ハラマ・イエシェー・ウー lha bla ma ye shes
'od 22, 25, 43, 44, 47, 41, 49 (Ⅰ), 27, 28,
29, 33 (Ⅱ)
ハラマの叔父・甥 lha bla ma khu dbon 25,
44, 47
ハルン・ベルキドルジェ lha lung dpal gyi rdo
rje 66 (Ⅰ)
ハルン・ワンチュク lha lung dbang phyug
55
パンディタ・シャムタブ・ゴンポチェン
paṇḍita sham thabs sngon po can 43
パンディタ・ディーパンカラ paṇḍita
dīpaṅkara 25 → アティシヤ
パンディタ・デーツェルマ paṇḍita sgra'i tsher
ma 62 (Ⅰ)
パンディタ・ハラナクポ paṇḍita ha ra nag po

30

パンディタ・ブムタクスンバ paṇḍita 'bum
phrag gsum pa 75 (Ⅱ)

プチュンワ phu chung ba 18, 30, 46, 55, 63,
12, 47 (Ⅱ)

ブラジュニャーパーラ prajñāpāla 22

プトン bu ston rin chen grub 2, 41 (Ⅰ)

ベルチェン ber chen 28

ベルデン・マルメーゼーペル dpal ldan mar
me mdzad dpal 42 → アティシヤ

ベルデン・マルメーゼーイエシェー dpal ldan
mar me mdzad ye shes 52 → アティ
シヤ

ペンチェン・イエシェーツェモ paṅ chen ye
shes rtse mo 16, 17, 20 (Ⅰ)

ペンチェン・ツナムタクパ paṅ chen bsod
nams grags pa 16, 21 (Ⅰ)

ホダク・マルバ翻訳師 lho brag mar pa lo tsā
48 → マルバ翻訳師

ポタン・シバ・ウー pho brang zhi ba 'od
43

ポタンディンバ・シヨンス・ウー pho brang
sdings pa gzhon nu 'od 61, 138 (Ⅱ)
→ タプバ

ポトワ po to ba 18, 29, 30, 33, 34, 46, 56,
57, 61, 63, 66, 12, 13, 14, 30, 47, 83, 138, 140
(Ⅱ)

ポトワ父子 po to ba yab sras 66

ホルトン・ナムカーペルパ hor ston nam
mkha' dpal ba 58, 121 (Ⅱ)

マ行

マ・ゲウエーロードー rma dge ba'i blo gros
14 (序)

マハースマティ mahāsumati 7
マル・シャキヤムニ dmar shākya mu ni 21
マルパ翻訳師 mar pa lo tsā ba 48, 9 (序),
63 (I), 56 (II)
マルポ ā tsārya dmar po 43

ミラ mi la (ミラレパ mi la las pa) 49

モンタワ mon gwa pa 137 (II)

ヤ行

エンチューゴン g-yung chos mgon 23

ヨ・ゲジュン g-yo dge 'byung 21

ヨンジン・イエシェーギェルツェン yongs
'dzin ye shes rgyal mtshan 16, 18, 23 (I)

ラ行

ラクソルパ lag sor ba 60, 64, 131, 137
(II)

ラチェン・ゴンバラブセル bla chen dgongs pa
rab gsal 21, 22, 24, 42, 47, 46, 47 (I)

ラチェンポ bla chen po 47 → ラチェ
ン・ゴンバラブセル

ラトナーカラシャーンティ ratnākaraśānti
8

ラン glan 30, 41, 57 → ランリタンパ

ラントルマ glang dar ma 21, 42, 43

ランタン [パ] glang thang [pa] 47, 57, 58
→ ランリタンパ

ランタンシャン glang thang zhang 57, 113
(II)

ランリタンパ glang ri thang pa 30, 33, 41,
47, 57, 58, 84 (I), 113, 114 (II)

ランルンパ glang lung ba 49

リンサン lo chen rin bzang 42, 43 → リ
ンチェン・サンポ

リンチェン・ガンパ rin chen sgang pa 137
(II)

リンチェン・サンポ rin chen bzang po
4, 6, 22, 42, 43, 41, 49, 61 (I), 24, 33 (II)

レーチェン [・クンガーギェルツェン] las
chen [kun dga' rgyal mtshan] 15, 16, 17,
19, 16, 34 (I)

レクシェー legs shes 80 (II) → ゴク・
レクペーシェーラブ

ロセンバ・トウルク lo sems dpa' sprul sku
102 (I)

ロデンシェーラブ blo ldan shes rab → ゴ
ク・ロデンシェーラブ

ロドーベーパ blo gros sbas pa 34 (I)

ロントン・マウエセンゲ rong ston smra ba'i
seng ge 83 (I)

ワ行

ワンチュク・ツルティム dgra bcom pa dbang
phyug tshul khirms 97 (I)

地名・寺院名

寺院には〔寺〕の記号を付す。

ア行

アチュンナムゾン a chung gnam rdzong 46
(I)

アムド a mdo 21, 42, 46, 58 (I)

イェルパ yer pa 〔寺〕 27, 66 (I), 38 (II)

イェルパ・ハリ yer pa lha ri 51

インド rgya gar 2, 5, 3, 6, 4, 7, 8, 22, 24, 25,
26, 43, 44, 45, 48, 56

インドとチベット rgya bod 45

ウー dbus 31

ヴェイクラマシーラ 〔寺〕 rnam gnon ngang tshul
(vikramaśīla) 2, 4, 5, 8, 22, 26, 41, 13 (序)

ウー・ツァン dbus gtsang 21, 22, 23, 26,
27, 42, 45, 47, 63, 57, 101 (I), 38 (II)

ウル dbu ru 46, 43 (II)

ウルトゥー (ウトゥー) dbu ru stod (dbu stod)
69 (I)

カ行

カシミール 4, 5, 7, 8, 22, 6, 13 (序), 24, 30
(II)

ガドン dga' gdong 〔寺〕 34

カム khams 23, 24, 28, 42, 57, 61 (I), 77
(II)

カムルン khams lung 48 (II)

ガリ mnga' ris 21, 25, 26, 28, 42, 45, 47, 44
(I), 33 (II)

カル mkha' ru 〔寺〕 75 (II)

カルロク gar log 21, 43, 44, 44 (I), 33
(II)

ガンデン dga' ldan 〔寺〕 35, 51

ガンデン・チューコル dga' ldan chos 'khor 〔寺〕
32, 82 (I)

キーロン skyid grong 26

ギェー・ハカン rgyal lha khang 〔寺〕 24,
33, 56, 80 (I)

ギェルシン rgyal zhing 26

キチュ skyid chu 69, 70 (I)

ギュトゥー rgyud stod 〔寺〕 33, 86 (I)

キュワン kyu wang 24 (II)

キョルモルン skyor mo lung 〔寺〕 34, 5
(II)

グゲ gu ge 49 (I)

ゲテン rgyal steng 〔寺〕 5 (II)

ゲーポ ngas po 78 (I) → ベンユル

ゲンチュ ngan chu 29

コン 〔ポ〕 kong [po] 78 (I)

サ行

サホル za hor 41, 18 (II)

サムイェー 〔寺／僧院〕 bsam yas 5, 26

サンブ 〔僧院／・ネットク〕 gsang phu [sne'u
thogs] 〔寺〕 7, 8, 34, 35, 51, 93 (I), 5,
77, 80, 120 (II)

シャラ sha ra 〔寺〕 33, 89 (I)

ジャン 'jang 〔寺〕 93 (I)

スピティ spiti 4, 7 (序), 49 (I)

スルプ zur phu 〔寺〕 34, 35

セラ se ra 〔寺〕 35

ソクチュカ sog chu kha 28, 80 (I)

タ 行

- 大菩提の閑寂処 byang chub chen po'i dben gnas
〔寺〕 48 → チャンチェン〔カンリ〕
タシルンポ bkra shis lhun po 〔寺〕 20
(I)
- タナダ rta nag mda' 140 (II)
- タブカワ stabs ka ba 〔寺〕 145 (II)
- タブパ grab pa 138 (II)
- タブオ ta bo 〔寺〕 7 (序), 49 (I), 24 (II)
- タンサク寺 thang sag 〔寺〕 82 (I)
→ ガンデン・チューコル
- ダンティク・シェルキヤンゴン 〔寺〕 tan tig
shel kyi yang dgon 46 (I)
- タンポチエ thang po che 〔寺〕 65 (I), 38
(II)
- チェーカ 'chad kha 〔寺〕 65 (II)
- チャユル bya yul 〔寺〕 33, 15, 64 (II)
- チャンチェン〔カンリ〕 byang chen 〔gangs ri〕
〔寺〕 48, 52, 118 (II)
- チュシユル県 chu shur rdzong 38, 93, 94,
100 (I)
- チルプ spyil phu 〔寺〕 102 (II)
- ツァケモ rtsa skye mo 23
- ツァナ tshar sna 100 (I)
- ツァン gtsang 48, 78 (I), 140 (II)
- ツェタン rtse thang 〔寺〕 17, 25 (I), 43
(II)
- ツェル・クンタン tshal gung thang 〔寺〕
34, 95 (I)
- ツェンド btsan gro 〔寺〕 75 (II)
- ダイクン 'bri gung 69, 78 (I)
- デブ 'gre phu 58
- デブン 'bras spungs 〔寺〕 17, 35, 36, 86 (I)

- デブン・ロセリン学堂 'bras spungs blo gsal
gling grwa tshang 33, 21 (I)
- デンコク 'dan khog 24, 58 (I) → デ
ンマ
- デンマ 'dan ma 24, 25, 57, 58 (I), 77 (II)
- トゥー stod 42, 45
- トゥールン stod lung 23, 92 (I), 64, 75
(II)
- トゥールン・デチェン県 stod lung bde can
rdzong 93, 96, 97 (I)
- ドカムメー mdo khams smad 42
- トデイン mtho gling 〔寺〕 24, 33 (II)
- ドメー mdo smad 46 (I) → アムド

ナ 行

- ナーランダー nālandā 2, 5, 5 (序), 83 (I)
- ナーレンドラ nāendra 〔寺〕 33
- ナクチュ nag chu 68, 80 (I)
- ナルタン snar thang 〔寺〕 48, 78 (I), 52,
118, 145 (II)
- ニェタン snye thang 19, 27, 45, 38 (I)
- ニェタン・デワチェン snye thang bde ba can
〔寺〕 34, 94 (I)
- ニェタン・ドルマ・ハカン snye thang sgrol
ma lha khang 〔寺〕 38 (I)
- ニェンチェンタンラ gnyan chen thang lha
23
- ネウスル sne'u zur 〔寺〕 69 (II)
- ネパール 4, 26, 56 (II)

ハ 行

- パボンカ pha bong kha 91 (I)
- パボンタン pha bong thang 34
- ハルン県 lhwa lung rdzong 46 (I)

プチュン phu chung [寺] 46 (I), 47 (II)
プラン pu rangs 25, 26, 49 (I)
フンドゥブ県 lhun grub rdzong 32, 52, 56,
78, 87 (I), 13, 46, 48, 69 (II)

ペルポゾン bal po rdzong 26
ベンガル 4, 18, 155 (II)
ペンボ 'phan po 32, 78 (I) → ペンユ
ル
ペンユル 'phan yul 23, 27, 29, 32, 33, 56,
69, 70, 78, 80, 92, 101 (I), 46, 48, 69 (II)

ポト po to [寺] 33, 34, 88, 92 (I)
ホユル hor yul 21, 45 (I)
ホル hor 45 (I) → ホユル

マ 行

マガダ ma ga dha 41
マルンドルジェダクラ rma lung rdo rje brag ra
46 (I)
マラ ma ra [寺] → マンラ
マンラ mang ra [寺] 33

メルドコンカル県 mal gro gung dkar rdzong

33, 69, 78 (I), 5, 65, 74 (II)

ヤ 行

有雪の国 (チベット) gangs can gyi ljongs
42, 53
ユナ yu sna 78 (I)
ユンワ yung ba 46, 48 (II)

ラ 行

ラダック地方 4
ラディン rwa sgreng [寺] 2, 23, 27, 28, 29,
33, 46, 48, 52, 69, 80 (I), 42, 45, 58, 93 (II)
ラトゥー ra stod [寺] 34
→ ニェタン・デワチェン
ラモチェ ra mo che [寺] 43 (II)
ランタン glang thang [寺] 33, 84 (I), 13
(II)

ルンショー klungs shod 28, 69 (I)

ロ lo [寺] 33, 19, 86, 102 (I), 64 (II)
ロツァ・ハカン lo tsā lha khang [寺] 33,
90, 101 (I)

書名

ア行

『アンイク・ドゥンチュパ』 *ang yig bdun cu ba* 59

『意闇払拭』 *tshad ma yid kyi mun sel* 8

『一切宗義』 *grub mtha' thams cad kyi khungs dang 'dod tshul ston pa legs bshad shel gyi me long* 8, 9, 13, 14, 15, 20, 39, 67, 9, 11 (I), 1 (II)

『ヴァイドゥリヤセルポ』 *bai dūrya ser po* 34

『有形象証明』 *sākārasiddhi* 13 (序)

『有情知足頌』 *sems can mgu ba'i tshigs bcad (sattvārādhana-gāthā)* 56

『美しき蓮華より生じたもの』 *rnam thar mdzes pa'i padma las 'byung ba* 66

『縁起心頌』 *rten 'brel snying po* 59

『〔カシミール〕王統史』 *kalhana (rājatarāṅginī)* 6 (序)

カ行

『カダム子法』 *bka' gdams bu chos* 62, 10 (I), 143 (II)

『カダム父法』 *bka' gdams pha chos* 50, 62, 10 (I), 143 (II)

『カダム文集』 *bka' gdams gsung 'bum* 2-3, 7, 8, 2 (序), 29, 41, 101 (I)

『カダム明灯史』 *gsal ba'i sgron me* 2, 15, 16, 17, 18, 19, 20, 23, 27, 30, 34, 41, 46, 66, 16, 30, 35, 62, 75 (I), 17 (II)

『カダムレクパム』 *bka' gdams glegs bam*

14, 18, 48, 50, 51, 62, 10, 66 (I), 141, 145, 147, 150, 153 (II)

『ガリ王統紀』 *mnga' ris rgyal rabs* 33 (II)

『稀観書』 (MHTL) *dpe rgyun dkon pa 'ga' zhig gi tho yig* 17, 52, 55, 57, 137 (II)

『行集灯』 *spyod bsdus sgron me* 54, 60

『空性七十頌』 *stong nyid bdun cu pa (sūnyatāsaptati)* 55

『口訣八頌』 *man ngag thun brgyad ma*
→『メンガク・トゥンゲーマ』

『孔雀により毒を制するもの』 *rma bya dug 'joms* 57

『ケーパーガートン』 *mkhas pa'i dga' ston* 20

『華嚴経』 *sangs rgyas phal po che (buddhāvata-ṃśakanāmamahāvaiṃpūlyasūtra)* 46, 56

『現観莊嚴論』 *abhisamayālamkāra* 6, 7

サ行

『子法』 *bu chos* →『カダム子法』

『勝楽タントラ』 *'khor lo bde mchog (cakrasaṃvara)* 65

『修心八句』 *blo sbyong tshig brgyad ma*
→『ロジョン・チクゲーマ』

『修心七義』 *blo sbyong don bdun ma* →『ロジョン・トンドゥンマ』

『修心武器の輪』 *blo sbyong mtshon cha 'khor lo*
→『ロジョン・ツォンチャ・コロ』

『修心陽光』 *blo sbyong nyi ma'i 'od zer*
→『ロジョン・ニメーウーセル』

『世界知識行』 *gser gyi thang ma* 101 (I)

タ 行

- 『大乘集菩薩学論』 *bslab btus* (*śikṣā-samuccaya*) 54, 56
- 『大乘莊嚴經論』 *mdo sde rgyan* (*mahāyānasū-trālamkāra*) 6, 54, 10 (序)
- 『大悲白蓮華經』 *snying rje padma dkar po'i mdo* (*mahākaruṇāpūṇḍarīkānāmamahāyā-nasūtra*) 46
- 『他世の証明』 *paralokasiddhi* 7
- 『チェーカーワ流ロジョン・ツォクシェーマ』
'chad tshul blo sbyong tshogs bshad ma 58
- 『チクゲーマ』 *tshig brgyad ma* 58
→『ロジョン・チクゲーマ』
- 『チャンキャ宗義書』 *lcan skya grub mtha'*
13 (I)
- 『中観の口訣』 *dbu ma'i man ngag* 54, 56,
60
- 『中観明句論註釈』 *dbu ma tshig gsal gyi ti ka*
7, 2 (序)
- 『中辺分別論』 *madhyāntavibhāga* 6, 10 (序)
- 『中論』 *rtsa shes* (*mūlamadhyamakārikā*)
55
- 『テブゴン』 *deb sngon* 52, 16 (I)
→『テプテルゴンボ』
- 『テプテルゴンボ』 *deb ther sngon po* 2, 15,
30, 34, 52, 8, 13 (序), 16 (I)
- 『デブン寺所蔵古籍目録』 *'bras spungs dgon du
bzhus su gsol ba'i dpe rnying dkar chag*
17, 13, 26, 161 (II)
- 『テンリムチェンモ』 *bstan rim chen mo*
52, 60, 8 (I)
- 『テンリムチュンワ』 *bstan rim chung ba*
60

『道次第解脱莊嚴』 *lam rim thar rgyan*
→『ラムリムタルゲン』

ナ 行

- 『ナムタルゲータ』 *nam thar rgyas pa* 33
(II)
- 『ナルタンギャツァ』 *snar thang brgya rtsa*
64, 154 (II)
- 『二諦分別論』 *satyadvayavibhaṅgavṛtti* 19
(序)
- 『入中論』 *madhyamakāvātāra* 8
- 『入二諦論』 *bden gnyis la 'jug pa* 54, 59
- 『入菩提行論』 *spyod 'jug* (*bodhisattvacaryā-
vātāra*) 54, 56, 117 (II)
- 『認識根拠の決択』 *pramāṇaviniścaya* 6, 7
- 『認識根拠の決択註』 *tshad ma nam par nges
pa'i 'grel bshad* 8
- 『認識根拠の集成』 (『集量論』) *pramāṇa-
samuccaya* (-vṛtti) 7

ハ 行

- 『秘密集会タントラ』 *gsang ba 'dus pa*
(*guhyaśamājatantra*) 6, 65
- 『百小部集』 *chos chung brgya rtsa* 52, 55
- 『ブトン仏教史』 *bu ston chos byung* 2
- 『父法』 *pha chos* →『カダム父法』
- 『分別心を除くもの』 *rtog ba 'bur 'joms* 57
- 『ヘーヴァジュラタントラ』 *hevajratantra*
6
- 『ベウブム・ゴンボ』 *be'u bum sngon po*
61, 62, 137 (II)
- 『ベウブム・タボ』 *be'u bum khra bo* 57
- 『ペチュー』 *dpe chos* 61, 139, 140 (II)
- 『ペチュー・リンチェンプンワ』 *dpe chos rin*

- 『宝行王正論』 *rin chen phreng ba (ratnāvalī)*
55, 56
- 『法集要頌經』 *ched du brjod pa'i tshoms (udā-
navarga)* 55
- 『宝性論』 *ratnagotravibhāga* 6, 7
- 『法法性分別論』 *dharmadharmatāvibhāga*
6, 13 (序)
- 『菩薩地』 *byang sa (bodhisattvabhūmi)* 54
- 『菩薩の次第』 *sems dpa'i rim pa* 57
- 『菩薩本生鬘論』 *skyes rabs (jātakamālā)*
55
- 『菩提道次第小論』 *lam rim chung ba* → 『ラ
ムリムチュンワ』
- 『菩提道次第大論』 *lam rim chen mo* → 『ラ
ムリムチュンモ』
- 『菩提道灯論』 *byang chub lam gyi sgron ma*
→ 『ラムドゥン』
- 『発心と律の儀軌』 *sems bskyed dang sdom pa'i
cho ga* 54, 59, 60

マ 行

- 『弥勒法の歴史』 *byams pa dang 'brel chos kyi
byung tshul* 10 (序)
- 『夢如意宝珠譚』 *rmi lam yid bzhin nor bu'i
gtam (svapnacintāmaṅkathā)* 56
- 『明句論』 *prasannapadā* 6, 7, 16 (序)
- 『明句論註釈』 *tshig gsal ba'i dka' ba bshad pa*

- 『メンガク・トゥンゲーマ』 *man ngag thun
brgyad ma* 46, 59

ヤ 行

- 『瑜伽行金剛歌』 *gyer sgom rdo rje'i glu* 57

ラ 行

- 『ラムドゥン』 *byang chub lam gyi sgron ma*
25, 26, 45, 52, 53, 54, 56, 60, 65, 8 (I), 9
(II)
- 『ラムリムタルゲン』 *lam rim thar rgyan*
49
- 『ラムリムチェンモ』 *lam rim chen mo* 45,
50, 52, 54, 61, 65, 8 (I), 35 (II)
- 『ラムリムチュンワ』 *lam rim chung ba* 50,
8 (I)
- 『レクパム』 *glegs bam* 62 → 『カダム
レクパム』
- 『ロジョンギャツァ』 *blo sbyong brgya rtsa*
9 (I)
- 『ロジョン・チクゲーマ』 *blo sbyong tshig
brgyad ma* 57, 58
- 『ロジョン・ツォンチャ・コロ』 *blo sbyong
mshon cha 'khor lo* 57
- 『ロジョン・トンドゥンマ』 *blo sbyong don
bdun ma* 57, 58, 121 (II)
- 『ロジョン・ニメーウーセル』 *blo sbyong nyi
ma'i 'od zer* 58

用語

ア行

尼寺 32, 33, 34, 48, 87, 92 (I)

イェルパ・ハリニンボの歌 *yer pa lha ri snying po'i mgul* 62

イスラム教〔徒〕 4

ウー・ツァンの10人(または6人) *dbus gtsang gi mi bcu (/ drug)* 21, 22, 48 (I)

優婆塞戒 *dge bsnyen* 24, 33

ウパデーシャ *upadeśa* 19, 7 (II)

縁起 *rten 'brel* 34, 48, 55

カ行

戒律(律) *'dul ba* 2, 3, 6, 21, 22, 23, 41, 42, 53, 64, 48 (I)

カギユ派 *bka' brgyud pa* 6, 14, 17, 48, 49, 9 (序), 25, 63 (I), 68 (II)

カダム・シュン派 *bka' gdams gzhung pa* 18, 30, 31, 32, 61, 76 (I)

カダム・ダムガク派 *bka' gdams gdams ngag pa* 18, 30, 31, 32, 61, 76 (I)

カダム派 *bka' gdams pa* 2, 3, 5, 6, 8, 9, 14, 15, 16, 18, 19, 21, 22, 23, 30, 31, 32, 33, 34, 35, 39, 40, 45, 47, 48, 51, 53, 54, 55, 56, 61, 62, 64, 65, 66, 67, 8, 10 (序), 16, 29, 69, 76, 78 (I), 68, 153 (II)

カダム派寺院 3, 31, 32, 33, 34, 35, 36, 47, 69, 78, 79, 101, 102 (I)

カダム仏教史 *bka' gdams chos 'byung* 2, 15, 16, 17, 18, 19, 35, 22, 35 (I)

カダム六宗典 *bka' gdams gzhung drug* 54

カムパルンパのロジョン・トゥンゲーマ

59

カラコルスム *kha rag skor gsum* 59

カルマ派 *karma pa* 68 (II)

観音菩薩 *spyen ras gzigs* 20, 45, 64,

帰謬論証 7

旧ナルタン *snar thang* 大蔵経 18 (I)

教誡 *gdams ngag* 14, 19, 20, 40, 45, 54, 55, 56, 57, 59, 60, 62, 63, 7 (II)

教次第 *bstan rim dams* → テンリム

経量部 6

旧訳〔密教〕 *gsang sngags rnying ma* 24 (II)

空行母 34, 44, 48

グゲ・プラン王国 *gu ge pu hrang* 2, 22, 41, 49 (I), 24, 26, 27 (II)

口訣 *man ngag* 14, 49, 54, 57, 59, 60, 61, 62, 63, 64, 65, 7, 129, 131 (II)

ク・ゴク・ドム・スム *khu rngog 'brom gsum* 62, 57 (I)

俱舎 6

クムチェースム *sku mched gsum* (御三兄弟) 30, 32, 33, 34, 41, 46, 47, 56, 57, 62, 63, 44, 45, 46 (II)

ケーバミスム(三賢者) *mkhas pa mi gsum* 21

ゲデン〔派〕 *dge ldan [pa]* 48, 50, 51 → ゲルク派

ゲルク派 *dge lugs pa* 2, 5, 6, 8, 14, 16, 18, 19, 32, 33, 34, 35, 48, 50, 51, 20, 21, 23, 34 (I), 4, 137 (II)

顕教 *mdo* 6, 32, 51, 64

顕密(顕教と密教) *mdo sngags* 4, 45, 47, 54, 65

ケン・ロブ・チュー・スム *mkhan slob chos*

gsum 42

講説法 tshogs chos 55, 57, 58

広大行派の系統 rgya chen spyod brgyud
60, 128 (II)

高地律 stod 'dul 22

後伝〔期〕(チタル) phyi dar 2, 3, 5, 20,
21, 23, 41 (I)

五隨念 rjes dran lnga 63

古代〔チベット〕王国 2, 3, 20, 21, 22, 58,
78 (I)

五論書 6, 7, 13 (序) → マイトレーヤ
(弥勒)の五法

金剛乘 rdo rje theg pa 64

根本四部 rtsa ba'i sde bzhi 41

サ 行

サキヤ派 sa skya pa 4, 5, 8, 14, 33, 35, 48,
50, 22 (I)

三士 skyes bu gsum 40, 9 (II)

三士の道次第 skyes bu gsum gyi lam gyi rim pa
40, 60

三蔵 20, 40, 42, 54, 64, 65, 66

三大寺 gdan sa gsum 34, 35, 74 (II)

四尊三蔵 lha bzhi chos gsum 20, 63, 64, 66,
153 (II)

四諦 bden bzhi 55, 47 (II)

枝末十八部派 gyes pa bco brgyad 41

釈迦 thub pa 20, 64

シャボガンパのロジヨン sha bo sgang pa'i blo
sbyong 57, 58

修心 blo sbyong → ロジヨン

16のティクレ thig le bcu drug 64, 152 (II)

ジュニャーナパーダ jānāpāda 流 6, 61
(I)

シュン派 gzhung pa → カダム・シュン派

シュンルク派 gzhung lugs pa 76 (I)

聖者流 6

ジョボ・カダム派 jo bo bka' gdams pa 50,
66

自立論証 7, 8

新カダム派 bka' gdams gsar ma 16, 50, 51
→ ゲルク派

甚深観派の系統 zab mo lta brgyud 60, 128
(II)

心部 sems phyogs 59

新訳〔密教〕gsang sngags gsar ma 61 (I),
24 (II)

説一切有部 6

前伝〔期〕(ガタル) snga dar 2, 3, 4, 5, 20,
10 (序), 41 (I)

ゾクチェン 59

タ 行

大印 phyag chen 49

大聖人の教えの伝統 drang srong chen po'i bka'
brgyud 66

ターラー sgrol ma 20, 26, 42, 44, 45, 64

大小のテンリム bstan rim che chung 52,
60, 88 (II)

大小のラムリム lam rim che chung 50

大中観 dbu ma chen po 8, 55

タクレン派 stag lung pa 68 (II)

ダムガク派 gdams ngag pa → カダム・ダ
ムガク派

タントラ 24, 42, 43, 54, 65

チベットの三大転生ラマ bod kyi sprul sku
rnam gsum 102 (I)

チャクラサンヴァラ cakrasaṃvara 153
(II)

チャンバ・プンスム(弥勒三兄弟) byams pa

spun gsum 56 (I)
中観〔派／思想〕 dbu ma 5, 6, 8, 24, 50, 51,
52, 54, 128 (II)
中観帰謬〔思想／論師／論証派〕 6, 7, 56
中観自立論証〔派〕 6, 7, 8
中伝 bar dar 41 (I)
著作法 brtsams chos 55

ディクン派 'bri gung pa 68 (II)
低地律 smad 'dul 22, 24
典籍 gzhung 14, 32, 45, 51, 53, 54, 55, 56,
59, 60, 61, 62, 63
テンリム bstan rim 14, 49, 51, 52, 60, 8
(I), 63, 82, 88, 129, 137 (II)

道次第 → ラムリム
ドゥラ bsdus grwa 8
ドーハー dohā 64, 155, 156 (II)
吐蕃 → 古代〔チベット〕王国
トンドウンマ 57, 58
トンレン gtong len 58

ナ 行

ナーローの六法 chos drug 6, 49

二諦 bden gnyis 55
如来蔵思想 6, 8
ニンマ派 rnying ma pa 28 (II)

ハ 行

パーラ王朝 4
パクモドゥ派 phag mo gru pa 17, 19, 25
(I), 68 (II)
般若 phar phyin 6, 52, 94 (I)
秘法 lkog chos 55, 57, 58, 60, 62
秘密の法 gsang chos 62, 129 (II)

ヒンドゥー教 4, 6 (序)

不動明王 mi g-yo ba 20, 64

ヘーヴァジュラ hevajra 153 (II)

法を榮えさせる居士 dge bsnyen chos 'phel
24, 46

マ 行

マイトレーヤ (弥勒) の五法 byams chos lnga
6, 7, 8, 5, 51, 13 (序)

密教〔教典／典籍〕 sngags / gsangs sngags
3, 6, 7, 8, 14, 19, 20, 32, 43, 47, 50, 53, 64, 65,
61 (I), 24, 155, 157 (II)

密教行者 sngags pa 43, 61 (I), 28 (II)

無住の大中観 dbu ma chen mo rab tu mi gnas pa
55

無上瑜伽 anuttarayoga〔母〕〔タントラ〕 6,
64, 65, 153, 157 (II)

メンガク派 man ngag pa 76 (I)

ラ 行

ラムチョク lam mchog 137 (II)
ラムリム lam rim 14, 50, 56, 57, 58, 59, 60,
61, 8 (I), 129, 137 (II)
ラムリム派 lam rim pa 76 (I)

リボ・ゲデンパ ri bo dge ldan pa 50
→ ゲルク派

ルン (息) rlung 58

六大寺 gdan sa drug 34, 35

ロジョン blo sbyong 14, 56, 58, 65, 9 (I)
論理学 tshad ma 5, 6, 7, 8, 51, 52, 93 (I)

ヤ行

唯識〔派／思想〕 5, 6

唯識形象虚偽派 sems tsam mam rdzun pa
56

瑜伽行唯識〔派／思想〕 8, 54, 128(II)

あとがき

この度刊行する『西藏仏教宗義研究』第9巻—トゥカン『一切宗義』「カダム派の章」—において、筆者は主に本論ⅠとⅡを担当した。担当部分は自身の学位論文である「後伝期初期のチベット仏教世界—カダム派を中心として—」（大谷大学2007年度）の一部を加筆訂正したものである。中でも本論Ⅱの和訳と註釈は、同じく学位論文のAppendixとして収録したものであるが、これは筆者が、2003年の西藏大学（チベット自治区ラサ市）留学中と2005年から2007年の中国蔵学研究中心（北京）及び西南民族大学（成都）における在外研究（松下国際財団の助成による）の期間に、西藏大学のケツン mKhas btsun 先生に指導をして頂いたものの成果である。同時期に、ケツン先生にはこの「カダム派の章」と合わせて、アティシャ著の『ラムドゥン（菩提道灯論）』もご教授頂いた。博士課程在籍当時の指導教授である荒牧典俊先生（京都大学名誉教授）、カンカル・ツルティム・ケサン Khang dkar Tshul khri ms skal bzang 先生（大谷大学名誉教授）、三宅伸一郎先生（大谷大学講師）からは丁寧なご指導を頂いた。さらに、福田洋一先生（大谷大学教授）には本文Ⅱについて草稿の段階で訳を見て頂き大変有益なアドバイスを頂いた。また『デブン寺所蔵古籍目録』や『カダム文集』の編纂者であるカルマ・デレー Karma bde legs 氏（ペルツェクチベット文古籍研究室）からはカダム派に関する新出文献について貴重な情報を頂いた。ここに記して謝意を表したい。

最後に、チベット研究に従事する者にとって、自身の研究成果をチベット研究の長い歴史がある東洋文庫から発表できることは大変名誉なことである。このような素晴らしい機会を与えて下さった東洋文庫と吉水千鶴子先生に感謝の意を表したい。ご協力頂いたガワン・ウースン氏、根本裕史氏、岡田憲尚氏、池尻陽子氏にも心より御礼申し上げたい。

平成23年3月

井内真帆

2011年3月22日 初版

非売品

西藏仏教宗義研究（第九卷）

—トゥカン『一切宗義』「カダム派の章」—

編著者 井内真帆
吉水千鶴子

発行者 東京都文京区本駒込2丁目28番21号
財団法人 東洋文庫
横原 稔

印刷者 東京都豊島区西池袋5-26-19 陸王西池袋ビル4階
中央印刷株式会社
日岐浩和

発行所 東京都文京区本駒込2丁目28番21号
財団法人 東洋文庫

本書は東洋文庫に対する2010年度文部科学省助成金の一部により刊行されたものである。

ISBN 978-4-8097-0241-9